

即ち、學校生活そのまゝと、家庭生活そのまゝの聯絡交渉を相互に理會と協力するのまゝに、國民學校の意圖するところにはほど遠いところのものであらう。謂はゞ、家庭生活そのまゝが學校教育の素材となり、學校生活そのまゝが家庭教育の地盤となるのでなければ、其の効果を實の上にみることは困難なことであらう。社會教育もまた同様で、時には兒童に及ぼす無意識的な教育感化は、學校教育よりも更に大きな影響をみることが多い、ことに、日本独自の立場に立ちかへつた國家教育は、東亞から世界の情勢を憶念してぢかに郷土社會にたつてゐるのであるから、郷土の自然的文化的事象は、悉く學校教育の素材となつて來たのである。従つて、學校教育の具體化も、また實踐化も、此處に出發しなければならなくなつたのである。

國民學校は新たなる出發を劃して、學校教育、家庭教育、社會教育の有機的統一を圖らねばならぬこともこゝに考へ得らるゝことと思ふ。

かつて私は、全村教育を唱導して、村學事會や村教育會の設立を願つて巡回指導を試みたことがある。それがために一部から「そんなことは役人？」のすることではない」と非難されたものであるが、今新しい意味で再びそのことを願つてゐる。全村教育は理論の上からも、實際の上からも論議を越えてその実績をみる事が出来る。しかも部落が小さければ小さい程効果

が明かである。時局は敵も味方もなく國內體制の建設を急いでゐる。協力一致は、全村教育の最も必要な条件の一つであるところからしても、全村教育の貫徹を期したいものである。

道 場

教師と兒童と接するところ、すべてこれ教育道場である。その教育道場の中心となるべく教師の立つところ、これ教壇である。教師の教壇に動きなき時は、教育道場また動きなき教育の方向が迷ひなく標示される。従つて、四五の室に飾られた黑板やカーテンのあるところのみを教室と思つてはならぬ。體操場であらうと、校庭であらうと、廊下であらうと、教師と共にある時は常に教室と思はねばならぬ。否教育道場であらねばならぬ。一尺高い壇がある故に、四五の教室に教壇があると思つてはならぬ。體操にもある。校庭にもある。廊下にもあることを知らねばならぬ。

更に、教壇の修行とは、限られた一時間の研究授業などの際にのみ、見られるものと思つて

はならぬ。やゝもすればこのことをあやまることによつて、教室を開放せよとか、教壇を撤廢せよとか、象牙の塔を出でよとかいふ聲をきくのである。吾々の教壇には、もつと廣い、もつと深い生命をもつてゐる筈である。吾々の教室には、もつと自由な、もつと融通のきく意義をもつてゐる筈である。よく教壇の修行としてみられる正味四十分の研究授業の仲間の集りは、その一部の姿をみきはめようとするにすぎぬのである。幾十の兒童——幾百の兒童——は、時に四五の教室に育てられ、時に幾千坪の校庭に育てられてゐることを忘れてはならぬ。教師もまた、其處に立つべき教壇のあることを忘れてはならぬ。

教壇の置き場所は、決して四五の教室に固定されてゐるのではない。もし、生活の指導をすべて學習とみるならば、ひとり教室や校庭ばかりではなく、教育の環境にあるところみな教育道場であらねばならぬ。吾々はそうしたところにも教壇あることを忘れてはならぬ。もし、かうした教壇のあることを忘れて、徒らに飛び出して青年と遊び、婦人と雑談に時をうつしてもそれは決して教室を開放したことにはならぬのである。象牙の塔を出たことにはならぬのである。此の本末を忘れてゐるが故に、指導すべき立場にある教育者が、指導さるべき立場にある人達に指導されてゐるのである。

吾々の教壇は高い。そして教室は廣い。しかし、立つべき心構へを忘れては、決して本縣の教育界の刷新は期せられない。私は、私の學校經營の中に、教壇を怠つてはならぬと言つてゐるのも、この心があるからである。

今日、最後まで抗日に闘えてゐる支那青年軍は、二十年來の抗日教育に養成されたものであるときいては、吾々が今教へつゝある兒童が、東亞の日本を、世界の日本を背負つて立つ十年後——二十年後の姿を見失つてはならぬのである。

教 育 行

昭十七年十月十三日、十四日の二日間、男子師範學校で開かれた初等教育研究會の第一日の發表をきくことが出來た。それこそ、涙なしにはきゝ得なかつた體驗ばかりであるどの一つをきいても、全心全力で精進して來た泪の體驗行のあとであつたからである。理論めいた角ばつた言葉はどの發表者からもきくことなしに、其れは何れも理論をつきぬけた實踐のあとであ

るだけに、自ら頭のさがるのを氣付かなかつたのである。全く戦場のあとをそのまま、眼の前に見せられた感激をもつたのである。

この泪の感激を長官にもみてほしかつた。この真剣な叫びを學務部長にもきいてほしかつたが、まことに遺憾なことであつた。思ふことを思ふまゝに言へないと言はれてゐる青森縣の先生が、こゝまで語られるところをきいてくれるならば、見てくれるならば……と、來賓席のあまりに淋しかつたこともまたうらまれてならなかつたのである。

「うらみごと」ではない。眞實の教育の姿なのである。「ひくつな歩み」ではない。一步も二歩も吾が身を先陣に只一筋に道に精じてゐる教師の眞の姿なのである。私は、かうした尊い發表を仲間同志だけで語られることを何時までも勿體ない様な氣がしてならぬのである。

一語もきゝもらすまいとしてゐる會員の眼のかゞやき一語も無駄な言葉を語るまいとする發表者の心からの聲、しはぶき一つない會場の嚴肅な雰圍氣、教育者の集ひなればこそ……と感激を一層深くしたのである。私は第二日の十四日には、郡青年團増産運動の收穫の日で、稻刈り巡視をしたのできくことを得なかつたが、おそらく二日間の研究会には今までにない喜びをもつて歸られたことゝ思ふ。

古川主事先生の批評會の結論も面白い。

「責められても容易に意見を述べ得なかつた會員も何んといふ素晴らしいことでせう。今日の間斷のない質問批評によつて、青森縣の教育はこゝに新たに出發したかの感がしてなりません……」

と、一面には皮肉にも聞えぬでもないが、實に古川主事先生の言の如く、青森縣の教育は今までにない真剣さと活潑さとをみせてゐるのである。青森縣の教育は最早や昔に考へられた様な青森縣の教育の動きではないのである。従つて、何も青森縣の教育は東京にまつてゐるのではない。青森縣の天地そのまゝが青森縣の教育の姿でなければならぬ。臆病であつてはならぬ。

何んの遠慮をするところなく敢闘すべきの時である。青森縣の教育は吾等四千五百の全生命力によつて營まれて行くのである。迷はれてはならぬ。おぢけてはならぬ。學校を道場とし學校を戰場として闘ふならば、たとひ、何人がおせつかいしたとしても、意にすることはないのである。十年おくれてゐると言ふ苦言を呈せられてゐる青森縣の教育界にも、かうした尊い姿のあることをお互ひ自負して、教壇に、經營に、教育報國の誠を盡すべきことを忘れてはならぬ。それが吾等の教育行であらねばならぬ。

試みに、發表者の心の一二を拾つてみよう。

「教育は消耗ではない。實に生産である。」と、まことに至言である。教育を消耗と考へるが故に、教育費を消費費として豫算に計上して平氣であるのである。是れは人を責むるまでもなく、教師自らに反省するところがないであらうか。一本の白墨の先にも大君の寶である皇國民が鍊成されてゐるのである。育つてゐるのである。一世を率ゐる宰相は國の寶であるならば、一本の白墨を握る教育者もまた國の寶でなければならぬ。縣下四千五百の教師が、しかも自覺して教壇に闘ふならば、教壇また戰場と同じく決死の覺悟で生きぬくことが出来ることであらう。爲政者もまた其處に指導の道を拓くことを知らねばならぬ。

だが道は甚だ遠い。越え來つた道をふりかへつてみるならば、たとひそれは半年であつても一年であつても苦難の道であるに相違ないことであらうが、其の苦難がまたいつまでもつゞくのである。それが町を離るゝ山間の學校に職を奉ずる教師ほど大きいのである。しかも責めらるゝことが多くあつても、賞めらるゝことのあまりにすくないことをうらむのである。

「孫婆さんが骨と皮にやせこけて爐邊に寝てゐる。八十を越して目が見えず、やつと耳が聞える位である。その娘さんと言ふのも婆さんで、七十に近い曲つた腰を伸しては薄暗い臺所でゴ

ソ／＼と仕事をしてゐる。孫の嫁が山頭で七、八反に近い田畑を一人で耕してゐる。

御親閥記念青年學校野外演習の意氣深い行軍に、感激を新たにして歸つて來た私を、鶴首して待つてゐて呉れたのはこの七十近い老婆であつた。家の前を流れる小川の杭に右手で體を支へながら、オロ／＼聲で山頭の嫁の病氣を訴へるのである。黄昏の空を背にして鮮やかに聳える杉木立の一山を越した下部落に學校がある。口もきけない程行軍と訓練に肉體を使ひ果して憩ひの我が家を思ふこと切なるも、「よし／＼どんな具合ですか」と、老婆に應へながら家に入つた。

薄暮時の家の中はホゲもまだ焚かずひつそりしてゐた、醫者でない自分に無醫部落の人々は斯くも信賴の念を抱いて呉れるのである。二色膏の準備がないので地獄ソバで即製のくされ膏をつくり、一升瓶のやうに腫れ上つた患部に應急の手當をして其の家を辭した。……と、私の頭がさがつた。重病でなければ醫者にも診て貰へない山の中の部落で、かうして御奉公してゐる先生を思ふと大勢の中で我がまゝを言つてゐる町の先生が勿體なくてならぬ。跣足で歩いて、傷ついて血を吹く兒に、「強くなるぞ」と言ふ自信の力、教育も此處まで徹底すると文句はない。「子供が出來なくて困る」と決して口にしまいと言ふことも、かうした先生だけにゆるさ

れることであるかも知れぬ。有りがたいことである。

けれども、眞の教育は、かうした山の中の學校にだけあるのではない。一校を經營するにしても、一學級を經營するにしても、其の根本は「魂の教育」である。一級一心、一校一心、それが更にひろまつて、一家一心、一村一心、一億一心……となるならば、大東亞戰爭完遂にまっしぐらに勝ちぬくことを信ずるものである。

「私の全心力は、たゞ子どもの生成のために生きることだ。」と學級に、學校に、それは、訓導であつても、校長であつても變りはない。只皇運を扶翼し奉る盡忠の皇民を育成することである。

以上は、其の第一日の大會に列して、記憶新たなる二三の問題を捉へたに過ぎない。若し、心してかくれたる教育の士を探ぐるならば、更に感激を深くするものが多いことであらう。學制頒布七十年、縣教育會は、さうしたところに心をくんで、翼賛の實をみるのが大事である。

涙

私はこゝで思ひ出を辿ることにする。大正二年の四月赤き血に燃えた若き教育者を自らに任じた私は、遠大の理想と抱負とをいだいて海岸のある學校へ赴任した。そこは海岸と言ふのは名ばかりで、寧ろ農村と言つた方がいゝかも知れない一寒村であつた。荒んだ海はこの數年來少しも漁獲がないので、男の大半は出稼に行つてゐる。そして、残された女は僅かの田畑に働いてゐた。

其の秋！農村は思ひがけない凶作におそはれたのである。初めて社會の荒波にさほされた若き教育者を任じた私は只なすところなく一年を過ぎてしまった。栄養不良の教へ子が、外米の御飯さへ食へることが出來ずに、體操場の隅のうすくらがりにもこまつてゐるのを到底見るに忍びないで、幾度か一人住居の住宅に連れ來つたことであらう。けれども、缺席兒童は一日一日と多くなつて來た。ある日など、半數にも足らぬ兒童を四五の教室に入れこんで、教科書をもつたまゝ教壇に自らの足らざる力をうらんだこともあつた。四ヶ年の間教はつたヘルバルトの五段教授も、こゝでは何等の用にも立たなかつたのである。

生活に虐げられつゝ心にもない苦しみを吾が子にまで背負はせてゐるのだとは知りつゝも、

やはり督促せねば出席歩合の低下の理由で、成績不良の學校と公表されるおそろしさに無理にも涙をのんで出かけたこともあつた。

「この子供はお前の子供ではないぞ」

吾が子の先生を、「お前」と言ふまでに親の心が荒んでゐるのかと言つて、校長先生と二人、そのまんま歸つたこともある。鹽焼の鱒一片で、外米四割、麥二割の夕飯を一人食べながら、過去四ヶ年の師範教育があまりに社會生活の實相とへだたりのあることを、泪ぐまずには居られなかつたのである。

大正二年の秋から三年にかけては、私に國語教育もなかつた。算術教育もなかつた。修身教育もなかつた。たゞ青黒くなつた榮養不良の兒童ばかりが眼にちらついてならなかつたのである。

麗かな春の陽はおもひなげに柔かな風に漂うてゐた大正三年四月の或日、さら／＼と流るゝ赤石川の土堤にはふつくらと猫柳が芽を出してゐた。缺席兒童督促がへりの私は、ハンカチをして暫らく疲れた身體をじつと水の面にみいつたのである。無心に流るゝ水の面には一枚の泥葉が浮きつ沈みつ流れてゐる。

僅か一年の凶作がかうも人間の心を慌しくするものであらうか。でも有りがたいことである。やつぱり吾が子を思はぬ親はたゞの一人もないのである。此の頃、吾が子に教ふる先生がどの様に悪口を言はれても、幾度前拂ひを食はされても、

「今のうちに一字でも覚えさせて置いたら……」と、月に幾度となく訪ねて懇談する教師の心にあたゝめられて、いつとはなしに親の瞳に一ばいの泪が見えるやうになつた。私はたゞそれだけでも喜んだのである。けれども、食はねばならぬ。生きねばならぬ人間のあさましさを一錢でも働いて糧をとらねばならぬかなしさに、僅か十歳の可愛い、吾が子にも四里の山道を歩かせて、炭焼のお辨當を背負はせねばならぬ親心を思ふ時、泪もろい私は遂ひ泣かずには居れないのである。

四月とは言へ、まだ四方の山々は消え残る雪にまばゆく輝いて、岩木の嶺はくつきりと間近に裾をひろげてゐる。畔傳へに芹つむ娘はなぶる春のやは風にもすそをまかせてかすかに戀の唄を唄つてゐる。なんとと言ふ靜かな自然であらう。かうした靜かな自然のふところに抱かれてゐる同じ人間でありながら、食はんが爲め、生きんが爲め、まだ芽を出して伸びたばかりの吾が子の世界を無理にもかきむしらねばならぬ親心をまたしても思はずには居られないのであ

る。

「なんとかしたい……なんとかしたい……」

いつか聞いたことがある。自分の俸給の全部を教へ子のために提供した先生の話をきいたことがある。僅かのお金でもさうした役に立つのであつたら……と思つても見たが、身にあまる借金をしてまで私を卒業さしてくれた年老いた父と母とがまつてゐることを思ふと、それも出来ないことを情けなく思ふのである。

「なんとかしたい……なんとかしたい……」

たゞかう心のうちで思ふだけである。

はるか深山から流れ來つた赤石川は、水底に青い空をうつして大海に注いでゐる。今の今まで幾千人のかけ幾萬人のかけをうつしたことであらう。けれども水の流れは常に静かである。

悔 い

私はおそろしいことをしてゐた。督促に督促されてやうやく出て來たその児童を、私はどんなにして教へてゐたことであらうか。伸びんとする児童を——育たんとする児童を——伸びんとする児童を——しかも弱い児童を——私は幾度ふみにじつたことであらう。幾度おどかしたことであらう。生みの親が食はんがために可愛い吾が子を山に疲勞せしめた。そして三日に一日は學校に出席させてゐる。その児童を——育ての私は、一日も早く優良教員たらんとしてか弱い疲れた児童を教室に入れ込んで更にどれほど疲勞せしめたことであらう。教壇にたつて幾度劣等児呼ばはりをしたことであらう。幾度青筋をたて、記憶を無理強ひしたことであらう。肉も疲れ、心も疲れきつたか弱い児童を、なんの爲めにせめたたのであらうか。そして、凡てを児童の罪として、自らを責めることを忘れてゐたのである。なんといふおそろしい優良教員であつたことであらう。

場 の 育 教

かう思つた時、何かしら私の心に明るい道が拓けたやうに思はれたのである。そして、私は決心したのである。食はんが爲めの親の心と一しよにならう。疲勞しきつた児童の心と一しよになつてやらう。たとひどの様なおそろしいことが上からおほひかぶさつて來ても……

「學校は休んでもいい、その月の生活が少しでも見當がついたら、一日でもよいから學校

へ出してくれ——」

是れが、それからの督促の私の言葉であつた。

「疲れたでせう。さつぱりするまで眠りなさい。眼がさめたら一しよに勉強させよう。」
是れが、それからの私の教室であつた。

「いとしき兒童よ——私は、今日から、たつた今からお前達の遊び仲間だ。話相手だ——
勉強のお友達だ。一しよに手をつなぎあつて、まつすぐな道を歩いて行かう。」

それからでした。一週一日の出席は、五日に一日となつた。四日に一日となつた。三日に一日となつた。そして二日に一日の出席となつた兒童には、生々とした血が流れて來た。遅刻があつても、早引きがあつても責めることをしない。只手をつなぎあつてゐる時に、學ばんとする心、働かんとする心を培つてやりたいと念じただけである。

取入れにいそがしい秋の一日——此の頃朝仕事の爲めに始業時におくれる兒童がかなりになつた。始業時前四十分に出かけた私は、見なれぬ一人の紳士の後姿を見た。私はいつも職員室に行く前、とにかく教室を一巡するのがくせであつた。そして、兒童の出席の状況を見て安心して職員室にはいるのである。今日もまた其のくせが出て、そのまゝ教室を一巡して職員

室に行つてみると、其れは郡視學であつた。

「ずるぶんお早い御視察で」

と挨拶したが、きこえないのか？ 校長と別な話をつゞけてゐた。一日の授業を終つて職員

室へ行くと、

「いゝへ座れ……」

と言ふことだ。そして、

「君は今朝、挨拶を忘れたね」

とのことである。今朝からのことが若い青年教師の心をいらだたせてゐるところへ、授業の批評でもしてくれるのかと思つてゐたらなんのこと……とう／＼辯解する氣持が飛んでもないところへ飛んでしまつたのである。

「御尤もで……ですが郡視學さん、先に挨拶するしないはたいした問題ではありませんが、御視察になつてもつと大事な問題がありませんでせうか。本郡の教育界の賑不賑はかゝつて郡視學さんの御指導の如何にあること、思ひます。たかが御挨拶をあとにする先にするなど、云々するのでなしに、もつと大事なところをみていたゞきたいものです。例へば

……」
と言ひ出したら、

「君まアい、……そんな失禮なことを言はずに、もつと郡視學さんのお話をきけつ……」
と校長にきめつけられたので、だまつてしまった。よせばいのに、遂ひ若氣を出して言つたことを、今思ひ出しても、其の頃の非禮な態度に冷汗を覺ゆるものである。

其の頃

「朝明けや森一ばいの閑古鳥」

其の頃の私は、あの白露にしつとりとぬれた朝明けの森にすが／＼しく太陽が輝いた時、青葉の森を聲一ばいにひゞかせて閑古鳥が枝から枝へとびまはるやうな氣持で、毎朝學校へ出かけることだけであつた。正直のところ學校中心とか、校長中心とか言ふ大きなことを考へるにはあまりに若かつたのである。しかも自分のなした其のことが、學校長の責任を問はれること

になつたり、學校經營の障碍になつたりすることがどうにも不思議でならなかつたのである。二年——三年——子供一つに進んで來た道が、愈々複雑に愈々不可解に、私の理想を亂して、ともすればその向上と進展に怠慢をみる様になつた。

月二冊の讀書も一冊となり、それが二ヶ月に一冊となり、年に一度の縣外視察もどうかすれば實現出來ない様になつた。「おそろしいことだ」と時には反省することもあつたが、やつぱり若い心の煩悶を大きくするばかりである。

其れから何年かの後、私は津輕富士のふもと——一分教場に命を奉じて、卒業以來初めての轉任の心を味つたのである。冬から春にかけての半年は、荷馬車さへ通らぬ山路の細道を一日旅の草鞋にふみしめたのである。見送る人も見送らるゝ人も、只涙のまゝに別れたことも「先生なればこそ……」と今も臉にうかんでくるのである。私は此の時位すべての姿を靜かにみつめようとしたことはなかつたのである。しかし、喜んだのはその村の人達であつた。いまだかつてない若い先生——しかも師範卒業の本科正教員のバリ／＼が轉任して來るのだときいた村の人達は、山の冬道を遠しとせず本校まで迎へに來てくれたのである。きけば一戸一人づつの全部落の出迎へだと言ふことである。初めてふれた人情のあたゝかさに、青年教師の頬には人

場 の 育 教

知れず涙が流れてゐたのである。

「何年でもここに居よう……」

私は、心から村の人達に感謝したのである。

「きつと、今度の先生はながく居てくれるにちがひない、あんなに荷物を運んだんだもの……」

村の人達のさうしたさゝやきも私を喜ばしてくれたのである。

「やつぱりよかつたね」

妻の乳房につかまつて、母に甘へてゐる我が子をみながら、しみぐと語つたことが幾度あつたかわからぬ。しかし、私が此處の深山の分教場へ引込んだと知つた多くの友達は、決して喜んでくれなかつた。私は、今も記憶してゐる。かう書いてやつたことを……

「お手紙有りがたう。だが、私は今、すべてのことを眞剣に考へつゞけてゐる。私に與へられた今の道が、それはいゝことであるか悪いことであるか解決がつかぬことであるとしても、是れまで歩いて來たながい道にほんたうの喜びを掴み得なかつたとすれば、みじめな小さい虚榮や地位に誘惑されて、大事なく私自身の育つて行く魂に傷ついてゐることに

氣が付かなかつたことをおそろしくなつて來たのである。私は、もつと深く考へねばならぬことを知つたのである。それが、眼の前にはなやかに描き出されてゐる文明の生んだ教育——から捨てられてゐる深山の子供を見た時、それをそのまゝに放つて置くことはあまりに道に對して不忠實であることの驚異を知つたのである。私は別にむづかしいことは言はぬ。私は、私のほんたうの心の底から湧いて來る愛の力でもつて……親の子に對する絶對の愛の力でもつて……この深山の子供達を育て、行つて見たい。どうかしばらくの間私を沈黙さして下さい。それはいゝ意味に於ける沈黙……」

山すまるの生活は、ひとり子供との生活ばかりではない。青年との生活もある。壯年との生活もある。老年との生活もある。お祝ひごとから悲しみごと、さては無盡講から婆様連の地藏尊の生活まである。そして此處の部落には實に自由主義もなければ個人主義もない。靜かに見守る山すまるの生活には、たゞ全人愛の眞實の教へだけであつた。

世は移つて昭和の今日、しかも今次大東亞戦争に勝ちぬく大きな教育の力を、山間の雨漏に校舎に餘念なく精進してゐる先生を眼の前に見て、そゞろに三十年前の若き其の頃を思ひ出したのである。

教壇一念

今日の教壇は、今日の教壇に一念することによつて子供が育つて行くのである。今日の教壇を明日の教壇にまつてはならぬ。「今日一日の教壇」、「今日一日の教壇」、其處にたゆることのない反省と精進を見るならば、教壇一念の尊い一日一日が重なつて、教壇一生の眞實の姿も其處にあらはれることであらう。

それは、町の學校の教壇であつても、田舎の學校の教壇であつても變ることがない。またこれは、大きな學校の學級であつても、小さな學校の學級であつても變ることはないのである。たゞ其處に立つて専念する教師その人の心構へによることが多いのである。

更にこの心そのまゝに教壇を通して、今次大東亞戦争に處するの道を求めなければならぬ。まことに大東亞戦争に勝ちぬくこともまたこの心より外にない。大東亞戦争を外にして大東亞共榮圈の確立もないし、建設もないのである。國民の凡てが大東亞戦争に一念して、日々精進

することによつて勝ちぬく力がいよゝ築きあげられるのである。がまんすることも、不平を言はぬことも、みなこの一念によつて求められるのであつて、もしこの一念を忘るゝならば第一次歐洲大戰のドイツの其の如く憂慮すべきことも考へられることであらう。

實に教壇に憶念するところのものは、大東亞戦争を外にしてないのである。一念するこの教壇こそ國民教育忠實なる姿なのである。だが、教壇修行にはこれにて盡くるといふことがない。若しこれにて「よし」と思ふことあらば、すでにそれにて教壇修行を怠る心の芽生えであることを知らねばならぬ。

「今日の一——まこと最善を盡したるか」

と反省するところに、教壇修行の一生を通してお國へ奉公が出来るものと知るべきである。よきにつけ、あしきにつけ修業となるならば、與へらるゝものに自ら満足してたゞ一念お國への奉公と思はねばならぬ。思ひを深くするならば、今日の日本は、そのまゝ日々の教壇に顯現するのでなければ、國民教育の徹底を期することは出来得ぬことであらう。山村の教師は山村に満足し、漁村の教師は漁村に満足し、農村の教師は農村に満足して求むるに私利榮達の便に心のむくことがなく、只一念教壇に精進するならば、心自ら平らかに御奉公が出来ることゝな

らう。興亞教育が強調されてゐる今日、ゆめ此の心を失つてはならぬ。だが興亞教育の教壇は國民教育の教壇の外にあるのではない。國民教育を徹底するところに興亞教育の教壇があるのである。此頃、やゝもすれば「鍊成」の聲にまどはされて、合宿訓練することのみが興亞教育と考へたり、國防競技會を開くことのみが興亞教育と考へたりするところがある。興亞教育は實に日々の國民教育の教壇に徹するところに顯現するのである。明日の教育ではない。今日の教育に徹することなのである。

教壇一念も、この心に狂ひがあると、決して大東亞戦争を勝ちぬいて行く子供が育たぬのである。

私はいつか、吾等の教壇は常に東亞の天地を憶念するのにならぬと言つた。世界の天地を憶念するのにならぬと言つた。吾等はすでに昨日の日本人ではないのである。日々の教壇に徹する國民教育に、實にさうした興亞の天地に立つてゐることを、かりそめにも忘り忘れてはならぬのである。吾等は常に國民教育に徹することは、即ち、興亞教育に徹することであるとの一念を教壇に忘れたくないものである。

教壇動行

教壇動向

國民學校經營の實績を現實に生かすも生かさぬも、一に吾々國民教育者の覺悟如何にあるのである。然らばその覺悟は何處から出發し何處に歸ることであらうか。それは謂ふまでもなく日々教師が踏んでゐる教壇、日々行じてゐる學習教室である。換言すると、吾々お互ひが守つてゐる教壇を、お互ひの死に場所と覺悟するところにあるのである。教壇を離れては教師の生きる場所がないと覺悟するところにあるのである。

しかし、間違つてはならぬ。私は今、教師の生死の場所は教壇だと言つたが、この教壇をお

互ひがチヨークをもつて立つてゐる、あの三尺に六尺のせまい、有形の教壇の事だと考へてはならぬ。前にも述べた通り、刻々に展開しつゝある東亞の現實の姿が、一つの教室に結集しつゝあらはれる教壇のことである。即ち、東亞の場面を、常に一教室の中に縮約結集せしめて、これを念じつゝ吾々は教壇の上に仆れることが、實はそのまゝ身を大陸の山野の中に横へる意義をもつてくるのである。従つて、吾々は國民學校の教科書を手にして、有形の教壇に立つた時は、その手にした教科書を通して、その背後を貫く新東亞建設、世界新秩序建設を如何にして教室の中に凝集縮約せしめることが出来るかといふ、無限なる生命力を統一する有形の教壇を超えた教壇を言ふのである。その有形の教壇の活殺の權は、お互ひ教師にのみ與へられた天地であつて、またその教壇を離れては行はれ得ないのである。

教壇修行に道を求むる意義も、ここにその尊さを知ることが出来ることであらう。職域奉公の道も、またこゝに考へ得られることと思ふ。實に、吾々教育者の眞の御奉公は、日々の教育の行道に於いて、常に職を賭して、そのあるべき處を一步／＼歩み行くことに存するのである。吾々は、眞に道に任ずる態度を忘るゝことなく、廣く深く、現實の大野を占める教育者としての魂の覺醒に精進することを、お互ひに誓約して、國家の爲めに身命をさゝげて奉公しなければならぬ。

ければならぬ。

自信と指導

自信なくして教壇にたつてゐる教師程おそろしいことはない。それは恰も醫師として病人に投薬する時、何等の確信なくして手當をする様なものである。育つて行く兒童は、やがて大將大臣となるべき素質をもつてゐるかも知れぬ。もし不幸にして自信なき教師に育てられたが爲に、其の輝やかかしき將來を失つたとしたならば、何をもつて謝すべきであらう。しかし、さうした將來の問題は、今日の教壇に見えざるが故に、その責任を問はることがないが、教壇にたつてゐるお互ひは、常に忘れてならぬ大事なことである。

學校經營の實績は、一に根氣の問題に歸すると言はれてゐる。ことに躰の問題については、全く兒童と教師の根氣比べに盡きると言つてもいいのである。だが、この根氣はどこから出て來るかと言ふと、それは、教師の自信からである。教師に確固たる自信があればこそ、兒童と

の根氣比べが出来るのである。根氣比べは哲學でもなければ、倫理學でもない。實に教師の「必ず出来る」といふ自信の一つである。しかも是れは、學校長の命によつてするのではなく、教師自らの自主的良心にまつより外にないのである。

自信とともに教壇に大事なことは教師の指導である。教育に指導がなければ兒童の學力が向上しない。指導のない教壇は教師のない教壇と言つても宜しい。「無指導は教育にあらず」と、八波先生に教へられてゐるが、國民學校になつて、いよく此の覺悟を新たにせねばならぬ多くの問題を與へられてゐる。

例を國民科國語讀方にとつてみよう。もとく國民科國語讀方の文章は、少年雜誌の様に、教師なくして讀み得る讀物ではない。文部省が自修書を禁止したのは、其の意圖何れのところにあるか分らぬが、雑誌や繪本の様な讀物は

作者——↓讀者

と直接的關係にあるが、讀方の文章は

作者——↓教師——↓兒童

と間接的關係にある讀物である。繪本や雑誌の讀物は、作者名を記してゐるが、讀方の文章

は作者名を記してゐない。そして初めから教師といふ仲介者を豫想してゐる文章である。従つて、教科書は自修書でもなければ普通の讀物でもない。どこまでも教師といふ指導者がなければ讀解し得ない文章で出来てゐる。このことをはつきり分つてゐなければ、教壇上の國民科國語讀方の取扱ひに根本的な狂ひを見ることであらう。そのためにも、教師用書の精讀を忘れてはならぬ。

出發點

あまりに通俗な例ではあるが、運動會で言ふと、全兒童を出發點に立たせて置きながら、立つてゐる全兒童の姿を見失つてゐる教師が多い。従つて出發の合圖と共に全員走つて行く筈の出發點に、ボンヤリ残つた兒童をそのままに置き去りにして、走れるものだけ走らせ、途中疲れて落伍するものは落伍のままに、一切後をふりむくことなしに決勝點に走つて行くのである。決勝點について「さて」と見たときに、それは粒選りのものだけより着いてゐないのに初

めて狼狽し、今更の如く後をふりむいて「オーイ〜走つて来い」と手をあげて決勝點へ呼んでゐる様なものである。是れではどうにもならぬことであらう。出發點に立たせた以上、必ず合圖と共に全兒童を走らせるのでなければならぬ。もし、ボンヤリして走り得なかつた兒童があつたら、「ソレ走れ」と元氣付けてくれる事である。途中落伍しさうだつたら「今少し」と力添へして決勝點まで頑張らせることである。然して、よく走るものはよく走らせ、おくれるものにはおくれぬ様元氣づけて走らせ、一人の落伍者もなく決勝點までたどりつかせるのでなければならぬ。これが教師の生きた指導なのである。よくかうしたことをきく。「今日は大變出來がよかつた」とか、「今日はどう言ふわけか出來が悪かつた」とかと。是れは、大てい舉手といふ誤つた定規によつて線を引いてゐることが多いので、ほんたうの兒童の向上して行く力によつて言つてゐるのではない。此のことは、よく〜心してみなければならぬ。その多くは教師の責であつて、兒童の責でないことを知らねばならぬ。かう言つたからと言つて、學習の初めつから終りまで、一本の舉手も見ない様な授業をせよといふのではない。舉手にとらはゐることなく、兒童の會得する眼の輝き、答へる力、舉手の動きを内に求めよと言ふのである。私は同人にかう言つてゐる。「兒童が出來ないのでなく、教師が出來ない様に指導してゐるのだ」と、靜かにこの言葉を味つて貰ひたいものである。

四、五の教室に、四十の兒童、六十の兒童をつめ込んでゐながら、ともすれば、その四十の兒童、六十の兒童全部を、是が非でも育てなければならぬのだといふことを忘れてゐることが多いのである。とくに、初めて教壇にたたれる助教のために、此の一節を加へたのである。

躑

國民學校は「躑」のことをやかましく言つてゐる。しかし考へてみると、國民學校になつたから「躑」の問題が出て來たのではなく、小學校の時から「躑」の問題があるのである。たゞそれが、外の問題に邪魔されて眞劍に考へることを強ひられなかつたまでである。従つて、「躑」の問題はそのまゝに残された國民學校への課題となつたのである。

「躑する」と言ふことは決して兒童を叱ることではない。兒童の自由な行動を、兒童の素直な生活を無意味に押へることではない。大人の生活をもつて律する禁止命令の合言葉をもち

て、「躑する」のだと思つてはならぬ。教壇上からみる「躑」は「躑する」ことそれ自らが學習することなのである。「躑」は伸びくと子供が育つて行く糧であらねばならぬ。「躑する」ことによつて、窮屈な身動きの出来ない型に入れこんで、子供らしさを失つてはならぬのである。「躑する」ことによつて子供が元氣付き、「躑する」ことによつてすくくと喜んで育つよ
い日本の子供となるのでなければならぬ。だから、「躑する」ほんたうの心を、教師も兒童もはつきり知つてゐるのでなければならぬ。例へば、

「なんのために姿勢を正しくする躑をするのか」

「ハイと返事する躑は何のためにするのか」

「勉強する時、眼を先生からはなさぬ躑することは、子供をどんなに育て、行く力となるのか」

と、はつきり分つてゐるのでなければならぬ。坐ること、起つこと、鉛筆のけづり方、教科書の持ち方、ノートの使ひ方、室の出入り、みな「躑」でないものはない。「擧手」する小さな「躑」一つでも、其の一日の學習生活を大きく左右することがあることを思ふと、「躑」に對する考へに少しでも狂ひがあると、どんなに子供の將來を禍するか分らぬことと思はれてな

らぬのである。

だが、多くの教師は、「躑」することを「叱聲」にしてゐる。子供から子供らしい生氣を奪つて、如何にもおづくした窮屈な子供にしてゐる。初等科一二年の子供は兵隊ごっこはするが「教練」はしないのである。「兵隊ごっこ」から「教練」までの心構へと錬成は、子供をよく知つた教師の指導の力に俟たねばならぬ。其處に「躑」の尊さを納得しなければならぬ。子供をよく知つた教師の力は、決して「躑」に無理がない。狂ひがない。素直である。自然である。

「やつぱり罪は教師に多し」

と反省すると共に、「躑」の精神をはつきり知ることが大事である。そして、「躑」が素直に自然に、「躑けられる」様に環境を整へることを忘れてはならぬ。「躑」は其の場に於いて、現地指導することが最も効果があるからである。更に、「躑」は「躑」することなくして、「躑」になつてゐるまで錬成するのではなければならぬ。「躑」に根氣が大事であることも、またうなづかれることであらう。

個別指導

あらゆる面に統制が叫ばれ、全體意識が強調される様になつてゐるから、この個別指導の問題が、全く忘れられてゐる様になつた。また、さうしたことを考へることが、最早國民學校としていけないことの様に思つてゐるのではないかと思ふことが多い。このことは、此の頃多くの學校を見せて貰つて、五十の兒童、六十の兒童を一つの教室に入れて、一齊的に取扱つてゐる學習の實際を見てゐると、どうしてもこのまゝには捨て置けない様な氣がしてならぬのである。しかもこのことは、學級といふ一つの社會生活を全面的に、全一的に優良ならしめようとすればする程、強く考へさせられてならぬのである。部分／＼の優良なるものゝ集りは、必ずしも優良であるとは言ひ得ぬかも知れぬが、而し、特別の事情のない限りは優良であるといふことを理論としてではなく、實際の問題としてなつとくされてゐるので、いよ／＼個別指導の重要さを反省されるのである。

然らば、如何にして此の個別指導を充全なるものにする事が出来るであらうか。それには先づ、何故に個別指導せねばならぬ兒童が出来たかといふ、兒童の特質を調査せねばならぬ。

かうした調査は、國民學校になつてから、事務が多忙になつたといふ理由で、非常におろそかになつて來たことは、否定出來ないのである。即ち

(一) 先天的素質によるもの

- (1) 生れながらにして優良な素質をもつてゐるもので、如何なる教材にもその知解思考の働きが充分なる兒童か
- (2) 生れながらにして非優良な素質をもつて、如何なる教材にもその知解思考の働きがな

いものか

- (3) 其の中間の素質をもつて、或る點までその知解思考の働きがあるものか

の調査である。尤も、生れながらにしての調査は困難なことであるから、入學當初からの調査でいゝのである。更に

(二) 環境の影響

- (1) 恵れたる環境にあつて、自由に學習の發展を展開し得るものか
- (2) 全く恵まれぬ同情すべき環境にあつて、その努力も精進も達し得られぬものなるか
- (3) 所謂普通の環境にあつて努力の如何によつてはどうかなる兒童であるか

の調査である。是れらの調査によつて、それ／＼個別指導の方法を工夫することである。かつては、入學當初の児童の、語彙の調査や、數觀念の調査をして、これが基礎的鍊成の具體的指導方法を工夫研究したものであるが、助教の教師が増加するにつれて、この調査が困難となり、師範の卒業生までが、助教の仲間入りする様になつて、其の第一歩から落伍する児童の多くなつてゐることは、何んとしても遺憾なことである。

私はこゝに、再び此の問題の大事なることを提唱して同志の研究を願ふものである。

さて、もし此の研究調査が出来あがつたとすれば、これを如何なる方法によつて個別指導の實際をみることであらうか。こゝでは、個別指導の理論的なことは一切さけて、助教の教壇であつても可能な實際問題を、次に申述べることにするが、しかし、此の問題は決して新しい問題ではない。當然考へなければならぬ此の問題を、全く忘れてゐる教壇を多く見せられるので、とくに節を新たに述べることにする。

學習個別化

それは學習の個別化である。

其の第一は、一齊學習個別化である。即ち、一齊學習の中に、個別指導することである。是れは全體の児童を指導しつゝ、常に個々の児童を指導して行くことである。前述の調査によつて個々の児童の一切が分つて居れば、是れが指導の具體的な事項が考へられるのである。例へば、發問の問題でこれを考へて見よう。

其の教材を知解する最高の問題を發問すれば、優良なる児童が了解し、最低なる問題を發問すれば非優良なる児童にも了解し得るのである。是れ一齊的取扱ひの中に個別の指導をみての發問である。また、最低とみた児童の實生活にある一事項が、もし、優等なる児童の實生活に全くない場合、其の事項を其の最低の児童に發表させることも、また個の指導を全體の學習の中に見出したことになるのである。従つて、前述の調査に萬全を期してゐるならば、問題の如何、教材の難易、等により、それ／＼個の指導を全の生活として、指導する工夫が如何様にも見らるゝのではないかと思ふのである。

行動壇教
私はこの立場から、同人達に、

「二問題を發問した時、其の瞬間に舉手した兒童は誰々か、舉手しない兒童は誰々か、まご／＼してゐる兒童が誰々か、全兒童の心の動きがそのままに見えるか」

と言つてゐるが、大ていは、

「舉手した兒童より見えない」

と言ふのである。是れではならぬ。個別指導と言ふと稍もすると、放課後其の兒童を残して置いて特別指導することか、机間巡視して其の兒童の學習を一寸のぞいてやることか、考へてゐる教師が多いが、決してそれだけに限つたことではない。一齊の中に個別、全の中に個のあることを常に忘れない指導こそ、ほんたうの個別指導なのである。

其の第二は、兒童の學習隣組である。兒童の能力によつて隣組を組織するのである。此の際注意することは、優劣を組合せることも宜しいが、非優の兒童は非優なる兒童で隣組を組織する試みである。即ち、優は優、劣は劣の組である。是れは、優と劣の場合は、常に優のために押へられて劣の自負心を傷づけることが多いからである。劣は劣で研究工夫すると、全く豫想しない新しい効果のあることを知ることであらう。これが世界を驚かす發明發見の緒となるかも知れぬ。また、指導する氣構へからすれば、秀才教育も實現されるわけである。一面凡人教

育の大事であると同時に、なんとしても秀才教育は緊要の問題である。學習隣組によつて是れが達し得られたとすれば、幸ひである。

其の第三は、隣組輪讀會である。是れは、優劣混成の大きな隣組である。最初は、教師指導して大體の要領を會得した頃を見はからつて、優なる兒童を司會者として自由に兒童に行はせることである。もし、此の學習隣組と、隣組輪讀會の二つの方法が、家庭にまで延長され得る事情にあるならば、全く兒童の學習態度が新たまることであらう。

たゞ、問題は教師の努力である。學習の要點から、参考書辭書の取扱ひ等これが學習態度の馴致、優良可の能力に應じての問題指導等、一通りの努力ではいかぬからである。

「何も我が教へ子の爲めに」

さうした熱烈な教育愛に燃えてゐる若い教師に俟つところが多い。だがその若い教師達は、何んといふ力ない一日の生活を送つてゐることであらう。何んといふ賢い生活に、教壇をおろそかにしてゐることであらうか。

戦捷のまゝに新たまつたこの昭和十七年は、何もかも蹶然と起ちあがらねばならぬ年である。それには、何んとしても若い教師の力に俟たねばならぬ。年寄りの教師に、いらざる氣苦

勞をさせることなしに、助教の教師を引き連れて、それこそ體あたりで教壇に精進して貰ひたいものである。ひとり學校經營だけが戦時體制であるのではなく、學級經營も、教壇生活も、一切が戦時體制でなければならぬ。一語の語りにも、一本のチョークにも、戦時體制の動きがなければならぬのである。學習個性化もまたそれであらねばならぬ。

個 性 化

他人の教壇をみて、其の教式をまねようとする時であつても、また其の人の説をきいて「なる程」とうなづいた時であつても、やがて自分のものとする時には、決して生のまゝに置いてとり入れてはならぬ。必ずわがものとなるまで、これを消化することが大事である。此のわがものとして消化することは、即ち、個性化することである。個性化したものは、たとひそれがどんな偉い人の説であつたとしても、それはすでにその偉い人の説ではなく、われのものである。たとひそれがまたどんな平凡な考へであつても、それはわれにとつて實に尊いものである。

従つて、わがものとなつた以上は、堂々とどこへ行つてもわがものとして説いていゝのである。とてつもなく謙遜したつもりで

「これは〇〇先生の……」

などと言ふことは、決して言ふべきではない。これを教壇の上にもつて來て、教式のことを考ふると一層強く反省していゝのである。

教式はその人によつて異なることであらうが、初歩の教壇としてはどうしても指導をうけなければならぬことであらう。だが一たびうけたならば必ずわがものとして工夫研究することを怠つてはならぬ。それは指導された教式を個性化するためである。個性化された教式はわがものとなるからである。教式の個性化は實に難にして、しかも實に易なことである。求むる心に怠ることがなければ、僅かの時日をもつてしても個性化されるのである。教式の個性化は徒らに時日を要しても、研究がなければ出來得ないのである。必ず個性化さるべき努力と工夫がなければならぬのである。参考書や雑誌の抜き書きに終始してゐるは、何年たつても個性化されぬことを知らねばならぬ。

行 動 壇 教

個性化されない教育に育てられた兒童は、決して眞實な姿に育つて行かぬのである。教師の

ふところに飛び込んで来る魂の教育は、個性化された教式によつて營まれて行くのである。個性化された教式は教壇に自信をもつてくる。自信なくして立つ教壇位不安なことはない、自信をもつて立つ教壇には、力強い兒童が育つて行くのである。

たゞこゝに忘れてならぬことは、其の個性化は孤立した個性化であつてはならぬ。何人に説いても、なつとくを興へる理論をもつてゐなければならぬ。そのためには、なんとしても勉強しなければならぬ。

「教育の眞諦は自己を育つるにあり」
と、言葉をよくく味ふべきである。

若い教師よ

此の頃、私は若い先生達から、こんなことをきく、

「かうしては居れない。しつかりやらうと元氣一ぱいで學校へ出て、職員室へはいると全

くうんざりする。あの沈滞した空氣に、はりつめた元氣もなくなつて了ふ。」
と、また、

「校長のゆがんだ顔を見ると、新計畫の進言も出來得なくなつて了ふ。」
と、一日私のところへやつて來た若い先生も、やはりこのことをいかにも革新的な口吻で言つたので、老人の私も負けては居れなくなつた。

「なんたる卑怯な言であらう。なんたる體裁のいゝ態度であらう。なんたる逃避的な心情であらう。これで、革新をさげび、これで人前に、おれは若い教師だ、とよくも平氣で出られるものだ。」

と、そのいかさまな賢さを叱りとばしたら、

「先生——それは無理だ。若い先生はみんなそんな氣持であるのです。」
とのことである。

「吾だいかと思つたら、みんなそんな考へであるのか、それなら尙更いけない。やつてみる——はりつめた元氣があるならば、そのはりつめた元氣でなぜやらぬのだ。うんざりする空氣があつたら、なぜその空氣を、はり飛ばしてやらぬのだ。顔のゆがんだ校長があつ

「たら、なぜゆがんだ顔を直してやらぬのだ。それから後でいゝ、その賢さうな言葉は……」
私は更に言つた。

「ほんたうに學級に道を求め、ほんたうに學校に道を求めてゐる若い教師であつたら、舊い頭の學校長に言はれても、教壇に精進しない様な若い教師が一人もない筈だ。此の頃の若い教師の教壇のさもしさをみてゐると、なぐりつけてやりたくなる程だ。それ程老人連中が沈滞してゐるなら、今日も鍊成會だ、明日の鍊成會だと會ばかり鍊成してゐないで、毎日の教壇に精一ばい鍊成してみる——」

とやつたものだ。かうなると老人案外心臓が強くなる。まかりまちがつたら、教壇上で一騎打もしかねない元氣だつたので、

「さア〜叱られに來た様なものだ。」

と若い先生遂々逃げ出してしまつた。

だが、心せよ、老人達よ——若い教師はこんなに燃えてゐるのだから、思ふ存分やらしてくれ。一切の文句はあとにして、やらしてくれ。やらせていけなかつたらその後始末をつけてやればいゝのだ。なんとしても革新は若い教師でなければ出來ない相談なのだ。

若い教師も、一切を預けられたらノ、ホ、ホ、ホ、をきめてゐないで、ぐんぐんやつて見せてくれ。増俵がどうの、賞與がどうのと、そんな話をしてゐるだけ野暮だ。私の様な老人は、もう見て居れなくなつた。とてつもない賢いやりかたでなく、要領のいゝやりかたでなく、ほんたうの心でやつて貰ひたいのだ。

理念を理念として思索しゐる間は、決して革新にはならぬし、進歩もないのだ。理念を實踐の姿に理論づけて行く姿の一つ一つにこそ、革新も見られるし、進歩もきづかれて行くのである。これは、ひとり若い教師ばかりの問題ではない。若がへつてお國のために奉公しなければならぬ老人の教師には、更に大事なことであらう。いや、それよりも、若い教師だの、老人の教師だのといふことを忘れて、一しよに手をつなぎあつて頑張ることにしよう。一切がお國の爲めである。

かう考へてくると、私は、

「要領よくやることだ」

といふことを、とても不快に思はれてならぬのである。要領よくやることは、常に主體としての自己を磨いて行くことになしに、對者に對しての巧利的な内容をもつてゐるのである。

理念が智慧によつて照らされ、それが実践に行じられて行くときは、たゞ誠の心の一つであつて、要領よくなどいふ様な、其の場の素通りを體裁よくすることなどは思はれぬことである。何も眞劍であらねばならぬ。

若い教師よ——本氣でやれ。ほんたうに本氣でやつてくれ。私は常にそれを願つてゐるのである。

興亞教育

感 激

(1) 其の 日

想起す——

昭和十六年十二月八日、午前六時、大本營陸海軍部發表。

「帝國陸海軍は今八日未明西太平洋に於て、米英軍と戰鬪状態に入れり」

との凜然たるラジオの聲は、一億國民の心を一つに集め、大八洲の津々浦々にまで響き渡つた時の感激——お互ひにだきあつて、

「ワァーッ」

とおどりあがつた感激の日も、こゝにめぐり來つて二年——其の日珍らしくも晴れ渡つた初冬の天空を仰いで、

「萬歳く」

と連呼しながら走りまはつた感激も、また新たなものがあつた。纏て、

長くも宣戦の大詔は嚴かに喚發せられて、愈々國民は興奮の極度に達したのである。

「米英討つべし」

との聲は、遂に

「打倒米英」

「米英撃滅」

となつて、こだまするかの如く大八洲の隅々まで叫ばれたのである。

あゝ——其の感激、其の興奮——

只大稜威の有りがたさに合掌感涙——一切を捧げて國難に赴くことを堅く／＼誓つたのである。

再び巡り來つた今日——吾等はこゝに思ひを新たにして其の日の感激そのまゝの教壇を行ずることを再び堅く誓はねばならぬ。

大東亞戦争は人の言ふごとく長期戦であつてはならぬのである。すくなくとも吾等の日々の教壇は、即戦即決の建設戦争でなければならぬ。徒らに、過ぎ去つた戦果に陶醉してはならぬ。また、徒らなる樂觀を將來にもつてはならぬ。吾等は常に再び巡り來つた此の日の感激と決意をもつてゐなければならぬのである。まことに、十二月八日の一億國民の心は、畏くも奉戴した大詔の心そのまゝに潔く身命を皇國に捧げた誠心なのである。

吾等は、吾等の教へ子に此の誠心をはつきりと、きざみ込まなければならぬのである。それは、

「明日の教壇」

にきざみ込むのではない。

「今日の一日」「今日の一日」

の教壇にきざみ込むのでなければならぬのである。

縣下五千の吾等同志——再び巡り來つた此の日の新たなる感激——吾等は此の新たなる感激

をそのまゝ日々の教壇に堅くお誓ひしようではないか。

(2) 年 頭

聖戦第三年——輝かしい皇紀二千六百三年を迎ふるにあたり、縣下五千餘の同志同行の吾等は、茲に縣教育新發足と共に必勝の覺悟を新たにして、只々大御稜威の下に一命をさぐる忠誠をお誓ひしたいものである。

それは學校經營にあつても、學級經營にあつても、教壇精進の上にあつても少しも變りのないことである。實に教壇は吾等の戰場である。戰場を外にして吾等に教壇はないのである。吾等の生活はないのである。縣下二十萬の小國民はまさに皇國の小國民として必勝の戦ひに育つてゐるのである。

もし、吾等の教壇に、戦ひ勝ちぬく小國民として育つて行く姿を見失つたならば、吾等また、はたさねばならぬ使命に最も不忠實なる者と言はねばならぬのである。否、不忠實なる者と言ふだけではすまされぬのである。

何故ならば、此の昭和十八年こそ嵐を孕んだ最もおそろしい年だからである。日本は今、アメリカ、イギリスの第二包圍陣を斷乎として突破しなければならぬ大事なところにつき進んで

ゐる、それが昭和十八年なのである。アメリカ、イギリスは今、敗れても、執拗に反攻を續けて、最初の第一包圍陣をとりもどさうとしてゐるのである。それが昭和十八年なのである。

大東亞共榮圈建設に、一新紀元を劃する成否の年は實に昭和十八年だからである。

徒らに過ぎ去つた戦勝に酔ふてはならぬ。徒らなる樂觀を明日にもつてはならぬ。縣下五千餘の同志同行の吾等——新たなる年と共に、青森縣教育會も青森縣教育振興會と改まり、一切の機構も強化して新たなる發足をしたのである。黙して語らざる過去的一切を清算して、只一途、教育報國に一命をさぐべく敢然起つて、勝ちぬく戦ひに進軍の歌を今こそ高らかに歌はふではないか。

必勝の心にいのるあかつきの

岩木の嶺は高く晴れたり

死ぬ覺悟

月月火水木金の猛訓練を二十年間決死の覚悟のまゝに、人知れず續けて來た軍人の尊い魂は、今日の戦ひに赫々たる武勳をたてゝゐるのだと思ふと、

「今日の一日」「今日の一日」

そのながい間の、

「今日の一日」

の精進努力こそ、まことの修行の道なのである。

軍人は戦場に行くとかへつて樂だと言ふことをきいてゐるが、教師が研究公開の教壇に立つて樂だと言ふ聲をきくことがない。何も一命を賭する戦場が樂なのではない。日々の猛訓練が死生を超越してゐるところにさうした境地があるのである。教師が公開の教壇に四苦八苦の醜いさまをみせてゐることは、まだく

「教壇に死ぬ」

といふ修行の覺悟がないからである。此のことは是れまで幾度言つたことであらう。

大東亞戦争には、最早前線もなければ銃後もない如く、吾等の日々の教壇にもまた二つの教壇があつてはならぬのである。毎日が、

「決戦」

の教壇であらねばならぬ。

「武士道とは死ぬこととみつけたり」

是れは、「葉隠」にある誰でも知つてゐる言葉ではあるが、日本武士道の精髓を打ちこんだこの言葉をそのまゝに、吾等日々の教壇に語ることは出来ぬものであらうか。

私はまた、合掌のまゝ九軍神のことが思ひ出される。死を決してより幾年——しかも従容として己が身を挺する特別潜航艇の研究を完成し、しかも己が枢として眞珠灣深く突撃したあの壯絶なるしこのみたての大精神——大義武士道の權化と仰ぐも、あまりに勿體ないことである。

日本の軍隊は、この大義的武士道の大精神で訓練されてゐるから強いのだと、今更に世界を驚かしてゐるのだが、日々皇國の道を教壇にといつてゐる吾々には、何故驚かぬのであらうか。

「海行かば水漬く屍山行かば草むす屍」

大君の邊にこそ死なぬかへりみはせじ」

それは、毎日子供と共に歌つてゐる。だが、歌つてゐるだけではすまされぬ。毎日死ぬこと

と背中合せに戦線にゐる將兵の心そのまゝに、吾等また教壇に死生を越えて戦ひつゞけなければならぬ。

縣下五千の吾等の同志——覺悟はよいか、昭和十八年の新しき年を勝ちぬく爲めに、教壇に死ぬる覺悟はよいか——

興亞教育

教師の修養は、其の使命である教育の目標に向つての一切の修養でなければならぬ。即ち、國民學校の向ふところに身を挺して、具體的には大東亞戦争の現實に生きる修養でなければならぬ。而して、日々の實生活は、國家の向ふところに臍を堅め、一切を其處に求めるのでなければならぬ。理念も實踐も其處に狂ひを生じては、國民學校はなりたぬのである。教師の修養も自ら其處に育みをみるのでなければならぬ。

今や國家は、大東亞共榮圈確立の大勲業完遂のためにあらゆる努力と犠牲を國土に賭してゐる。

大和民族の當然生くべき東亞の天地に、百年のながき年月にわたつて搾取と暴戾を自由にふるまつて來た米英人を驅逐して、明朗潤達な東亞民族の自由的共榮圈を建設する爲に、あらゆる苦難と闘つてゐるのである。國民學校は是れが指導者としての大國民となる若き世代の教育を、現實の問題として考へなければならぬのである。教師は其處に修養の具現をみることを忘れてはならぬのである。

わが青森縣教育是に、「興亞教育の作興」といふ一項がある。國家はまた、大東亞教育の體制確立に、すでに論議を進めてゐる。興亞教育は最早作興にあらずして實踐の徹底でなければならぬ。教師は其處に修養の活眼をひらくのでなければ、再び百年の悔を見ることであらう。興亞教育修養活眼の一つは、教師自ら革新生活に隨順することである。自らが肇國の精神に生き、自らが大東亞の指導者としての世界的大國民たる風格を持ち、自らが大東亞の天地から米英浸潤の文化生活を驅逐して、しかも日本的なる東亞文化、否世界文化創造に心命を賭する大覺悟をもたなければならぬのである。

興亞教育

教師は此の修養の生きた力によつて、若き世代の小國民を日々の教壇に育てあげることす時も忘れてならぬのである。大東亞諸民族開放のために戦つてゐる聖戦占領地にして、もしこ

の力が見らるゝならば、眞の文化生活の惠澤に浴し得る諸民族の歡喜は、實に自らの開放に酔ふことであらう。だが今のところ、それは彼方に遠く美しく咲く花園への道である。その花園へ力強く一步一步、歩みつゞける爲には、自ら立つてゐる足下の一步一步に力強さがなければならぬ。

活眼の二つは、教育、軍事、政治、産業等、一切を現實生活に打ちたて、思想に、科學に勞働に、政策に一億一心體力制、高度國防國家の教育具體事項體得に邁進することそれ自體でなければならぬ。而もそれが、日々の教壇に、鍊成の一つ一つとなる具體事實となるのでなければならぬ。教師は其處に丹念なる修養を怠りなく續けるのでなければならぬ。政府は新しく大東亞建設審議會なるものを設けた。興亞教育に關はりをもつてゐる教師には、決してこれを視忘れてはならぬ。しかも是れを、あらゆる教育部面に於て、現實の生活事實にみるのでなければならぬ。

此の頃、「日本の教育體制」とか、「國防的教育體制」とかいふことをよく口にする様になつた。それはいかなる理念に立脚してゐるかなど、論議未消の問題にこだはつてゐることではない、これが整理確立のために、如何なる困難をも突破することが、最大の急務であることだけ

はうなづかれることであらう。

物心一如の日本精神具體化が、興亞教育の根本的な指標であるといふことが、なんだか分つた様な氣がするのである。教師の修養はこゝに大きな使命をもつてゐるのである。

言ふまでもなく、吾々はすでに昨日の日本人ではないといふよりも新らしい日本人となつたのである。かつては夢の様に描いてゐた大東亞の盟主としての日本は、今や現實の姿として、その覇業を築きつゝあるのである。従つて、新らしい人生觀、新しい世界觀にたつた日本人として、大東亞共榮圈の指導者となるのでなければならぬ。教育もまた、理想としての鍊成ではなく、現實に處する生々しい皇國民鍊成の教育であらねばならぬ。抽象的な人道ではない。觀念的な規範ではない。具體的な、日本といふ皇國の道に行ずる日本人としての鍊成教育であらねばならぬのだ。其處に教師としての修養に狂ひがあつてはならぬのである。

興 活眼の三つは、俱に學び、俱に進む知行一如の師弟行に精する修養である。集團訓練にして、勤勞作業にしても、兒童だけの訓練であり、兒童だけの作業である間は、決して鍊成生活は生きて來ない。或はまた、學校行事を行事として訓練づけてゐるのであつては、たとへ武道訓練にしても、國防訓練にしても、眞の皇國民鍊成とはならぬのである。どこまでも、俱行俱

進の師弟行にたつて錬成するのたなければ、堅實なる實踐力とはならぬのである。

大東亞共榮圏は、大東亞戦争の眞只中であつて、戦ひつゝ建設してゐるのである。教師また児童と俱に戦ひを行じつゝ一切の錬成に俱に育つて行くのでなければならぬ。教師の修養は其處に目ざめ、農村は農村として、山村は山村として、漁村は漁村として、それらの實情に應じての俱行俱進であらねばならぬ。

活眼の四つは、體位の向上に教師自ら範を示すことである。教師はたま／＼であつても病床に呻吟する様では、児童の健康を叱することが苦痛である。教師は常に心身一如の錬成に自らの修養を怠りなく、児童に垂範するのでなければならぬ。身體が弱ければ戦が出来ない。心が弱ければ思想に迷ひを生ずる。國防の強さは科學の力と相まつて體位の向上にある。氣魄も氣節も健康の持主であつてこそ論じられる。教師の修養もまた其處にあらねばならぬ。

行すべき修養、錬成すべき幾多の修養もあらうが、こゝでは其の二三を述べたに過ぎない。

少國民文化

日本はながい間、米英的な文化生活に蝕まれたと言つても、一般國民の生活には、民族としての特性をもつた文化生活が、何處にか喰ひ込んでゐるので、何かの機會にはいろいろな姿に於て、ひとりでに現はれて來ることをみるのである。

然るに、幼少の頃出發點から、米英的な教育思想に訓育された少國民にあつては、その殆んど完全には是れを失つてゐることに氣付かずにあるのである。従つて、小學校時代には、明治から大正、更に昭和にかけて、尙民族本有の特性を残して來た年中行事にしても、娯樂行事にしても、少しも關心をもつてゐないのみならず、さうしたことに執着することが、如何にも文化生活におくれてゐたかの實狀にあつたのである。

ところが、やうやく日本本來の姿に立ちかへる様になつた此の頃になつて、奥ゆかしい行事として再び是れが特性を眞剣に見直す様になつたのである。そして、今日の少國民の文化的な生活を全面的に是正することを要請せられるに至つたのである。

直接是れが大東亞戦争完遂に役立つことであるかないかの論議をまつことなしに、所謂自由主義、個人主義に浸潤されて、今次の大東亞戦争完遂の支障になつてゐる國民文化の生活部面

を徹底的に洗淨する爲には、大いなる力となつてゐるのである。しかもそれが黨化育成こそ吾
 吾國民教育の任にあるものゝ、寸時も忘れてならぬ重大な問題であることを知らねばならぬ。
 「皇國の道に則りて」と言つても其皇國の道に基く少國民文化の建設を、稍もすれば教育の視
 野の外に置いて、忘れ勝になつてゐるのが國民學校の現状であると思ふ時國民鍊成の上に一層
 その國家的重要性を知るのである。

結論を言ふならば、眞に日本の特性を具有した少國民に育成されてこそ、皇國の道に則る
 國民學校の兒童となるのである。従つて、實に純粹なる日本の特性をもつた少國民文化によ
 つて育成することを忘れてはならぬのである。

私はこゝに、少國民文化の建設を検討する爲に、四つの部面から是れをながめて見たい。

第一は、學校生活自體の文化的育成の部面である。第二は、家庭生活による少國民としての
 文化的生活の部面である。第三は、社會生活によつて建設されて行く文化部面である。第四は
 藝術創作生活によつて陶冶育成される少國民文化の部面である。しかも此の四つの部面の生活
 は、常に表となり裏となつて少國民の文化生活を建設してゐるのであるが、私は、第二、第三
 の問題は暫らく置いて、第一の問題と第四の問題についてとくに述べて見たいのである。

國民學校は、與へられた教科書を通して少國民としての一切の精神を鍊成されてゐることは
 言ふまでもないことである。しかもそれが、所謂雜務（實際はこれも少國民としての文化材で
 はあるのだが）に追はれてゐる現在の教師としては、精一ぱいの努力なのである。勿論、教科
 書にもられた教材以外に、幾多の鍊成資料があるといふことを知つてはゐるが、それを巧みに
 活用し、豊富にして新たなる少國民文化材とすることは、實に容易な努力では成し得ないので
 ある。而して、活用さるべき教科書以外の文化材は、その多くが藝術的創作の生活部面である
 が爲に、是れを自由に消化していさゝかも不安なく活用することは、今日の教員組織では一層
 困難な實狀にある。しかもその大半が、少國民の讀物であり、音樂であり、遊戯であるところ
 から、其の生活部面は限りなく擴大されてゐるので、更に、困難を加へてゐる。

直接文化材としての教科書は、一定の方向を示して、その育成さるべき少國民としての日本
 的な魂、日本的な特性を明らかにしてゐるが、創作品としての讀物は、是れを少しも示して居
 らぬので、其の育成さるべき性格は時と、場所とを問ふことなしに、實に容易に、しかも瞬間
 的に、深刻に影響するのである。また讀物に比してそれ程ではないが、音樂も然り、舞踊然り
 繪畫然りである。それに、ラジオ、映畫の如く、實に大きな文化部面をもつてゐるものまで、

自由に與へられてゐるのである。

勿論、昨今の藝術創作家は、大東亞戦争完遂の意志を通して、少國民に與へようとする日本的性格を丹念に書き綴つてはゐるが、しかし、教師の指導なくしてその影響するがまゝに放任して置くことは、思はざる教育訓練の狂ひのあることを知らねばならぬ。

従つて、吾々教師に最も必要なことは、先づ少國民に與へられてゐる創作品に對して、あらゆる困難をのり越え一通り眼を通すことである。子供と共に映畫を観、子供と共にラジオに耳をかたむけ、子供と共に舞踊を知り子供と共に音楽を楽しむことも皆々そのためであらねばならぬ。

然らば、教師は如何なるところにたつてその指導目標を方向づけることであらうか。それは何んとしても、教師は確固たる日本的世界觀にたつて是れを指導することである。吾々の今日の生活は、大東亞戦争を外にしてはいさゝかもゆるされないのである。學校經營、學級經營、教壇生活すべてこの事を忘れてはならぬ。私は是れまで幾度となく言つて來たことではあるが大東亞を憶念し、世界を憶念し、大東亞共榮圈確立のために、大東亞戦争完遂のために、一切の生活をさゝげることは、今日の日本少國民の文化生活の出發點であり、歸一點であらねばな

らぬ。それはみな三千年の尊嚴なる歴史をもつて、民族の血となり、肉となつて傳つて來た忠孝一本の道によつて、具現される生活でなければならぬのである。

『君がため何か惜しまん若櫻』

散つて甲斐ある命なりせば』

大東亞戦争の緒戦に於て、彼の眞珠灣の海底深く散つて軍神と仰がれてゐる九勇士が、ながい間その日のある事を覺悟して、特殊潜航艇の研究に一切の生活をさゝげ、しかも自分の柁とする潜航艇の完成に、從容として日々の研究を續けた盡忠の誠心そのまゝが、少國民の血となり、肉となつて魂を育んでくれることを忘れたとしたら少國民の文化生活指導もまた反省しなければならぬことであらう。

勿論この精神は、あらゆる作家にも求めなければならぬことではあるが、しかしそれは吾々が要求しても望むべくもないことであるから、吾々はすくなくとも現實に與へられた少國民の文化材に對して、充分の用意と準備をもたなければならぬ。

此處まで考へを進めると、學校教育はせまい學校だけの教育ではなく、教師の力の及ぶところに學校教育は活かされるのである。最近少國民文化の問題を眞劍にとりあげてゐることは、

すでに中央には日本少國民文化協會、設立され、また學校放送教育や映畫教育施設によつても知られるが、私は此の立場から、とくに文化部を設置して、學校教育に於て授けたものは勿論校外に於て得た音楽や遊戲等を、一つの戰時創作品として、教師兒童共に實演することにつとめてゐるのである。即ち、學校内の教育と、學校外の教育とを一元化して、再び戰時下の學校教育の姿として見ようとしたのである。(作品略)

此の實演によつて、ともすればその時だけで忘れ勝な音楽も、遊戲も、時局問題も新たなる意味に於て體得されると同時に、斷乎として戦ひ勝ち抜く日本の精神が自ら培はれ、米英撃滅の敵愾心がいやが上にも昂揚されるのである。

最早國民文化は、一部限られた國民の占有すべきことではなく、國民全體のあらゆる生活部面に育成される問題であると共に、大人の世界だけのものではなく、生れると同時に考へなければならぬ問題である。

私はかつて同志と共に、「青森童話研究会」を設立し今は故人となられた小沼之雄先生と「童話と文選」を刊行して縣下の少國民文化運動にのり出したことがある。だが、その頃は少國民の文化教育を全く學校教育と分離して考へてゐたので、此の運動は四年ばかり續いて遂ひ中止

するのやむなきに至つた。今日から考へると實に遺憾に堪へないことであるが、さりとて再び縣下に呼びかけるだけの元氣を今はもたぬので、只自ら經營する學校を中心にして専念するだけである。

言ふまでもなく、大東亞戰は武力戦だけではない。激烈なる文化思想戦でもある。此の際少國民の文化思想を堅實に育成することは、實に緊急の問題とせねばならぬ。

けれども、私は今縣下五千餘の同志に、少國民文化の根本理念の究明を求め、また日本少國民觀を確立してその實踐に参加せよと言ふのではない。私もまた、それを究明するだけの力をもつて居らぬが、もし、是れが爲に少國民文化指導の實踐を臆劫にしては、一日の急を要する此の運動に、百年の悔ひを残してはならぬからである。盲従でもいゝ。先づ實踐にその姿を見出すことである。而して道を究めていゝのである。私は、あらためて此の運動を提唱する。

第三編 修養指針

教師の道

愛と權威

一切を無条件でお預りした大事な人の子を育て、行く教育者に、一寸も忘れてならぬことは「愛と權威だ」と言つたヘルバルトの言葉を、教育の先生から聞かされたことは今もつてそのまゝ耳の底にのこつてゐる。一校を經營して子供の實生活を眼のあたりにみて、それが一つ一つ育てられ、育まれて行く子供の姿を、よきにつけ悪しきにつけ同僚の言葉のうちにきく時、一層いたましい氣持になつて新らしく思ひ出されて來るのである。

愛情をもつて接するのだと言つても、それは口にだけ容易なことであつて、實踐にはなかなか困難をとまふことであることを承知してゐながらも、ほんとうに心の内に燃えあがつてくるまでには、なみ大ていの精進では出來がたいことを、獨身であればある程、邪心の多いことをどうすることも出來ない問題にぶつゝかるたびに、あまりにもぞんざいに教へてくれた教育の先生の言葉をうらむのである。それが一寸考へると、男の先生に多い様に思はれるが、實際は女の先生に根強く、しかもなか／＼巧妙にくひこんでゐることを今更におどろくものである。

教育者はまさしく親心をもつて子供を愛するものでなければならぬと、人も言ひ、吾も信じては來たものゝ、肉身の情愛をもつて、己れを捨てようとする教育者は、やつぱり百人に一人かと自らの徳の至らざるに悔ゆることが、まともに教育の事實をみればみる程多くなつてくるのである。

道 教師の道

子をもつてはじめて知る親心とはよく言つたもので、親心の親心たる所以は、たゞ「可愛さ」にある。顔がきれいでもきれいでなくとも、頭がよくともよくなくとも、わが子だから可愛くてたまらないのである。なんとかして一人前に育てたい……立派な人間として育て、世間に出したい一ぱいの心持は、妻と二人の寝もの語りにもなるし、夜の目も眠らずに働く氣力と

もなるし、食ふものも食はずにがまんして學費を稼ぐ努力ともなるのである。それでゐて少しも子供に求むるところのないのは親心である。私はこのことを思ふと何時でも師範へはいつの間もない頃の父の行商の姿が眼の前にうかんでくる。破産して學資の送金に、其の日の苦難をどうすることも出来ない父は、なれぬからだに母と手車をひつばつても、我が子に日々の生活の苦しみを見せまいとするあの笑顔を思ひうかべると、私は泣けてく／＼ならぬのである。我が子の生長を、我が身の生長と楽しみ喜び、老の將に至らんとすることを忘れてある親心は、實に汲めども盡きぬ愛の泉である。さうした肉身の情愛は湧かぬとしても、せめてそれにあやかだけの愛の心をもつて、我が教へ子を育て育むことは出来ぬものかと、どんなに願ふことが分らぬのである。もしさうした教育愛が二十の同人に、三十の同人に湧いてくれるならばどんなに有りがたいことかと一日として念じないことはない。

教育者はまた、權威がなければならぬと言つてゐる。教育者の權威といふのは威張ることではない。徒らに子供を叱ることでもない。先生といふ看板でもつて子供を支配する権利のことでもない。それは、子供が教師に對して絶對的に信頼する心の動きである。女の先生でも、男の先生でも、師範を卒業しても卒業しなくともそれは問題でない。たゞ先生を信頼する超人格

的な心の動きである。だが、さうした先生を信頼する子供の心の動きに、どうしたものか此の頃大きな迷ひをもつてゐることに気がついて、全く驚いてゐるのである。ともすれば先生の知識に對して、學識に對して、行動に對してその信頼を裏切る様な子供の態度を、いく度となく見出されるのである。環境の罪か、生活の罪か、教師の罪か、それとも子供の成長が自ら教師の缺陷を批判する様になつた爲めであらうか。もし、それが爲めだとすれば、こゝに一大反省をしなければならぬ恐ろしい事實を生み出したと言はなければならぬ。

實踐躬行は先生からと言ふことを口ぐせに言つてゐる私も、こゝにもう一度新らたなる反省を求めなければならぬ。職員室に時たまにぎはふ方言の笑ひも反省しなければならぬし、「言ふことをきかぬと點數をさし引くぞ」とおどかすことも、「コラッ」と子供をよびすてにすることも、すべて反省の生活ならざるものはないといふことになるかも知れぬ。

道 の 師 教

叱られても先生を信頼する子供の心、おどかされても自らに省みる素直な子供の姿である様な權威、それが、絶對に教師を信頼される權威であることを願つても容易に出来得ない實狀であるとするならば、教師もまた一大反省をしなければならぬわけである。

子供に方言の矯正を求むる前に、先づ教師の生活に方言を忘れ、子供に左側通行を求むる前

に廊下を通る教師に左側が実践されてゐることではなければ、子供の心の裡に湧き出る敬虔と信頼を求むることが困難であるかとも思はれる。

教師に鐵拳を加へられた子供が家にかへつて父に訴へた時、その父が「きさまが悪いからなぐられたのだ」と、かへつて父に叱られた二十年前の時代と「なんだつて、先生がお前をなぐつた……」とむきになつて學校へどなり込んでくる今の時代とは、教師にしても考へ直さなければならぬことであらう。

學識があつても、學力が秀で、あつても「信ずるに足らぬ」行道の教師であるならば、最早絶對の信頼を受ける教師の權威とはならぬのである。

縣教育界に起つた幾多のさうした問題を通して、わが學園の同人は今あらたなる内省の力によつて、この愛と權威とを両手に高くかゝけて邁進すべきを誓つたのである。

求むる心

今は亡き西有穆山禪師のお話は、何時きいても實によく分る。どんなに難解な佛典の講義へも、すばりと唐竹を割つた様によく分る。だがそれは聽いてゐる時のことであつて、家へかへつて、

「さて……」

と考へてみると今度は分らなくなる。

「あんなに氣持よく解つた筈だが？」

と考へてみても、何んのことであつたかどうもはつきりしなくなる。

「こんな筈ではなかつたが？」

これが求むる心となつて自ら調べてみるが、それだけではどうも物足りなつくてさつぱりしない。それが更に身をもつて調べることになつて自ら會得する。さうしなければどうしても満足されないのが禪師のお話をきいたものゝすべての心の動きである……」

と、私は此の話をきいてひとりでに頭がさがつた。

「勉強せよ」

「研究せよ」

と強ひることがなくとも、自ら求むる心にきくものをして起たしむる禪師の言葉の力こそ眞の國語の力である。此の國語の力は辭書では得られない。體得によつて生れてくるのである。教師のもつ國語の氣魄が、兒どものもつ國語の氣魄を呼び起して火花と散つた境地に、新しく體得した國語の力こそ生命の躍動したより高い國語の會得となるのである。

かう言つて吾々の日々の教壇をふりかへつてみた時に、吾々はなんと答へ得る力をもつてゐることであらうか。渾身の力をもつて教壇にたつてゐるつもり吾々の日々は、あまりにも弱いものであることを知るのである。五十の兒ども、六十の兒どもの中にたつた一人でもよろし。

「面白かつたぞ」

「ほんたうに分つたぞ」

「よし、もう一べんよんでみよう」

と起つてカバンをひつぱり出して、今日教はつた讀本の頁を開くものがあつたら有りがたいことである。

「讀んで行かなければ先生に叱られる……」

さうした兒どもではなく、

「面白かつたから讀んでみよう」

さうした兒ども達であつたら、いんゝにうれしいことであらうか。附屬時代から今日まで、幾度人の教壇をお借りしたことであらう。だがまだお借りしたその兒の聲をほんたうにうれしく聞いたことは、たゞの一度もなかつた。あつても先生のお世辭をきく位のものである。

役人をやめて、この頃やうやくもう一べん教壇にたつて見ようと言ふ心よろこびが見出されて來た。私は出来るだけ時間を見出して同人の教壇をお借りすることに決心した。學年研究會を更に多くしたのも、その時間を見出さうとしたからでもある。附屬時代のあの若さと努力がなくとも、五十年の世の中をのり越えて來た力で精一ぱいつき進んだならば、兒どもの魂をつかみ得ないこともあるまい。

西有穆山禪師

西有穆山禪師は青森縣三戸郡（今の八戸市）湊村に生れ、九十歳まで長壽した明治の生んだ傑僧中の傑僧である。穆山禪師は如何なる教育を受けて一代の名僧になつたのであらうか、それは、一に母の教育にもよることであらうが、また禪師の道を求むる一念の強かつたことにもよることと思ふ。

禪師の母はまだ二十歳あまりの娘盛りの時、笹本長次郎の正直な人格を慕つて、自分から後妻として嫁したのである。當時笹本家は、家産が傾いて先妻の子を抱へて困りぬいてゐた時だが、其れを一手に引き受けて挽回につとめた其の中に禪師が生れた。先妻の子を吾が子の様に育てゝゐた禪師の母は、朝早くから夜更くるまで働いてゐるので、到底嬰兒を育てる餘裕がないと言ふので實家の兄夫婦に子供がないのを幸ひに養子としてくれてしまつた。其れには繼子長男の爲にも、實子を手許で養育することはよくないと言ふ心もあつた。

處が、禪師が六歳の時に兄夫婦の間に子供が生れた。妙なものである。禪師は子供心にも是れはいけないと思つたので、養家から實家へ或日飄然とかへつて來た。母親は嚴しく叱つたが

首を振つて動かない。父親は見かねて仲裁したので兎に角手許に置いて育てることにした。母親は子供を教育するにとつても嚴格で、少しのことでも許すことがない。時たま長男が母に叱られると、其の罪を禪師がかばつた事も一再ではなかつた。母がちがふがこの二人はまたとても仲がよかつたのである。禪師は生れ落ちるときから他人の手に育つてゐる爲めか、子供ながら世の中の苦勞といふものを知つてゐたのである。

九歳の頃母の手に引かれて寺詣りした時、地獄極樂の掛圖を見てふるひあがつたといふことである。そして、

「如何にすれば地獄に落ちないで極樂に行くことが出来るか」

と母親にきいた。母親はその時、

「全智全能のお坊さんになつて衆生を救ふことである」

と佛教の功德を教へた。禪師は此の一言を信じて、其れ以來出家の志をもつたとのことである。十三歳の時お寺にはいつたが、母親はその時、

「生臭坊主になるのならかへつて地獄に早く落ちる。しかもお前ばかりではない、お母さんもお父さんもみんな地獄へ落ちるのだ。お前は全智全能のお坊さんになる覺悟があるか」

と言つて我が子の門出に一大責任を負はせた。禪師は母のこの一言を忘るゝことなく、道を求むるに専念したのである。

天保四年頃からのあの飢饉時代を恐るべき力で修行した。二十一歳の時には、最早や地方では禪師の右に出づるものがないと言はれるまでになつた。禪師は更に江戸に出て駒込の吉祥寺の寮へ入學した。此處は全國の偉いお坊さん達の集る處だが、禪師をおいて將來高僧となる風貌を持つたものはなかつたと言ふことである。

此の頃一つのお話がある。それは、吉祥寺の門前に菊地竹庵といふ儒者があつた。處が菊地竹庵、生來磊落、夏は眞裸で四書五經の講義をするので、其の行儀の悪いのに恐れて誰一人入門する者がなかつた。禪師は竹庵の非凡なる見識と學問のあることを見抜き、弟子入りをしたが、竹庵も貧乏、禪師も貧乏、竹庵の先生は暑さに眞裸だが、弟子の禪師は國を出る時着て来た袷一枚よりない。其の袷をチョコンと着て瀧の様に汗を流してゐる。禪師の先生竹庵は不思議に思つて、

「おい、裸になれ、この暑いのに袷を着て汗を流してゐる奴があるか！」

「いや先生、此の袷は冬になると布団になり、夏は蚊帳になる。夜間に洗濯して曉頃かわく

とかうして着てゐるのだから離せない……」

と言つたので、其の徹底ぶりに流石の竹庵も、

「うむ——偉い、この竹庵もお前には負けた」

と言つて感じ入つたと言ふことである。

二十三歳の時牛込の鳳林寺の住職となり、こゝで四五年の間大いに英名を國內に轟かしたが故郷の父親危篤の報に驚いて歸つたのが二十九歳、まさに、錦を着て故郷にかへつたわけである。是れで終れば禪師も今日行蹟を見ないことであつたかも知れぬが、郷里の人達は此の若くして學才のある禪師をとりまいて、お寺を建て郷里に留らせようとした。禪師もまた其の心になつてゐたのを見た母親は、もつての外とばかり斷つたのである。

「鳥無き里の蝙蝠で終るに於いては、最初お母さんに誓つた言葉を如何する。此の生臭坊

主が……人がおだてあげるといふ氣になつて、老師氣取りに終るとは何んたることだ。さ

つさと故郷を出て諸國苦行の行脚をせよ、それが出来なければ未來までの勘當だ……」

近所の人達は驚いた。是れは大變なお母さんだ。鬼の様なお母さんだと恐れてしまつたが、

流石は禪師、

「ウーン」

とうなつた。うなつたのが母の教訓が心魂に徹したからである。母の魂も恐ろしいが、また禪師の魂もおそろしい。飄然心を改めた禪師は再び故郷をあとに雲水の姿で江戸に出ると、

「もう一度修行の仕直しぢや、お母さんはあゝして田舎にくすぶつてゐるが、おれより偉い……」

といつて、相州小田原海藏寺の月潭老人について荒修行をやつた。月潭老人は人も知る荒修行の名僧、あまり辛刺無比なので如何なる弟子もより付けない。半年は辛抱しても一年とは續かない。其處に禪師は十二ヶ年居つた。全く苦學力行血みどろの苦行を續けたのである。月潭老人は、

「おれも偉いが、こいつも偉い！」

と言つたさうである。母の教訓も此處まで徹するともう何も言へない。是れだけならまだいいとして、禪師が六十一歳、曹洞宗きつての大法器として天下の人に仰がれ北海道に巡つた時故郷に立寄つて八十五歳の母に會つた時には、母は涙にむせんで喜びながら言つた言葉はかうである。

「人は棺を蓋ふて定まるといふ。御身なほ修行を怠るな……」

と言ふに至つては、近代見ることの出来ない女丈夫であると言つても宜しい。禪師の母親は如何なる教育に育つたかは知らぬが、こゝまで來ると、只「眞心」一つで我が子を育てた大きな力に涙が流れるのである。

指 導

指導と言ふことは、「教へる」と言ふことではない。また、「學ぶ」といふだけの意味でもない。指導とは児童と共に流れ行く眞實の姿である。指導は流るゝ姿で、學習は發展の姿である。師弟相共に觸れる環境の一切は師弟共に自己啓培の糧となるのである。

教師児童教材は教育作用の上から見て離すことの出来ない三つの要素である。従つて教師のみ働いて児童が機械になつてもいかぬ。また児童のみ働いて教師が機械になつてもいかぬ。教師も児童も、ともくゝに教材の中に没頭して、教師もなければ児童もないと言つたやうな境地

になつてこそ、初めて教育の姿が見出されるのである。私達の教室は眞剣な戦場の如きものである。児童と教師と渦をなして渾然一切の境地に達したら児童もなければ教師もない。其處に知らず識らずの間に人格と人格との交渉も出来、靈と靈との交感も成立するのである。

教師は教へると共に學ばねばならぬ。教へることは同時に學ぶことである。教へつ教へられつする間に眞の教育が行はれるのである。教育の作業は、まことに教へる教師と學ぶ児童との共産でなければならぬ。

「鐘が鳴るかよ撞木がなるか鐘と撞木の相がなる」

その相が私達に教へてくれてゐる、教育の姿である。

「筏水に流るゝか水筏を流すか筏師はたゞその方向を定むるのみ」

此處まで進んだ時に、初めて児童から考へれば自ら學んだと信じ、教師からみれば、正しい道に向つて児童の好むがまゝに學ばせてゐるのだと考へられるのである。

児童を先に立たせて、教師が児童のお尻にくつゝ歩いて歩いてもいかぬ。教師が先に立つて、児童を引きづゝてもいかぬ。それかと言つて、無意味に児童と手をつなぎあつて歩いてもいかぬ。やつぱり、児童を前に歩かせて、教師は児童の歩いてゐる姿を後からしつかりと抱いてその

の跡をみ、而して進むべき道を常に暗示して行くのでなければならぬ。そして抱く心の温かさは、時に獨自に歩かせ、時に手をつなぎ、時にお尻をひつたゝいて児童の伸びて行く力を培かひ、育くみ行くのでなければならぬ。

自由の境涯、自學の姿、自律的な學習はさうした處に生れて來るのではあるまいか。

教師の力

凡ては低學年からである。高學年になつて残される多くの問題は、決して高學年になつて初めて残されるものではない。やつぱり低學年の基礎的取扱ひを誤れるところに多くの問題が残されるのである。しかも、何れの教科を問はず、飛躍的に十全な發達を望むことは不可能なことであつて、より系統的に、より階段的に、より心理的に、より論理的に指導せねばならぬことは言ふまでもないことである。即ち、低學年は低學年として、中學年は中學年として、高學年は高學年として、自然的に、階段的にその發展の徑路を辿つて指導しなければならぬのである。

る。とくに低学年の基礎的指導の大事なことは論をまたぬことである。もし、高学年になつて劣等児を如何にすべきかと頭をなやます様な親切な心が少しでもあるとするならば、先づ低学年に於て考へなければならぬ。

言ふまでもなく、自學自習は兒童の自らの力によつて解決し、批判し、創作するまでに至らねばならぬ。けれども、兒童生徒の眼前に横たはつてゐる未知の世界をきりひらいて行くにはどうしても學友相互の助力と、教師の補導と指導によらねばならぬことは、こゝに再言するまでもない。経験や思索の不十分なる兒童には、容易に解決し得ざる問題、きりひらいて行くことの出来ない暗礁にぶつかつて苦しむ事は幾度あるか知れない。それを批判させ、のり越えさせるには教師の力にまたなければならぬ。力強い教師のもとに學習する兒童は幸である。教師にして充分の力があるならば壇上壇下の問題ではあるまい。

船客をのせた海洋の船がぐらつては、船客に安心を與へる事が出来ない。兒童の學習を自由ならしめようとするならば、まづ教師の力が充分でなければならぬ。教師に充分の力と自信とがあるならば、眞に兒童の學習を容易ならしむることが出来る。

「おは言ふものゝもつて生れた貧弱なこの頭をいかにせんや……」

と、だが私は決して秀才なる教育者にのみこれを言つてゐるのではない。眞に兒童を愛し眞に教育を楽しむ熱愛があるならば、教權によつて兒童を押へつける様な秀才教師ではなく、自己の克ち得た愛の力で教ふる眞の教育者となることが出来るのである。

「何を教へんとするか……」

「何を學ばんとするか……」

壇上に立つ其の熱愛が、ひとり秀才の教育者のみにゆるされてゐるものではない。只眞に熱と愛とに生きる教師にのみ得らるゝのである。

伸びて行く兒童の芽を！ 深み行く兒童の力を助長し、發展し、深化せしむることはさうした熱と愛ともえてゐる教師にのみゆるさるゝことであらう。

附屬小學校に居つた當時のことであるが、女師附屬へ檢定の實地受験に來られたある方が、私のところへ來て、

「討議法の學習順序はどんなにしたらいゝか？」

とのことである。私は暫らくその方の顔をみた。そして、

「あなたは討議法研究の爲めに實地受験に來られたのですか」

ときいたのである。するとその方もムツとした顔をして、

「冗談ぢやありません。半年も一年もの努力しての死にももの狂ひです。もう一生懸命です。」

と言つた。

「それなら尙更のことです。あなたのはそれまでのその努力を信じて、あなたの全力を其處に注いであなたの授業をして下さい。形ではありません。心で教へるのです。身體全體で教へることを望みます。」

と言つたものゝ、成績発表まではなか／＼心配であつた。その後間もなく合格の述懐に、

「まこと信ずるところには生のかゞやきがある。」

と言つてあつた。實にこの信ずる力こそ理論は實際を生かす、實際は理論に生きるのではあるまいか。

神ならぬ私達は決して十全な人間ではない。と同時に凡ての力を完全に有つてゐるものでもない。私達はたえず自己の實力の向上、自我の進展をはかる點に於て怠慢であつてはならぬ。其處に精進の道が拓けて行くことであらう。

教師の態度

かけがへの出来ない尊い人の子を育て得る教師の生活は、考へただけでも誠に有りがたい事である。たれが大事な自分の子が無條件で見ず知らずの他人の手にたくするものがあるであらうか。それが教師といふ生活にあればこそである。この點にだけでも日々感謝の教壇を送らねばならぬことなのである。まして私心邪惡な態度をもつて接しようなどゝは夢にも思つてはならぬことである。

教師の道
教育は人格と人格……など、言ふ理窟を考へるよりも、其一切の生活を純一無垢なる世界に見ることが先の問題でなければならぬ。その一切の生活が素直に、正しく育つて行く子供の一つの生活となつて行くのだと言ふ本源の姿にかへらねばならぬ。一切の差別をつける事なしに、一切の善惡を先人の念とすることなしに、育て得る教師のま心によつて素直に正しく培はれて行くのであると思ふの時、教師自身の絶えざる修養の大事なことが、自らうなづかれる

ことであらう。教師の向上發展は不知不識の間に子供の向上發展の姿となつて行くのである。教師の限りなき育ちはそのまゝ、子供の限りなく育つ力となつて行くのである。従つて、教師はいつまでも子供と一しよに若くなければならぬ。決して子供から離れて老いてはならぬのである。ナワ飛びする子はナワ飛びする教師と一しよでなければならぬ。愛することが、熱することが、若い教師にのみ占有させてはならぬ。

「それは若い教員のすること」

だと老成ぶつておさまつてゐる様になつたら、もう老教師といふ有りがたくもない待遇をうけて、勇退しなければならぬことであらう。熱意がなければ教育の形骸となつて了ふ。愛がなければ冷酷な教師となつて了ふ。

「學校の先生はいくら年をとつても子供じみてゐる……」

それでよろしい。教師の生活全體が子供と一しよになつてゐることが尊いのである。有りがたいのである。もし教師にして此の態度を忘れるならば、もはや子供と修行の道を共にすることが出来ない。徒らに其の地位に未練を残し名を保たうとする迷ひを起して日々の生活精進に狂ひを生じてはならぬ。社會もまた、この態度に充分なる同情をもつてくれなければならぬ。

稍もすれば功利私的な批評を加へることが多いが、それは決して大事な己れの子を育てる教師への力とはならぬことを知らねばならぬ。

然らば、教師の此の態度を培つてくれるものはなんであらうか、其れは、

「私は國民學校の教育實際家である」

といふ使命を自覺することである。此の使命自覺は、

「畏くも 陛下の命によつて、國民教育に身命を捧げてゐるのである」

といふ尊嚴なる源にたちかへつての使命自覺でなければならぬ。此の使命を自覺するならば自ら新たな教育的信念をもつて、如何なる場合でも身を處することが出来ることであらう。この自覺とこの信念こそは實踐修行の精進となることであらう。其處には老も若きもない、素直に正しく育てようとする一すぢの道があるばかりである。

それがためには、教師は常に實力を養はなければならぬ。理論の研究は勿論、日々の教壇の修行を怠ることなく、實力を培ふことを忘れてはならぬ。とくに、教師は稍もすると時代文化に盲目であることが多い。社會の事象に關心をもたぬことが多い。理論と實際は、文化生活の中正大道を歩むことに精進することを忘れてはならぬ。わが學園は、同人講習會、研究發表會

教育座談會等を設けたのも、教壇研究會を開いて一人のこらす教壇に精進することにしたのも此の修養を怠つてはならぬからである。

「實力なくして何んの教育ぞ——自覺なくして何の行ぞ——徹底なくして何んの力ぞ——」
 是れは、教壇修行のところにも述べた言葉であるが、自ら育たんとする教師の強き力は、また自ら育たんとする子どもの力となるのである。まことに、教師は教師としての態度完成に精進するならば、自ら自己を育て、行く道が拓かれることであらう。

しかも、その拓かれて行く道は脚下にある。一ぶく呑みながら手にする新聞雑誌にあらはれてゐる社會事象の大小の問題から、まとまつた研究書による教育問題は勿論、更に日々の生活勤務の一つ一つがその道である。朝な／＼の登校時間から、夕べ／＼の退下時間まで、始業の鐘の響きから書類報告の一つ一つにまで踏むべき道、精進すべき道が拓かれてゐるのである。勤務といふかた苦しい言葉をかりるまでもなく、伸びて行く子供の一切と生活を共にしてみれば、學校設備の一つ一つの校具から消耗品の用紙一枚使ふにしても、教育の道が拓かれてゐるのである。今次大東亞戰に教へられて消費節約を強ひられるまでもなく、財政の豊かでない町村の生きた日々の苦しみは、兒どもの學習生活の一つ一つに反省を責められてゐるのである。

内省の足らざる私は、さうした脚下の教育事實に餘念なく過してゐることを今更に悔ゆるものである。心して教育の眞實の世界をみるならば、まだ／＼修行の態度に精進するの力の弱さをかなしむものである。

精進しよう！ 精進しよう！ 日々の教育事實に！

道

○「道とは何ぞや」

△「道」

教師の道
 體驗が事實だと言ふことを考へるにしても、あまりにも力強い自らの努力を省みると、日々の教壇がおそろしくてならぬのである。理窟が多いうちは教壇に進歩がないと言はれても、其の理窟を理窟でなしに勉強することを、なか／＼にしないのが多くの教壇の姿である。讀書はしても、それは讀書しただけであつて、それが事にあたつてはなか／＼根強い理窟となつてく

るのが常である。其の讀書が體驗によつて事實となつてくれるならば、徒らなる理窟とはならぬことであらうが、それではあまりに時がまつてくれない不満も手傳つてくるのである。

よき教師と言はれる教師が、十年にして出で、五年にして出で、三年にして出でくる様に、速成早熟になつても、五年が十年、十年が二十年になつてくると、ながい間の體驗どころか、そろ／＼老朽とも言はれる教師が、だん／＼に多くなつてくるので、何んのことやら分らなくなる始末である。

事實を事實のままに受けとることの出來得ない知識の發達は、事毎に邪まになつてゐることに、なか／＼悟りがたいことであらうが、とかく論争の絶えない會合には、歸するところなく終ることの多いのもなさないことである。

靜かな雨は靜かなものごとを考へさせてくれる有りがたさを、ともすれば忘れ勝の生活が多いことを省みて、一層修養の大事なことを知るのである。

「勉強してくれ」

とは口ぐせに言つてゐることではあるが、その勉強が勉強だけに終ることがない様。

「そして、どうか働いてくれ」

と願ふことが一再ならずである。それが若い教師であればある程願はれてならぬのである。

「教育の眞諦は自己を育つるにあり」

と、随分古い言葉であるが、願ふ心は常に新らしい世界を描いてゐる。

「結局は教師論である」

と言ふ言葉は、いさ／＼かも聞いてほしくない言葉ではあるが、それがまた、何時でも新らしい要求となつて言はれてゐることを遺憾に思ふものである。

「劍道の極意は死を恐れざるにあり」

武士が四六時中死の問題と闘つて、やうやく死を恐れざるに至つての悟りは、眞の武士としての生命を傳ふることであらうが、日々教壇にたつてゐながら、ひよつとすると、三十年の停年を想ひ出してみたり、仲間のものより二圓すくなく増俸したことをうらんでみたりする、ゆがんだ心のまゝにあるのではないかと思ふと、そのおそろしさにぞつとすることがある。常住不斷の心構へにかうした狂ひのあることは、何んとしても情けないことであるが、三十割、四十割の他人のボーナス記事を読んでゐるわかい教師の横顔の淋しさにも、また心を動かさるゝのである。

教壇に死ぬといふ一念よりも、教壇から逃れようとする教師がいよく多くなつて來たのも、おそろしさを感ずるのである。

「お國のためならいつでも死ぬ」

といふ國家的死生觀にたつた日々の教壇を、

「お國のために死ぬのだ」

と、裸になつて教へ込む教師の一人でも多いことを、この頃ほつしてならぬのである。

「お國のために死んだのだから、いささかも悔ひがない」

といふ父兄よりも、

「お國のためによく死んでくれた」

といふ言葉に生きる父兄をほしくてならぬのである。

「敵を倒さぬうちは死んでならぬ」

といふ將兵の教育が、今日このたゞかひに、

「死んでゐてたゞかつてゐる」

幾多の尊い兵士のあることをきいて、悲壯といふよりも崇嚴なその姿にたゞ合掌するだけで

ある。

「水にはいつたら水にはいつたと悟り、火に焼けたら火に焼けたと悟れ」

と言つてもそれは容易な業ではなからうが、國家の運命を決する戦ひの眞最中、一切精進の國民學校の教壇にこうした生死を離れた修養が見出さるゝならば、國家百年の教育はおろか、國家永遠の動かぬ教育ともなることであらう。老いと若きを問ふことなく、教壇の教師はこゝに修養を怠つてはならぬのである。

知行合一

知行合一は、智識と實踐とが一つでなければならぬことをながい間教へてゐる。それが昔も今も變りがないと更に教へてゐる。それを知らぬ私でもないと自らに言つて居ながら、師範學校で素讀を教へつたまゝ本籍にしまひこまれた論語が、この頃ひよつこり飛び出して來て「どうしたことが……」と今更の様に責めたてゝゐる。

責めたてらりてみると、行ふことの道を知らずに迷うてゐる薄志弱行の徒であると笑はれても仕方のない一人となつてゐることに氣付いたものゝ、智識を智識としてそうつとしまつて置いて、實踐の生活を別な世界に求めて來た過去四十何年の生活がうらめしくなつてならぬのである。

「この頃噂に聞けば、藝州の儒者で頼久太郎とやらいふものゝ、京へ出て酒ばかり飲んでゐて三年が間たゞの一度も歸省して親の安否を尋ねようともせず、そして忠臣楠公の傳を作つたといふことだが、では御邊の事でござつたか。」

法海師の鋭い眼光が、雷のやうにその面上を射た時我知らず面を伏せた山陽は、冷たい汗が首筋を傳うて流れるのに氣付いて、老師の前に黙禮して寺門を出た……

といふことである。眞向微塵に頭をうち割られてしかも

「おれが一宗の學頭、偉い和尚だ」

と、當時文名一世に鳴る豪快無比の山陽が、腹の底から感歎の辭を搾り出したことを讀み知つて、私は今更に後悔の涙の滂沱たらざるを得ないのである。

父に逆き母にさからひ、僅かに夏と冬の休暇に祖先の墓に詣づるだけで、其の臨終の時まで

一度として温かい心で慰め申したことはない。否そればかりではない。たつた一人の母、たつた一人の父、その母の臨終には會はず、父の臨終にやうやくかけつけて抱いてやつただけである。教員生活三十年——かへりみればその悔ひで一ばいである。

「忠臣は必ず孝子の門に出づ」とは古人の金言だが、三年も歸省せぬ不孝者の筆を以て忠臣の傳を書くとは、大それた事ではないか。楠公の靈若し知るあらば、果して何と思はれるであらう。愚僧もそんな不孝者には會ひたうない。……

法海老師の言葉はひし／＼とせまつてくる。學校經營七ケ年、行道の教育に精進するなど、それこそ大それた事である。五年が三年——三年が一年——そんなことを口にして來たことだけでも口はばつた事である。

再び教壇にかへつて、その一つ一つの生活をふりかへつてみると、一層その悔ひを深くする。幼き吾が子を膝下にいつくしむことも出來ず、妻とねんごろに不孝の罪を墓前にわびる日も見出せないで、今もつて浪々の生活をつゞけてゐる。それでゐて、教へ子には忠を説いてゐる。孝を説いてゐる。愛を説いてゐる。學校經營の訓育も論じてゐる。そして、自らにも、同人にもそれを求めようとしてあせつてゐる。なんといふおろかなことであらう。なんといふ大

それたことであらう。

さうした心の苦悶は、今私を次から次へと責めてゐる。

「道は近きにあり、まづ足下からはじめよ。いな、道は吾にあり、吾れ自ら是れを行ふにあり。」

修 養

立派な先生

國民學校の立派な先生は、一教科の一科目に秀でただけではいけなくなつた様に思はれる。

例へば、國民科國語の綴方の研究が深くあつて、其の教へ子がみな小さな文士となつただけではゆるされぬのである。それが、もつと高い展望臺に立つてゐるのでなければならぬのである。即ち、一科目で小さく縮んだ世界の誇りであつてはならぬのである。日本はすでに、孤島の日本から東亞の日本となり、更に飛躍して世界の日本となつて、世界新秩序建設の指導者となつてゐるのである。

全體分節的見解の要望されて來たのもまた必然の姿であらう。それがまた、このまゝお互ひの子供の觀方にも考へさせられなければならぬ。いふまでもなく、お互ひは一年生だけの先生だと考へてはならぬ。また、五年生だけの先生だと考へてはならぬ。眼前の子供は一年から六年——更に高等一年二年と大きなつながりをもつて伸びて行く子供である。いはゞ、一年といふ一つの學級は、三年といふ一つの學級は、六ヶ年或は八ヶ年の教育生活の一層に過ぎないのである。もしそれが、全斷層の子供の姿を忘れて、一斷層だけの教育生活に終始するならば、決して大東亞共榮圈建設の大使命を完遂する子供とはなれないのである。常に學校全體の中にある學級の兒童をみるのでなければならぬといふのも、こゝに心があるからである。

子供の觀方も、教科の觀方も、常に立體的であらねばならぬこともうなづかれることであらう。更にお互ひの眼は、激變の世界の中の樞軸としての存在である日本……その永遠なる隆昌の氣運を維持しつゝある負荷の大任を思ふと、遙かに廣汎な内包外延をもつ教育の新たな動きを忘れてはならぬのである。

思ひ起せば、吾等は眠れる獅子として支那を畏怖して來た。また、吾等は、北方の巨熊として帝政ロシアを恐怖して來た。而して世界の國といふ國が、英米の限りなき暴戾を恐れ憚つて

來たのである。

日本は、其の支那を押へ、其のロシアを倒し、其の英米をして東亞の天地から追ひはらつて世界新秩序建設の理念を今明かにしたのである。そして、日本はこれが盟主となつて大東亞共榮圈の建設に邁進しつゝあるのである。この眞實の姿を子供に見失はせてはならぬのである。この眞實の姿を、子供の骨の髄までも浸みこませねばならぬのである。それは、訓導であつても、助教であつても、變りがあつてはならぬのである。

實のところ、教育はまだ、ながい間の習慣から脱しきれずに、所謂政權に屬してゐる感をもたれるのである。國家社會の機能として、力強く再出發する機運に際會しながらも、まだ教育行政のために、教育自體の姿がゆがめられてゐる。けれども、其のゆがめられてゐる姿をそのままにみてることは決して今日の教育者の姿であつてはならぬ。しかも、日々教壇にたつてゐる教師の求むる道であつてはならぬ。

吾等の展望臺は常に高いところにあるのでなければならぬ。自治、産業……あらゆる部面に動いて行く教育の力が、此の高い展望臺からの動きでなければならぬ。立派な先生は、此の高い展望臺から動き得る充全なる力を常に養成しなければならぬ。立派な先生は、生活の一切を

全村教育の中に見出すことによつて、常に展望臺から道の世界を示すのでなければならぬ。師道の昂揚も、教育の尊重も自ら道となつてあらはるゝことであらう。

だが、さうした立派な先生はなか／＼に見出されないことであらう。お互ひは、せめてさうした立派な先生になるべく、努力することを怠つてはならぬのである。

この頃、六十を越した老先生が、初等科一年から六年まで教へてゐる山の中の分校で、研究会を開いたのに出會つた。不思議にも、男七人女七人、十四名の仲よしの子供達である。學校長がこゝで研究会を開いてくれなかつたら、おそらく附近の先生達でも知ることがないであらう。

老人の先生を中心に、立派な日本の子供に育つて行きたいと一心に勉強してゐる子供をみてるたら、涙が出さうでならなかつた。その涙をみせまいとして、先生には相すまぬことであつたが、色々なよそごとを思ひ出してみたが、どうにもならないでゐると、ふと私の前に並んでゐる若い女の先生に眼がぶつかつたのである。

この老人になつては、かうした若い先生を再び妻に貰うことなどは全くあり得ないことではあるが、もし私がまだ青年教師であつて、しかも教育愛に燃えてゐる熱烈な青年教師であつて

若いこの女の先生にかう言つたとしたら、どうなることであらうか。

「こゝにも尊い皇國民の子供がゐる。私は、私のこれからの一生をこゝの山里にもりたて、この可愛さうな子供を立派な日本の子供に育て、やりたい。どうか私と一しよにこゝにゐて、内助の功をさゝげてくれまいか」

と言つたら、なんといふいろよい返事をしてくれるだらうかと思つたら、遂々涙が消えてゐたのである。そしてそゞろに二十二年前の分教場生活を思ひ出したのである。

だが、老教師のこの部落は、一切老教師の言ふがまゝであるとのことである。しかも、もしや此の老教師に去られるのではないかと、轉任期のくるたびに部落の人達が寄り集つて心配してゐるといふ、老教師を中心にした美しい部落の生活は、そのまゝに見えてゐたのである。かうした立派な先生を、お互ひがまだ知らずにゐることを反省してみたいのである。

自己内省

社會のあらゆる職業の中で、教育の仕事程永遠性のあるものはないと、よく言ふことだが、それは決して我田引水の言葉でもなく、お世辭の言葉でもない。しかし、日々生活を共にしてその一人一人の一切をみては、生涯を通して教育の事業に終始するの覺悟を、總ての教育者に望むことは無理であることを知つたのである。けれども、それかと言つて、現在教育の仕事に従事してゐる間は、熱愛と努力と、そして堪えざる研究と工夫とを怠つてはならぬのである。素質のよしあしではなく、常に反省して自己修養に孜々として餘念のない程の人であるならば例令將來は他の仕事に轉ずる途上にあつたとしても頼もしいことである。勿論それに素質がよければ文句はないが……。

私は、未だかつて同人の操縦策を考へたことはない。同時に、同人をして自分の部下であり自分の使ふ人であるなどと言ふ觀念を常に忘れようと努めてゐる。従つて同人には、學校長の操縦策によつて動く様なきもしい心の先生にならぬ様に自覺してほしいと常に言つてゐる。時たま同人の中には

「校長先生——なんとかあつてほしい！」

などと要求してくることもあるが、私はその度にある淋しさを感じるのである。何故もつと

教育全體に對して高い考察と識見とをもつて、思ふ存分の技倆を發揮してくれぬのであらうかと、なさけなく思ふことがある。自己の全力をもつて教へ子は、やがて家を興し、國を隆んにし、世を救ひ、東亞新秩序建設に邁進するのだと思ふならば、もつともつと泪ぐましい自己の姿を見出していゝのではないかと思はれてならぬのである。

寛嚴その宜しきを得なければならぬと言ふことをきいて來た私は、兒童に對し、同人に對し時に嚴をもつてのぞんだり、時に寬をもつて接したりしてゐるが、そのなか／＼困難なることを知つて、一切黙の裡にその自覺を促した時もある。

教育の趣旨準據は、國民學校令並に同施行規則に定められ、學校地帯の傳統的な歴史と環境に國家の要求と時代の歸趨に色彩られて特殊づけられた學校經營の方針が樹立された以上、これが解決にいさゝかも苦勞がない様にも思はれるが、さてその運営は實に容易でないことを一年毎に強く感じられるものである。年中行事も、毎月の行事も、一日の行事も、今日の如くめまぐるしい世界の進展と時代の推移では、餘程の鋭敏な感じをもつものでなければ、常に置き去りにされるのである。それは、國民學校ばかりではなく、青年學校、青年團、女子青年團と一切の社會教育までたゞさはらなければならぬ教員では、尙更のことである。

たゞ、この間に學校經營者としての私の喜びとするところは、經營事實の一つ一つに、言葉では言ひつくされない確實性を、僅かでも見出すことの出来る様になつたことをもつて、多少の満足を感じるのである。小さな一つの行事の遂行にしても、是れが定められた教育方針に根ざしてゐる事だと思ふと、そこに生々發展して行く生命の動きが宿つてゐることを限りなくよろこぶのである。

私は今、それを自己反省の指標として一日一日の生活に至心全力をもつて當つてゐる。

名 將

眞の動績は遺されてみなければ分らぬものだ。と言ふと、いかにも頼りないことの様に見えるが、過ぎ去つてみて、現實の問題にそれが事實を解決してくれた時に初めて遺勳遺績として賞へられることが多い。

加藤寛治大將が、華府會議の結果、五、五、三の比率に屈せざるを得なかつたうらみを、な

んとかしてとりかへさんと只お國の爲に苦心されたことが、かへつて政治問題とまでなつて、たれ一人大將の心となつてくれなかつた。然るに世界の情勢がいよ／＼非なるを洞察した大將は、國內のさうした壓迫に敢然たつて、所謂加藤式猛訓練の道を選んだ憂國の決死の覺悟は、二十年後の今日になつて初めて實を結んだのである。その間、猛訓練の犠牲となられた尊い英靈に對して、今新たな感謝の黙禱を捧げてゐる國民も、當時は決して其れをよろこんで迎へてはくれなかつたこと、思ふ。

大將の鐵石の如き決心も、當時の苦衷苦心の程を思ふと、それこそ眞の憂國の名將として稱へるには、あまりに粗末な言葉のみである。赫々たる海軍の戦果を次々にみるにつけても、實に感慨無量のものが多いことであらう。安らかにねむる地下の大將も、初めてその苦衷苦心の程を忘れて、それこそく／＼と微笑してゐるにちがひない。

修
それにしても、初めて教壇にたゞれる助教の先生は、決して今賞められなくともいゝのである。かりそめにも今賞められる様な「いゝ先生にならう」など、考へてはならぬ。たゞ、眼の前にあるむき／＼の兒を、

養
「お國のためになるよい日本の子供に」

育てる一念に精進してくれ、はい、のである。あまりに賢く育つてゐる此の頃の若い先生をみて、一層この感を深くするものである。

汽車の中

助教が准訓になつても、准訓が初訓になつても、決して一人前の先生になつたと思つてはならぬ。まして初めて教壇にたゞれた助教に於てをやである。そして、常に自らの足らざることを反省せねばならぬ。もし、子どもを責めることがあつたら、同時に自らをも責めることを忘れてはならぬ。

昭和十七年四月の二十五日、二十六日は二日続いた授業せぬ日なので、青森まで行つての歸り、乗り換へした川部驛は、實に雑踏してゐた。そこへ三、四人の女の先生が颯爽としてはいつて來た。そして、嬉々として語りつゞけたものである。

「ワ、ハ、ハ、ハ」

「あなた、何年、」

「われがア」

「〇〇さんは遂々六年生もたせられたの……」

「もつた」とは言はない。「もたせられた」と言ふのである。自ら進んでもつ勇敢さがないとすれば、學校經營にもまた決して積極的な態度を見得られぬことであらう。語る言葉の明朗なその如く、何故求めて受けもたぬのであらうかと、こゝでも若い先生のもの足らなさをうらめしく思ふのである。

「あなた、叱らねでやるにいゝが……」

「……」

「われだば、とつても叱らねば教へられね——」

「ほんとだの……」

叱らなければ教へられぬ自らの力を反省する言葉の出なかつたことを、私は非常にさびしくきいてゐた。

「あの、さわぐ子供の動きがどこから出て來るのか」

と、靜かに考へることを忘れてゐる。隙があればこそ子供もさわぐのである。教師からみれば「づるい」と思ふことも、子供自らは「づるい」とは考へてゐないことであらう。早い話がお互ひが小さい時、やつぱり先生に叱られたことを思ひ出してゐるが、男の連中が、よく若い女の先生の袴の裾をひつばつて泣かせたものである。今時、女の先生のスカートをひつばる悪戯の子がないだけでも、有りがたいと思はねばならぬ。

教壇にたてばもう一人前になつたのだと思ふほこりはさうしたところにも出てゐるのである。そして、叱聲でもつて是れを補ふとしてゐるのである。しかし、それは決して一人前になつてゐるのではない。一人前になつてゐなければこそ、其處に子供が割り込んで來るのである。太刀の構へに隙がなければ、相手は決して打ち込んで來ない。

「こねだし、めつたにおとなしくなつたと思つて後みたら、校長先生がたつてゐたの」「びつくりしねが」

老ひばれだと思つてもやつぱり校長には隙がない。教室にはいつたばかりでもう靜かになるのだから、それに教へてくれたら子供の眼のかゞやきが全く別になることであらう。

「どちらの先生かなア」

と思つた私は、何か語つてみたくなつたので、その隣りの場所へ寄つて行つたら次の階で降りたので、遂ひ語り得なかつたことを残念に思つてゐる。助教の先生か、師範新卒の先生か、もし新卒の先生だつたら一層語り得なかつたことを遺憾に思ふのである。

道は遠い。五年後——十年後——二十年後——教育の道は實に遠い。教壇にたつた第一日の感傷的な喜びと、希望とその熱烈さとは、決して毎日は續いて來ない。責められることはあつても、賞められることはめつたにない國民學校の教壇である。大東亞戦争のまつた中にある今日、教育は何よりも大事だと口には言つてくれても、定期の増俸が豫算がないと言ふので、心ばかりの喜びであつさり片付けられ様としてゐる現實の姿である。

「貴重なる一票を投じてくれ！」
と、學校の講堂で大衆に呼びかけてゐても、

「國家のために、國家百年のために、何故教育者を優遇せぬか」
との聲を一語もきいたことはない。この中であつて、ほんたうに教育の道に一命をささげる

だけの決心と、覺悟をもつてたつてくれてゐるであらうかと思ふと、老ひ先短かい此の老人が心配でならぬのである。西郡教育會が多額の犠牲と努力をはらつて、助教のために今長期の講

習を計畫してゐるのも、その願ひからである。

「左様なら」

「左様なら」

さうして別れた女の先生達には、いかにも希望に満ちた喜びに溢れてゐる。

「娘つこどアいぢやなア」

是れは、女の先生達を見送つた、六十近くのお婆さん「？」の歡聲である。それがまた、語り得なかつた私の歡聲でもあつた。

汽車は、思ひ／＼の心をせてまつしぐらに走つてゐる。老も若きも、男も女も、津輕の平野におとづれた此の頃に珍らしく暖かい春の陽を、吸ひ込む様に窓に見いつてゐる。間もなく青葉の頃となり、眞夏の暑さとなる頃は閉ぢこめられた吹雪の日を忘れることであらう。

修 養

教壇修行に遠慮があつてはならぬ。だが、教壇修行は容易なことではない。

「先生にでもなるかなア」

といふ様な心では修行はなりたぬ。何故ならば、教壇修行はそのまゝ生きた人間が育つて行くのであるからである。五十の子供、六十の子供が一生を通して生きるか、死ぬるか、芽生えは、實に此の時培はれ、育まれて行くのであるからである。

「教育百年の大道の第一歩が國民學校にあるのだ」

と、其の責を感ずるならば、教壇修行もまた容易なことでないことを知ることであらう。國民學校に何時になつても第一年の經營である。何故ならば、入れ換へになつた多くの先生の中に、初めての助教の顔をみるので、また／＼第一年からの仕事をくりかへして行かなければならぬ苦惱は、實に堪へがたいことなのであるからである。従つて、

「身は責任のない一助教だ」

など、考へてはならぬ。育つて行く子供は一年毎に伸びてゐるのである。

教壇修行の眞剣であらねばならぬこともまたうなづかるゝことであらう。

教壇修行に大事なことの一つは、人の悪しきをみて、悪しきがまゝに置いてはならぬことで

ある。必ず己れに省みてこれを己れの良きところに置くことである。同時に人の良きところをみたならば、決して、

「なアに、そんなこと」

と思つてはならぬ。素直にうけいれて、己れを育てることを忘れてはならぬ。人間の情として、とかく人に誇ることはゆるしても、人の誇りに屈することをいさぎよしとしないことが多い。だが、己れの誇りは己れの進歩をとどめ、人の誇りに耳をかさぬことは、自らの向上の道を失ふことがある。心すべきことである。

思慮と斷行

慎密なる思慮と、周到なる用意とは、事に臨んで斷行する氣力となる。是れはひとり助教の先生のみへの言葉ではない。教壇三十年を通して口ぐせの様に語つて來た私自らへの言葉でもある。學校經營七ヶ年の實踐の上にも、常に同人と語りあつて來た言葉ではあるが、なか／＼

に具現されない問題でもある。深刻なる思慮と研究は努力を要する。周到なる用意には苦心と工夫を要する。もしこれが、精神修養によつて一切が一つところに備へづけられたとすれば、それこそ強靱なる意志の斷行は、如何なる難事をも一刀兩斷に處することであらう。

人も認め、自らも信じてゐる實力を持ちながら、練習に練習を積んだ十分の力量と技をもつてゐながら、時に臨んで其の實力、その力量を充分に發揮することの出來得ないことのある多くの事實を思ふ時、其の精神修養の如何に大事であるかを知ることであらう。勝敗を決する策戦も、深い思慮から出るのでなければならぬ。無敵の活動も、周到なる用意と準備とに負ふところまた實に大なるものであることを知らねばならぬ。

日々教壇にたつ授業案に、研究を重ね、工夫を究めることも、みな此のためである。教壇研究會を開いて、共に語り會ふこともみなこのためである。私は常にかう同人に言つてゐる。

「計畫は密に、實用は粗に」

と、また、

「準備はすべて前日に」

と、而して、事に處しては只斷行あるのみである。「用意はよいか」常に此の心構へで精進す

るのでなければならぬ。

聴く態度

私達は、やゝもすると毎日顔を合せてゐる仲間の人達の研究のあとを静かに聴かうとはしない。従つて、その研究のなかゝら何かを求めようとする素直な心をみないばかりでなく、かへつて、

「なアに、あいつが……」

とたゞきつけようとする氣配さへ見えることがある。私は、その度に、

「まだ、私達は他人の所説を聴いて、自らを育てようとする態度が出来てゐないのではあるまいか！ たとへ、どの様な所説であつても、静かに聴く心の態度が出来あがらぬ以上は決して私達の研究に進歩もなければ發展もないのではないか……」

と思ふのである。私は、この心が此の頃一層強くなつて來たことをはつきり知ることが出來

た。そして、お互ひの間にかして此の聴く態度を培つて行きたいものだといふ願ひから、先づ職員同志で、研究発表會や、同人講習會や、教育座談會や、各種の報告會などを開くことにした。全職員は、其の發表なり、講義なり、報告なりの内容についてお互ひの意見質問等を忌憚なく語りあひ、

「我が學園としては如何するか」

といふ問題に歸結して精進することにした。

同人講習會といふのは、各教科の主任が講師となつて、他の同人は講習生となつてその所説を静かに聴くのである。此の講習によつて、我が學園の各教科の教育方針が、職員全體の間に詳細に語りあふわけである。研究發表と相まつて、時には方法に至るまで論議統制されることになることであらう。研究發表は、教科主任の外に研究のまとまつた同人の希望によつて隨時開かれることになつてゐる。これによつて會得された各教科の精神が直ちに教壇に精進されるわけである。また、各講習會や研究會への出席報告によつて、我が學園の實際が更に内省されて行くわけである。

我が學園の職員は、是等の會合によつて、出來るだけお互ひに耳を淨め、心を澄まして聴く

態度を培つて行くのである。教師のかうした修行は、いつとはなしに子供にもきこえて來るのではなからうかと思はれるのである。校訓の一つに、「聰明」といふのがある。私達が道を求むる上に最も大事な教へが校訓の一つとなつて、日々の朝禮に子供と一しよに朗誦してゐることを思ふと、ある力強さと明るさをもつものである。かうした日々の修行によつて、僅かでも私達の聽く態度が馴致されて行くならば有りがたいことである。

苦

悶

遷善感化

筑前博多の聖福寺住職仙崖和尚は大徳の譽れの高い聖僧であつて、幾多の美談逸話が傳へ残されてゐる。

苦

聖福寺は地方きつての大きな禪寺であつたので、僧徒の數もまた多く、中には不良の青年僧もかなりまじつてゐた。それらの不良僧は、和尚の眼を盗んでは、深夜密に踏臺を置いて寺の土塀を乗り越え、僧徒には一寸見られない廓遊びをするのを常としてゐたのである。仙崖和尚はこんなことを知らずにゐたのではないかと思つてゐたらさうではない。とうから氣付いてゐ

悶

たのだが、かうしたことを表面に詮義立てして犯人を處罰することは一山の面目上面白くないし、さりとて此のまゝに打捨て、おいては、善良な者までが全部不良に誘ひこまれる心配もあるから、何とかしてその非行を根絶させようと心を砕いてゐたのである。

ある夜のこと、仙崖和尚は何を思つたか、土塀の下の踏臺を取りのけてその跡に端然と坐禪を組んでゐた。身を切る様な寒風の中に數時間を経過した頃、廊から歸つて來た二三人の不良青年僧は、外から土塀を乗り越え内側に下りようとして、いつもの様に足で踏臺を探り、少し變だなアと思ひながら、これを足掛りに飛び下りたのである。けれどもどうも様子が異つてゐるので、星あかりでその踏臺を凝視すると、こはそもいかに、そこには尊い師と仰ぐ大和尚が端然と坐禪を組んでゐるではないか。

しかも、今、自分たちは、知らぬ事とは言ひながら、この聖僧の頭を踏臺として土足にかけたのではなかつたか！ さすが不敵の不良青年僧達もびつくり仰天、忽ち潮の如くに湧き出て來たはげしい自責の念に堪えられず、和尚の前に平身低頭、ひたすら己が非行を詫びたのである。

和尚は靜かに、しかも慈愛に満ちた聲で言つた。

「夜は寒くて風を引くといけないから、出歩きに氣をつけよ」

と、青年僧たちは思ひがけない優しい師の坊の言葉をきいて、一入頭を低く垂れ、はふり落つる熱涙と共に、改悛の情を披瀝したのである。

此のことがあつてから、一山の風紀は頓に肅止し、青年僧は競つて熱心に修養に努めたといふことである。

是れは何かの本で讀み知つた話であるが、まことに有りがたいことである。五十の兒、六十の兒の中には時に悪戯の兒もまじつてゐることであらう。時にはひねくれたどうすることも出來ない兒もゐることであらう。さうした兒を一つの教室に入れて、日々教壇から見下した時、私達の眼はどんなにして注がれることであらう。

毎日の朝禮の時でさへ、

「〇年生はまだお話をしてゐる……」

「〇年生は今日も一番悪い……」

と叱つてゐることはなからうか。ゆめ心して素直な無心な兒の姿を見出すことに、不敏であつてはならぬのである。我が子に頭を踏臺にするまでの決心がなくとも、良きは良きなりに、

悪しきは悪しきなりに、人間本然の姿を見失つてはならぬのである。

教へ子

「先生！ 暫らくです」

七月上旬の黄昏時、ドングリ頭の頑丈な男が、暮れがかつた支關に、のつそりたつて頭をピヨコンとさげて笑つたものである。ピツクリした私は、ながい間、その男の顔をじーつと見た。

「オ、ー石太郎さんぢやないか」

私は全くピツクリした。思ひ起せば二十幾年前、學窓を巢だつた若い熱血の理想教師が、初めて教壇の人となつた時の教へ子の一人である。

「こちらへ來てから何年になりますか」

「もう、十五六年になりますよ」

「早いもんですなア」

力のこもつた聲である。きびくした聲である。なにもかも世の中を知つたといふ聲である。

「いゝ若い者になつたなア」

「えー おかげさんで！」

ピヨコリとさげた頭のでつべんに、石をなげつけられて傷ついた跡が、昔のまんまに光つてゐる。一時間と叱られないでゐることがない程、悪戯すきな子供であつた。叱られたことも、なぐられたことも、おそらく學級一番であつたことと思ふ。その子供が今私を突然にたづねてくれたのである。心のどこかに、

「すまなかつたなア」

といふ悔の泪が流れてゐる。

「先生に叱られたのをみんな知つてるかい」

「ハハハハ……随分叱られましたなア、……先生が此處にゐるといふことをきいて、ひよつこり叱られた昔のことを思ひ出してね」

「ホー」

「急にお會ひしたくなつてやつて來たんですよ」

私は、いつか泪ぐんでゐた。出稼の歸りだといふ「石太郎さん」は、大きな干魚包を前に、昔の友達のことを語るのであつた。

潮風の強い、砂濱つゞきの藁屋の裏には、よく罽網などが干されてゐた。その下で、素裸になつて相撲をとつてゐるのは、相變らずの「石太郎」である。相手の子供は、學校へ來る途中小おどかされて、カバンを持つたまゝ手下になつてゐるのである。

「石太郎、學校へ行かう」

「だれが行くもんか」

「なぐるぞ、」

「行く／＼、なぐらなけりや行く」

缺席兒童督促に、濱邊を通るといつもひつばられて來る「石太郎」であつた。その「石太郎」が、今私と、盃をもちながら昔語りをしてゐるのである。

貧乏なるが故に出稼させねばならぬ人間の生活、金持なるが故に大學を出て學士様の誇りをもつ人間の生活、だれが定めたともなく、生れたまんに社會的地位に大きなへだたりを與へ

られてゐる。因縁と言へば因縁だが、悪戯小僧が叱られた昔を思ひ出してたづねてくれた心根に、賞めてやつた金持の息子が、學士様になつても忘れたかの様に會つてもくれない偉さを思ふと、どこにその偉さの區別を見出していゝのか苦しむものである。

だが私は、今人間の眞價といふものを初めて知つたかの様に、自らをかへりみたのである。それ／＼の天分に自らの姿を見出して、大臣たらずとも、大將たらずとも忠實に生きてゐる眼の前のこの若者に、ほんたうの人間としての貴さがある様に思はれたのである。

その昔、イタリヤのベスピアス火山が爆發した時、麓の近くのボンベイといふ立派な町が、一朝にして熔岩熱灰の下に埋められてしまつた。そのボンベイ市が、近世になつてイタリヤ政府の力によつて掘出され、昔のまゝの、しかも吾れ先にと死生の境を逃げまよつてゐる様子があらはれたのである。その人間の中に、高位高官の紳士が、熊公、八公と何等變りなく組討のまゝ埋められてゐたのである。

然るに、一人の番兵が、兵營の自分の立つべき所に、銃劍をつけたまゝ、一步も動くことなく嚴然たる姿勢のまゝ立つてゐるのを掘出した。一兵卒のこの嚴然たる最後の偉大なる姿に感激したイギリスの名畫家ヘンリー、ポインターは、一枚の油繪をかきあげた。題して、

「死に至るまでの忠實に」
 私は、ふとこのことを思ひ出して、一勞務者である教へ子の顔を、あらためて見あげたのである。

「人間を作ることだ」「人間をつくることだ」

大將になれなくとも、金持になれなくとも、人間としていさゝかも恥ぢることのない、御國のために一身を顧みぬ立派な日本人を作ること忘れたら、教壇も價值のないものに終ることであらう。誠心誠意、倦まざる努力でもつて子供を育てることである。

「いゝ氣持になつた。先生―有りがたう御座います。」

出したお酒を、みなまで呑まなかつたが、それでもかなり酔ふてくれたので、何よりもうれしかつた。

「仲間が待つてゐるから……」

と、歸られた後姿を、私はしばらく忘れることは出来なかつた。あれから、八年―九年―になる。

「石太郎さんは、どうしてゐるか？」

時々思ひ出される。今日もまた、ふとそれが思ひ出されたのである。

同 情

「学校の先生も容易でない」

是れは教師自身の口から出る言葉とのみ思つてゐたら、此の頃父兄からも同情ある言葉としてきく様になつた。事程に、先生達の仕事が多くなつて來たのである。朝七時半迄に出勤して午後は四時まで休みなしの仕事である。夕飯を食べると、七時からは青年學校で九時半までかかる。ちよつとすると十時までかゝるのが普通である。其の間に、矢つぎ早にくる通牒や定期報告書も發送せねばならぬ。鍊成會がある。研究會がある。講習會がある。常會がある。學校の行事がある。少年團の行事がある。青年團の行事がある。興亞會だ、振興會だ、選舉肅正だ調査會だ……と駒ねすみの様にかげすりまはつてもまだ足りない實情にある。

其の中に勇敢に飛び込んで來たのが助教の先生達である。いや、女教の先生達であると言つ

ていゝかも知れぬ。だが飛びこんではいつてみると、岡目でみた昨日の先生達の生活でないことをはつきり意識されたことと思ふが、困つたのは校長先生である。それも、三人か五人で經營してゐる校長先生である。

「學校の先生も容易でない」

といふ同情の言葉のかけに、其の同情の心よりも、もつと意味をもつた同情の言葉が父兄の口から出る様になつたのである。素直にきけば素直にうけとれるこの同情の言葉が、更に反省しなければならぬ多くの問題をもつてゐることを知らねばならぬ。けれども、世の多くの人は、教育の大事なことは説いてゐるが、先生達を大事にせよとはなかなか言つてくれない。昭和十七年五月二十六日、七日に開かれた帝國教育會總會にもこのことが論議され、それ〴〵方法を講ずることになつたが、それとてもお互ひの仲間だけの論議である。それ程に大きく残された緊急の問題ではあるが、吾々はそれを不平として訴へる様であつてはならぬ、助教だと馬鹿にされたのが口惜しいといふので、子供をたゞきつける様であつては、決して先生達が大事にされる時が來ないのである。もしもさうしたことによつて、

「先生達もなか〴〵容易ではない」

といふ同情の反面に、

「かうした先生達ばかりでは、學校の經營も困つたものだ」

と別な同情の心をもつた父兄が多くなつたとしたら由々しいことになる。

もはや、今日にあつては國民の一切の生活は、戦時體制の生活ではなく、實はこれが、常時體制の生活となつたのである。戦時體制といふと、ともすれば戦争の時だけのことに考へ勝であるが、支那事變以來すでに七星霜を経てゐる。すくなくとも教育者は、常時の體制に一切の教育事實を考へ直して、二十年の後——五十年の後——百年の後に備へなければならぬ。

さうすることが、もし眞實に先生達に同情した言葉があつたとするならば、其の同情に對する答へともなることであらう。この事は、助教であつても、訓導であつても少しも變るところがないのである。

苦

「先生、ものが高くなつて、お困りでせうな」

是れも同情の言葉の一つである。困つてゐると本當に同情してくれるなら、困らぬ様にしてくれると有難いのだが、下手すると、

困

「おれ達は、たつた一晩で先生達の一ヶ月分もうかるのだからなア」

と、自らを誇りとする同情の言葉であるとすれば、またおそろしいことである。さうしたことを十分知つての上で、とびこんで来た助教の先生達であれば心配はないが、教壇にたつて、「何んだ」と初めて知る憤りのまゝに、大事な學級を經營する様になると、いらざる心配をもつてくるのである。注がるゝ同情と、注ぐ同情とのくひちがひは、何時の世にも残さるゝことではあるが、心を平にして、道に處することも、また修行のありがたいところであらう。

義 憤

國民學校令は、國民教育の原理、内容、方法を明示してくれたので、迷ふことのない教育道がはつきり拓かれたわけである。吾々國民教育者は、此の示された教育道にまつしぐらに隨順する正直な心であればいゝのである。従つて、東亞共榮圈確立のために國民教育をどうすればいゝかと考へるのではなく、國民學校令の明示するところによつて東亞共榮圈確立に邁進すればいゝのである。換言すれば、國民學校令の明示するところによつて憶念されるところのもの

は東亞共榮圈確立であり、世界新秩序建設なのである。此の心なくしては、重大な責をもつて國民教育の任にたてるものでもなく、また本縣教育の革新も考へられぬことであらうし、郷土教育の教壇にも立つて居られぬことであらう。

然るに、國民學校の教師はいさゝかもさうした考へをもつて居らぬかの如く、

「時局を忘れて教育はない」

とか

「大東亞戰爭を忘れて教育はない」

とか

「國防國家建設なくして何んの國民教育ぞ」

苦

などと責められてゐる。縣下五千に近い教壇の同志——この重大進言に對してなんと答へ得る準備と用意をもつて居られるであらうか。私は今の今まで、日々教壇にたつてゐる教師はもつと／＼先のことを考へてゐる筈だと信じてゐた。たとひ、此の戦争が處理の曉をみて休戦ラツバがなつたとしても、更に來るべきより大きな宿命的な戦ひに處して今日たつてゐるのだと考へてゐた。従つて、日々の教壇資料となつてゐる一切の事象は、一つとして時局を通さず

因

語られてゐるものはないと信じてゐた。一つとして戦争を通さず取扱はれてゐるものはない筈だと信じてゐた。銃後の完璧も、増産の運動も、一切は高度國防國家体制の第一歩から培はれつゝあると堅く信じてゐた。否、一切は教壇の教師を信じてくれと願つて來たのである。宣傳はせぬ。誇りはせぬ。たゞ教師は、學校道場に正直にしかも眞剣に戦つてゐるのだと永遠に信じてゐる。縣教育にその革新を要望するところのものがあつたとすれば、それはすべて此の生きた教壇から願つたものであると信じてゐるのである。其處には決して不平もなければ不満もない。然るにかうした眞剣な教壇を、是れまでは誰一人としてふりかへつてみてくれる識者はなかつたのである。更に私は此の頃かうした言葉をまかされてゐる。

「視學は學校をみまはつて教壇の教師を指導するのが本務で、事務をとつたり來客の機嫌をとつたりしてゐることが本務ではない」

と、誠にうなづける言葉である。だが、さう言つてくれる所謂識者は、かつての視學になんといふ言辭を弄したことであらうか。私はそれをこゝに言ふことを遠慮するものであるが、思ふても義憤を感じざるを得ない。視學制度の改善は誰しも望んでゐる。しかもその實現を一刻も早くまつてゐる。願はくば責めることを忘れて、さうあらねばならなくした識者自らの責を

反省して、新たに視學を遇する道を考へてほしいものである。

視學を遇する道は、やがて教師を遇する道ともなるのである。

時局に便乗して、教師や視學の過去を責めるよりも、明日の遇する道を考へてほしいのである。教壇の教師は實に眞剣になつてゐる。意識すると否にかゝりはりなく身をもつて興亞の聖業を翼賛し奉つてゐるのである。

「東亞に於ける新秩序の建設は、わが聲國の精神に淵源し、之を完成するは現代日本國民に課せられたる光榮ある責務なり」

と言はれたかつての近衛首相の聲明を、決して忘れるものではない。教壇の教師は實に正直である。右するも左するも功利のためには決して動いてはゐない。たゞ教育報國の一念にたつてゐるのである。

苦言はお互ひ決して氣持のいゝものではない。お世辭だと思つても、

「あなたが校長になつてから學校が全く立派になつた」

と言はれると不快なものではない。だが是れは決して藥にはならぬ。もし助教の教師を、

「師範を卒業した先生に決して劣らない、實に立派である。」

と賞める校長であつたら、それは助教の教師の將來を安じてくれた校長の言葉ではない。それは、助教の教師に逃げられると、後任を探すのに一苦勞であるので、機嫌をとつてゐるのかも知れぬ。それを眞にうけて、

「ふん、俺はもう一人前になつたのかなア」

と、自惚れてはならぬ。私は研究會などで同人に口ぐせに言つてゐる。

「お互ひに賞めあひつゝするな。其のかはり、其の先生の最も悪いところを一ヶ條批評せよ。悪いところがなくなれば、其の先生の教壇が向上するのだから……」

と。良藥は苦い。この心をそのままに、父兄達の苦言も素直にうけることが大事である。抗議されたと思つてはならぬ。忠言だと思ふと感謝したくなる。父兄の苦言を素直にうける心構へとなれば學校からの要求も父兄に徹底させることが出来る。學校と家庭の本當の連絡も、さ

うしたところから生れてくる。

學校長の苦言、教頭の苦言、同人同志の苦言、父兄の苦言、さうした苦言を苦言とせず自らを反省する糧とするならば、苦言また喜んでうけ入れることゝならう。その爲に、學校經營が明朗活潑となり、學級經營が眞劍になり、教壇が向上するならば有りがたいことである。

だが、これはなまなかな修養では得られないことである。毎日の教壇、日々の勞苦を超越するところに得られることであらう。不斷の努力もまた尊い意義をもつてくる。お互ひは、一切の私心を忘れて精進することを怠つてはならぬ。

教壇の死

苦

三戸郡教育會長中村三郎先生の死は、あまりにも突然であるだけに、一層哀悼の情を深くするのである。しかも、職員會議中腦溢血で倒れたのを、これではならぬとその靜養を願つた職員と言葉を斥けて、最後まで會議をつゞけ、間もなく逝かれたといふことである。職に殉じた

関

先生の日頃の信念を、常に敬してゐる私は、たゞ合掌のまま、その美しき姿を偲びつゝ、はるかに冥福を祈つたのである。

「生死なき生死」

吾が身に最も由々しい関りがあるのは、只一校経営の協議一つであつたのであらう。死生の海を越えて、一切を職員と共に語りつゞけた偉大なるその信念を、そのままに吾も體したいものと自らに語つたのである。

大工は大工の職場に倒れ、漁師は漁師の職場に倒る。軍人は其の戦野に死をかへり見じ、教師はその教壇に死を怖れざることの信を念じてゐるものゝ、なか／＼に徹し得ない日々の生活を省みて、中村三郎先生の死は、まことに尊き吾等の教訓となつたことを思ふものである。ふりつゝもる雪もいつかは消えぬべし

岩木の嶺の明方の空

ますらをの心にもにて散りゆきし

君が姿の美しかりし

この大き戦の中をわが職に

殉する君は勇士のごとし

いさゝかも悔ひなしとする君が死を

美しと思ふ今朝の雪空

校葬によつて祭られた先生の死に、私は更に思ひを深くするのである。

「靖國神社で會はう」

是れは、再び生きてかへらぬ決死の將士達の悲壯なる訣別の辭である。私は、幾度となくこの悲壯なる言葉を新聞できかされて、たゞ感謝だけでは居れないやうな氣がしてならぬ。それと共に、日々教壇に一命をさゝげてゐる筈の私達は、一體どこで會はうと訣別の辭を語ることであらうか。僅かに誇る教育忠靈塔に決死の覺悟をさゝげるとしても、あまりにさみしさを感ずるのである。さう思ふ時、

苦 「靖國神社で會はう」

と語り得る將士が羨ましくてならぬのである。そして、感謝だけではすまされぬ心がさらに一ぱいになつてくるのである。

天 意

無爲の教化

越後國出雲崎の橘家は、地方の舊家でもあり、財産家でもあつたのであるが、馬之助が當主となつてからは、放蕩に身を持ち崩して湯水の如くに金を浪費したので、家も次第に傾いて行つた。こんな調子であれば、橘家の没落も遠くはあるまいと、家族をはじめ一族の者も非常に心配して手をかへ品をかへ意見をしたのであるが、魂の腐つた馬之助の行跡は毫も改まることなく、全く施すすべもなかつた。

そこで親族會議を開いた結果、長岡の岸に庵を結んで悠々自適してゐる伯父の良寛を頼んで

強意見をして貰はうと使をやつてその由を頼んだのであつた。暢氣な良寛ではあるが、さすが我が生家の浮沈に關はる一大事でもあるので、早速承諾して急ぎ生家へ立ちもどることゝした。

久しぶりで生家に歸つて來た良寛は、言ひしれぬ心安さを覚え、それからそれへとなつかしい幼時の思ひ出が頭に浮んで來るのも限りなく嬉しいことであつた。はげしく意見をしてやらうと思つてゐた甥の馬之助の顔を見たゞけでも、しみぐとした血縁の親しみに、涙ぐましい氣持さへ起つて來た。それから數日間、良寛は打ちくつろいだ態度で毎日馬之助たちと世間はなしに花を咲かせてゐるうちに、「意見をしよう」などといふ心持は次第にうすらいで行つた。

甥の馬之助は、いづれきびしくうるさい訓戒をいやといふ程くりかへすであらうと覺悟してゐたのであつたが、豫期に反して意見らしい意見も、訓戒らしい訓戒も何一つするでなし、血縁との談話そのものを心の底から喜んでゐる良寛の様子に、心はいつしかなごやかになつて、良寛を恭ふ氣持が日に日に濃厚となつて行つた。

そのうち急に良寛は寺へ歸るといひ出した時、馬之助は驚いて、

「せめてもう四、五日でも滞在して下さい」

と心から願つたが、良寛はどうしても滞在するとは言はなかつた。やむなく馬之助もあきらめて、良寛への土産物などをこしらへ、玄關へ送り出して草鞋を穿かせなどした。うつむいて草鞋のひらを結んでゐる馬之助の姿をなつかしげにちつとながめてゐた良寛の眼には、いつしか涙の露が浮んでゐた。わらぢのひもを結び終つた馬之助は、顔をあげた拍子に、涙ぐんでゐた良寛の眼をみとめて思はずはツとした。と同時に心の底まで洗ひ浄められる様な強い感動を受けたのであつた。良寛はわざと笑顔を浮べながら、

「長い間厄介になつたなア、わしも久しぶりで生家に寝泊りした上に、血縁の者たちと親しく語り合つて、こんな嬉しいことはなかつた。では達者でくらせよ」と別れを告げて家を出かけ様とした。この時馬之助は軽く良寛の袖をひいて

「伯父さま待つて下さい。伯父さんは私に言ひ聞かせることが澤山あるのでせう。それを何も言はずに歸られる伯父さんのお心持はよく分りますが、どうか何にもかくさずに言つて下さい。今まで、放埒の限りをつくしてゐたこの馬之助を、心ゆくまでなぐりつけて下さい。どうした事か、伯父さんがお出になつてから、私は自分でも不思議な位に心が朗らかになりました。今の私には、どんな事でも素直にきかれさうな気がします」

かう言ひながら、今更感激に堪へぬものゝ如く、馬之助の目頭には、早くも涙がにじみ出て居た。

人の性の善に立ちかへつた馬之助の、眞剣な言葉をきいて良寛はどんなに喜んだことであらうか、

「お、馬之助よく言つてくれた。伯父はうれしく思ふぞよ、實は親戚のものたちから頼まれて、お前をきびしく訓戒してやらうと思つて來たものゝ、お前と出あつていろく世間話をしてゐるうちに、もう訓戒することなんか無くなつて了つた。血のつながつた伯父、甥の間に通ふ靈感とでも言はうか、わしは最初お前と話した時から決して之は手に負へぬ様な悪人でも何でもない。一時の心の迷ひから放蕩をはじめたものだらうが、やがては人の性の善に立ちかへる純情をも多分に持つてゐる。それに賢いお前のことだから、人から意見されるまでもなく、自己批判力も充分に持つてはゐるが、悪いと知りつゝ性格の弱さから、又一種の意地はりなどから不行跡をつゞけてゐたものに違ひないと感じたのだ。殊にわしが來てからといふものは、お前の心の中に日一日と悪霧がはれて行つて、爽やかな光のさし初めるのを氣づいたので、わしは意見がましいことは、たゞの一言も言は

なかつた。もうお前は、前非を悔いて普通以上の善人になりきつて居る。どうか一家のため、又心配をかけた親族たちの爲にも、自重してやつてくれ。わしは之で大安心して山へ歸れるといふものだ……」

一語は一語より大なる愛の泉からほとばしる慈愛のしたゝりとして、馬之助は唯々感激の涙にくれるのであつた。

教壇にたつて靜かに四十の兒、五十の兒を見まはした時、吾れにこの大なる慈愛の泉の流れが湧き出てくれるならば、どんなに有りがたいことであらう。小さくともよろしい。慈愛の眼から一滴の涙でもよろしい。心の底からわが教へ子をいつくしむ涙であつたら、一切の悔の言葉を残すこともなく、善なる子供の一つ一つの姿を、そのまゝに育て行くことが出来ることであらう。

やゝもすれば、教師自らの罪を子どもに負はせて、餘念ないことがある。子どもの罪は責めても自らの罪を責めることを忘れてゐることある。甥の罪を責めなければならぬとわざ／＼やつて来た良寛が、一言も責めることなしに慈愛のふところに抱いてくれた温かさに、吾れから人間の本性に返つた馬之助の姿は、そのまゝ教壇からみるわが教へ子の姿であつてほしい。叱

つた後の淋しさ、たゞいた後の悔ひはいつまでたつても消えることのない教壇の日々を思ふと、良寛の姿が尊く思はれてならない。

容 姿

天

教壇に立つ教師の容姿こそ無言の裡に兒童に響く感化の力である。尊嚴であるべき教壇に、眞剣であるべき學習室に、ともすれば容姿の亂れの多いことをなさげなく思ふことがある。暑ければ暑いで上衣がなかつたり、ワイシャツ一枚で腕まくりをしたり、寒ければ寒いでストロブに両手をかざしては椅子に坐り込んだりすることがないでもない。教師の容姿が亂れると自ら兒童の容姿も亂れて来る。裸になつても禮を失することゝは思はず、マントを腰にまきつけても當然の姿となつてくる。これが中學生となると師を友の如く語り、師もまたわが友と見らるゝことを最も信用あるかの様に考へることになる。方言は親しみの言葉となり、禮を失することは子供の誇りの一つとなつて、いよく師と弟子の境がなくなつてくるにつれて、叱聲は

意

師に對する反抗となる。わが父と俸給の額を比べては師に對する批評の資とする様になつては、まことにおそろしいことである。

だが、そのおそろしいことは教壇に立つ教師の心構へから流れてくるのだとすれば、日々の教壇の容姿は實に大きな無言の教育の力であることを忘るゝことは出来ない。

「伏見天皇の御代正宗の鍛へた刀が、天皇の御守刀となつた。之れを聞いた郷義弘は

『正宗は刀を打つよりも世渡りの方が上手で賄賂でも使つてこの僥倖を得たものに相違ない。よし、それならこれから相州に赴いて斬つてやらう』

と決死の勢で遙々鎌倉まで出掛けた。彼は窓から中の様子を覗くと今までの態度ががらりと變り、しを／＼と玄關に廻り、正宗の顔をぢつと見つめ乍ら

『さて正宗殿、自分は貴殿と腕比べをして、場合によつては貴殿を打ち果す覺悟で越中からわざ／＼參つた者でござるが、今よそながら貴殿のお仕事ぶりを拜見すれば、しめ繩神々しく張り、隅から隅まで祓ひ清め、御自身も折目正しい袴を着けて威儀堂々と鑓を打たれる。まことに身も魂も刀一つに打込まれる程丹誠込めて居られる事が分る。之でこそ天下第一の刀鍛冶と深く感じ入りました。然るに、自分は仕事場に酒を置

いて飲み、夏は兩肌ぬいで仕事をすると云たやうなだらしない有様である。つい今まで刀は腕一つで打てるものと心得て居りましたのは實以て恥かしうござります。どうか只今より貴殿のお弟子として心の修行をさせて戴きたい』

と兩手をつき眞心をこめて頼み弟子となつた』と云ふ話がある

清められた玄關にたつては、自ら自分の襟の亂れが氣にかゝる。日々の教壇の修行に此の眞剣さがなかつたならば、血の通つた教育を見ることが出来ないことであらう。

善 導

天 享年七十三歳で寂した澤庵禪師は、其の隨筆卷の四に、

「鷺ハ晒サ、ルニ白ク、鴉ハ染ザルニ黒ク、ミナ自然ノ様ト云ヘリ。人ノ教化シテ、惡人變ジテ善トナラバ、彼ノ鷺鳥ノ如シ。然ルニヨリテ思フ。法滅シテ外法トナレバ、ミナ自然ニ歸スルカト疑フ。然ルニ又、教化ト云フ佛ノ教ニ限ラズ。孔子ノ教ニカギラズ。孔子ノ

道教化専ラナリ。悪人ヲ教ヘテ善人トナサシメバ自然トハ云ハレズ。已レガ修因ニヨリテ悪人モ善人トナルナレバ、人ノ仕事ニヨリテ、ミナ移リヤスケレバ、自然ノ道トモ云ハレズ。」

と言つてゐる。自然のまゝでは教化ではない。人間の理想と努力とが加はつて、自然を變改せしめるところに教化が存立するのである。私達は悪しき兒とみて悪しきがまゝに放任して置くことは、教師としての責をはたさぬことになる。吾の全力で、吾の全生命で善しと思ふところに育て培くんでこそ使命を全うしたと言へるのである。

さりながら、教育の法は知識をつめ込むことばかりであつてはならない。徒らに記憶を強ひ込むことばかりであつてはならない。寛にして悠、不知不識の裡に圓滿なる人間として育つて行くのでなければならぬ。

大自然はいつでも吾々にさうしたことを教へてゐる。

聲もなく臭もなく常に天地は

書かざる經をくりかへしつゝ

花は花紅葉その儘に

言はで教へる我がのりの道

一つは二宮尊徳翁、一つは道二翁道話の歌であるが、一切の私心を忘れて自由に放埒に天地を読み、人生を讀まうとするところに教育の法則が描かれてゐることを知るのである。

天地生々の實相は自ら人間生々發展の營みである。すべてのものは休みなく働きつゞけてゐる。しかも春は春、夏は夏、秋は秋、冬は冬として萬物を培くみ育てゝゐる。吾々は自然のかうして動く姿に應じて善きを目ざして働くことが天意に順することなのである。もしあやまつて春に秋の働きをしようとし、夏に冬の働きをしようとするれば、天意にそむく狂ひをみるのである。天意の恵みをおろそかにすることは、再び巡り來ることのない人生の春を忘れて徒らに老の悲しみをみる様なるものである。

一日は短い一生である。その一日をおろそかにすることは、ながい一生をおろそかにする緒となる。時と力が無駄のない生活に落されると功業の大きな資本となることを忘れてはならぬ。教育の善導もさうしたところに深い意義をもつてゐるのではなからうか。

天 意

「天意にそむいてはならぬ」

目に一丁字もない七十の婆さんに教へられた此の言葉を此の一年出来るだけの努力をもつて同人の教壇をみ、また自らも修行してきて、しみじみと考へさせられたのである。六十名、七十名の子どもが、一人一人ことなつた心のまゝに、壇一つに落ちて来た時程、子供のなごやかな顔をみる事が出来ない、優も劣も、いさゝかの差別の色を見せることなしに、それだけの力に應じて考へてくれてゐる朗らかな顔をみると、たまたまなくうれしくなつてくるのである。おこるでなし、叱るでなし、劣は劣のまゝに答へ、優は優のまゝに答へ、お互ひが教へ、教へられつゝすく／＼と伸びて行く子どもの姿は、全く天意のまゝに流れてゐる様な気がしてならぬ。

いく度語り、いく度論じても言葉の争ひだけでは落付くところがなかつた此の問題も、壇に行じてみればひとりで解けて来た様な気がしてならぬのである。内省の力が、學年研究会にまで進んで来たのも決して不思議な姿ではなかつた。それだけの力のへだたりはあつても、精

進の力強さは、教壇に落付きをみせてくれたのである。上手といふ言葉も、下手といふ言葉も今は教壇の上の問題に使ひたくはない。只天意にそむかざる教壇修行の姿をまともに見て、昨日よりは今日、今日よりは明日へと、一日一日の研究をこまかに語りあつて行きたいのである。晴れた青空をみればなんとなく長閑さを感じる。一切の毀譽褒貶を忘れて教壇に行じてゐる姿をみても、理窟なしに心のゆたかさを感じるのである。そこには寸暇もない身の忙しさであつても、常に心のゆたかさのあることは、たまたまなくうれしいことである。

しかし、こゝまでくるにはなみ／＼の苦勞ではない。お互ひの一寸の心の狂ひが、一校經營に大きなヒビとなつてくることはあり勝のことである。お互ひにお世辭の言ひ合ひつこしても心のむきに狂ひがあつては、なか／＼一校一心の動きになれない。それをひつたゝいて反省せしめようとしても容易なことではない。その點に行くと、女の先生に罪が多い。と言つても縣下の女の先生、おこつて下さるな。それだけあなた方の動く力が、一校の經營にどれだけ大事であるかと言ふことを、男の先生にも、女の先生自身にも考へてほしいからである。

わが學園も、随分とさうした點に苦悶が多かつたことと思はれる。だが過ぎ去つてみればそれも建設の礎の一石となつてゐる。賞められたい心も、賞めようとする心も、今は忘れて只一

途に天意にそむかざる様精進をつづけて内省の道を辿つてゐる。

靴

一家の心の整へは玄關にはいると大てい想像がつくと同じ様に、一校の心の整へはやはり其の學校の玄關で見られることが多い。

山岡鐵舟先生は、他流試合の者が道場へたづねてくると必ず門弟に下駄を注意せよと言つた。もし、その修行者の下駄に少しでも亂れがあると、先づ門弟に試合させ、少しの亂れもない平らかな修行者には、鐵舟自ら相手に出たといふ話である。

何かしら私は胸を打たれたものがある。是は失禮の様であるが、言はねばはつきり修行のあつとが見えぬので、内省のつもりで同人のお叱りを頂戴する覺悟で言ふが、私がこの學園に赴任して一步其の玄關に足を入れた時、びつくりしたもの、一つは玄關に並べられた長靴の姿の亂れである。わが學園は女兒の學校で女の先生が多い筈、その女の學園の玄關に並べられた靴の

姿の亂れをみました時に、自らに反省の資料を得たのである。それから朝禮の時、校庭に出られたあとの上靴上草履に注意してゐたが、一日として亂れないあとをみる事が出来ない。作法の時間には作法として教へてゐるが、それが一つとして生活に落ちてないことをはつきり知つたのである。私は自らに教へられてつとめて靴の亂れを正し、同人の内からの反省をまつてゐるが、なか／＼それが見えない。そこで私は最もおくれて出るので、毎朝丹念に同人の上草履上靴を揃へてくれたが、それでも反省の機會を見出すことのない同人のあることを知つた。しかもそれは男の先生ではなくて、女の先生であり、助教の先生でなくて師範を卒業された訓導の先生であるのに一番強く胸を打たれたのである。靜かにそのかへり来る日のあるまでまつて居れない私は「さア揃へませう」と言つてやうやくホツとしたことがある。これは新らしい同人を加へるたびにくりかへしてゐる問題である。

此の頃はさうした靴の亂れはなくなつたとしても、玄關に送つたお客さんの靴を揃へるところまでは進んでゐない。皮肉の様ではあるが「揃へてあげなさい」と幾度くりかへしたことであらう。

今一つ、外客のために便所に用意した下駄が、ともすればひつくりかへつてゐることがあ

る。たまにはひよつとした機會で女の先生のあとを行くこともあるが、ひつくりかへつた下駄をまたいだまゝ通つて行くこともあるのを見ることがある。此の頃はどうかその亂れをみるものがなくなつたことをよろこんでゐる。

學校用のスリッパが何時なくなるともなく行衛が不明になつたり、時にはぬれたまゝ、緒のきれたまゝ校庭にすてられてゐることは、どの學校にもあることだが、これもなか／＼内省するまでにはながい時日を要することであらう。

内省するこの一年——今日此頃なんとかさうしたことを再びくりかへす様なことがない様にと願つてゐる。

この心が何時となく子供の心に移つたと見え「吾等の會」の協議問題に出る様になつた。それは「お互にハキモノは下駄箱に揃へて入れませう」と言ふのである。下駄箱に入れた筈の靴がひつくりかへつて落ちてゐたり、右と左が別々に入れられたり、亂雑なまゝに置かれてゐるのが何處の學校でも見られる普通のことゝなつてゐる。當番の先生がどんなに朝禮の時に小言を言つても、なか／＼整頓されないのは玄關の亂れである。週番の先生が小言を言ふ學校はまだいゝとして、それが農村の學校では仕方がないと、あきらめる様になつては可愛さうである。

る。

「そんなコマカナことに、神経を使はなくても、訓育の問題は澤山あるのではないか」

さうした心の先生がないでもないが、脚下のかうした瑣末なことが出来得ないで、どうして大きな訓育の問題が解決されるのであらうか。しかも全職員に一校一心の誠の心なくしては、一切の行爲に同一の姿を見ることは容易に出来ないのである。行爲には努力を要する。どんな些細な事實に對しても行爲となるまでは、より以上の努力を要する。それが習慣となるまでは師弟一如の境地にたつてたえざる努力をするのでなければ、育つて行かぬのである。徹してみれば、易々たる問題も、生々發展の子供を相手にしては、求導俱行の態度が先づもつて教師に備つてゐなければならぬ。

心 と 形

教育は内からである。内から燃えあがつてくる求道の力によつて、教育の営みがいよく眞

實になつてくるのである。これは、小學校が國民學校に變つても少しも狂ひのないことである。だがしかし、内から燃えあがつてくる力の目覺めをまつてゐるのには、あまりに弱い教師の力である。この教師の力をよりよく強くする爲には、強くなるべき形を與へなければならぬ。

教育は内からであると同時に、教育は形からであると言ふこともこゝに意義をもつてくる。内から求めると共に、外から形を與へていよく實踐の姿に眞實をみることに、教師の力が加はるならば、弱い教師の力も偉大な力となることであらう。形を與へることは一つの躰をつけることである。躰は口だけで與へるのではなく、身體で與へることである。教師の率先垂範はこゝにその尊さをもつてくる。

奉安殿の前では、最も嚴肅な心で最敬禮をすることだと教へることは内に呼びかけることである。教師が奉安殿の前にたつて、かうして最敬禮するのだと、範を垂することは形を與へることである。否、さうすることを日々の教師の生活に範を垂すことは、日々教師のこの尊い姿をみる兒童の心を内から目ざめさせることなのである。かくして目ざめた兒童の生活は、もはや教師から與へられた躰ではなく、兒童自らに求めた躰となるのである。教育は内からである

といふこともこゝに本當の意味をもつてくる。

居は氣を移すといふことがある。朝會を嚴肅にしようとするれば、嚴肅なるべき居に心を置かしめなければならぬ。兒童に姿勢を正しくさせようとすれば、教師自らも姿勢を正さねばならぬ。不潔な學習室に兒童を押しこめて清潔にせよと修身で説いたとしても、それは聖人でない兒童には無暴な話である。率先して清潔にすべく、教師も箒をもち、兒童にも雑巾をつかませ、不潔なところを掃除することを指導するでなければならぬ。ハタキのかけ方、箒の使い方、板の拭き方に至るまで、一々その形を與へなければ、内なる目ざめが納得するわけがない。それが納得された時に初めて新たな目ざめが、新たな向上に道を求めることになるのである。

たゞこゝに最も注意しなければならぬことは、形を與へることが強制であつてはならぬ。彈壓であつてはならぬ。常に自然でなければならぬ。素直でなければならぬ。心の目ざめは自らなる指導によつて、日々の生活が昨日より今日、今日より明日へと鍊成されて行くならば、いづつ如何なる時でも御國の御役に立つ皇國民が培はれて行くことであらう。

天心にかゝつた月の光りは天地一切の氣を一つにしてゐる。求道の天地に一切を素直にする

時、其處には形もなければ心もない。形とみるは吾が心である。わが心外にあらはるゝは形である。集團訓練にしても、團體訓練にしても、其處に狂ひがあれば決して教育の營みが充たされぬことであらう。内なる心と、外なる形と一つになつて動く時、初めて訓練なる實をみることであらう。

國民學校は躰を重んじてゐる。わが學園も躰を重んじて來た。しかも今よりは一層強化せねばならぬことであらう。教師の朝會、兒童の朝會、清掃の生活、會食の躰、學習態度の馴致、行事の教育、凡てこれ皇國民鍊成の教育陶冶として、その徹底を期することに懸命でなければならぬ。

考へること

「親をおもへば親來つて我となり、子をおもへば子は來つて我となる。我らの心の中は、山河大地、一切衆生で一杯である。話すときには聞き手とつながり、書く時には讀み手とつ

ながる。泣くのは泣かされてゐるのであり、笑ふのは笑はせられてゐるのである。何かを悲しんでゐる心ではあるが、心の底は人生そのものを悲しんでゐるのである。我あつて人生があるのではなく、人生あつて我があるのではなく、人生と我とは一つである。我のあることゝ、人生のあることゝは一つである。名もなくして生き、名もなくして消ゆる、數にも足らぬ我らもまた、人生といふ大きなものを背負うてゐるのである。見るかげもなき我らと雖も、人生の眞の意義を生きるといふ大きな責を果すために生きてゐるのである」

さうした意味の言葉を、雪消の窓に一日一日と春めいた温かさを感じる頃、なんとなしに思ひ出されて、しみぐと來し方を考へることが多くなつた。考へるといふ無限の力を惠まれてゐる人間であるからには、その貧富の如何を問ふことなしに、職の差別を思ふことなしに、どうしたつて自分の生きてゐる意味を深く考へることであらう。その意味も六かしいことではなしに、すぐ眼の前にある生活の現實の姿を反省すればすぐ感じらるゝことである。大地から生き出されたことであるなどゝ、そんな大げさなことではなしに、食ふてゐること、呑んでゐること、それそのまゝのありふれた生きてゐる事實のことでも、いよゝゝ大きな人生の問題として考へさせられるのである。

年端もいかない十六、七の青年男女が、手に手をとつて飛び出して警察のやつかいになつて

「このわらはどアー」

とあきれかへつたあとに

「春だもんなアー」

と自ら感傷的となつて我れにもあらずぐづ、た若い警官の言葉のうちにも、さうした微妙な心の動きに、大地の自然の動きを考へさせられるのである。生きることも、死ぬることも、たつた一呼吸のつながりではあるが、生きて悪口を言はれ、死んで賞められる人間のあまりに多いことを見せられると、どれが眞實の人間の心か、無限の天地の心からすれば、問題にならぬことではあらうが、因業からぬけきれない人間にしてみれば、全く愚痴つばい世の中になつて了ふ。一切の毀譽褒貶を考へずに、日々の仕事に、生活に精進することが、天地宇宙と一つ心になつた姿だとはたれしも言ふことだが、それがなか／＼しつくり落ちて來ないところに平凡な人間の生活としての大きななやみがあるのだ。ほんたうの心の自由を求めつゝも、求め得られない生活の姿にたへきれない苦しみがあるのだ。

だが、目に見えぬ大きな不思議な力の動きが、人間のすがたをはつきりと見てゐる様な氣が

今もしてならぬのである。

親 心

子を思ふ親心、親を思ふ子心、それは一切の利害を超越した天意である。教へ子を思ふ先生心、先生を思ふ教へ子心、もし、その間に親心子心の一體一心の融合の世界を見出すことが、一日の間の幾時間、一時間のうちの幾分でもあるならば、教育の實績は一切の理論を越えて吾に喜悦を與へてくれることであらう。

江戸下谷高峰寺の住職某は、當時に於ける高僧の一人として歸依する衆生も多く、弟子も相當にあつた。

それらの弟子の中に、甲乙二人の高弟があつた。甲なる僧は道心堅固にして、日夜修養を怠らず、日毎に善行を勵んで天晴れ名僧の卵として師の坊にも信頼され、他の者からも敬はれてゐるが、これに反して他の一人、乙なる僧は學識もかなりになりながら、もつて生れた不良性

が間がな隙がな頭を擡げて、大酒をあふる。口論をする。腕力を揮ふ。時には寺の什器を金にして女狂ひもするといふ有様で全く手に負へない。

寺を思ひ、師の坊を思ふ善良な甲僧は、之を黙視するに忍びず、しばし師の坊に進言して乙僧を厳戒せられんことを乞ふた。師の坊としても、乙僧の醜い数々の行狀を苦にして、時々意見を加へたが、たゞ口先で改悛を誓ふだけで、非行は依然として止まない。止まないばかりか益々惡辣さを加へて行く一方である。甲僧もあまりの事にたまりかねて、歸りの場に向つて「あんなに悪い事ばかりする者を、このまゝ捨て置かれては、外の者にも非常に悪い影響を及ぼしますし、なほ當寺の禍にもなりますので、彼を追ひ出されるがよいと思ひます。若しどうしても彼を追ひ出されない様ならば、私がお暇を頂いて此處を出て行くつもりであります。」

と決心こめて申し出た。師の坊は、しばらくだまつてゐたが、やがてハラ／＼と涙を流して言つた。

「お前の心持はよく分つてゐる。俺もあの惡僧は、ほと／＼持て餘してゐるが、之も元を糺せば俺の不徳の致す所、俺の手許にゐてさへあの不行跡なのだから、之を手放すとすれば

あのまゝではどこへ行つても受け手がなく、衣食に窮し、益々惡事を重ねて、果ては重い罪科を受けるに至るであらう。それを思へばこゝ暫らく我が傍に置き、嚴しく教戒して眞人間にしてやりたいと思ふ。お前はそれに較べれば、學徳共に勝れてゐるので、どこへ出ても一人前の小僧として恥かしくない。が、どうか、今少しく當寺にあつて、俺と力を合せてあの惡僧を改悛させる様に骨折つてくれ。」

と、あくまで優しいこの師心に、どこまでも情深いこの親心に、甲僧はいたく感に打たれ、止めどもなく熱涙の流れ出づるを禁じ得なかつた。

彼の惡僧も此のよしを聞いて、今更の様に師の坊の底しれぬ大愛と高恩に感銘し、其の後は惡夢から覺めた様に飄然として善心に甦り、今までとは打つて變つた勤行ぶりに精進したので師の坊はいふ迄もなく、甲僧も非常に喜び寺内はために夜が明けた様な朗らかさを覺えたのであつた。

課題を怠つたと言つては便所の掃除の罪を與へ、友達と争ひしたと言つては居残りの罪に苦しめ、校則に反したと言つては停學の處分を與へて師の威嚴を保たうとする此の頃の學校の、師の道、弟子の道を思ふと、誠に寒心に堪へぬものがある。

そしてまた、我が子の躰に一切の責任をもつて培くみ育て、くれてゐる教師に對して、事毎に苦情を申込んで、それが親の權威かの如く振るまつてゐる父兄の醜い姿を思ふと、いよいよ情けなくなつてくるのである。

更にまた、社會が一個の立場からはれを責めて、いよく教育の事實をさへ否定する様な行動さへとる様になつては、全く言ふ言葉を知らぬのである。

親心子心、師心弟子心、それが一つ心になつて行はれる美しい教育の世界が、是れから後の世に見られぬことであらうか。

ある日の講演

農業教育研究會

曉方の舗装道路は、初秋の淡い感觸を與へて何時までもくく歩いてゐたい様な氣がしてならなかつた。青森驛について、相手の一人でも見付けようとうろく見まはしたが、今日はどうしたといふのか一人も見つからなかつた。仕方がなしに、一番尻つぼの列車に一人ぼつちで何かの思ひ出をたどつて行かうと、あきらめて眼をつぶつたのである。思つたより空いてゐたので、ゆつくり足をのばして横になることが出来た。

ぞろ／＼と乗客の乗り込んだ音に、まどろんだ夢をさましたら、もう川部驛についてゐた。

乗り換へた列車に乗り込んで来たのが、大小とりまぜ、その大半が仲間の先生達である。若いものもゐる。老人もゐる。それでゐて何れも元氣な聲で何か言ひつゞけてゐる。遂ひ私も元氣付いて。

「おう、大勢のり込みましたね！」

とお世辭を言つたつもりであつたが、乗り込んだ仲間の先生達は、如何にも偶然だと言ふ顔付で、ていねいに挨拶したものである。そして、一行のリーダー格の中年の先生が、

「どちらへ……」

といふわけである。餘念のない私は、

「板柳へ！」

と言つたら、

「では、農業教育研究会へですか？」

といふのである。私にしてみればまことに奇問されたわけである。なんだかひよつと私も妙な氣持になつて来た。

「ちうです。」

それには一寸毒氣を含んでゐた様にも思はれたので、はツとして、仲間の先生達の顔をまべんに見まはした。

「あなたがですか？」

いよく驚いたので、

「それはまた——どうしたわけですか？」

と、反問せずにはゐられなかつた。

「いや、なんだかお門違ひの様な氣がするので……」

と、はげてもゐない頭をつるりとなで、迷惑さうに言つたのである。成る程、さう言はれてみるとさうである。私は此の郡の擔當視學でもない。縣視學ではあるが郡視學？ ではない。また、農業を指導し得るまでの研究も發表したことはない。私の顔をみるとみんなが國語の先生であるとか考へてない。先生達にしてみれば、全くのお門違ひにとび出して来た様に思はれてならぬのであらう。無理もないことである。

全く私は相手に眞向からお面を一本頂戴したわけである。知る人——知らぬ人——男も女もつれづれの満座の列車の中で、見事にお面を一本頂戴したわけである。私はお面を一本頂戴し

てなる程と思つた瞬間に、私の幼な時の姿、走馬燈の様に思ひ出をたどつたのである。私は今一度も發表したことの無い私の自叙傳の一頁を、皆さんに読みかかせなければならなくなつたことを、なんだか情けなく思ふのである。

思ひ出せば四十四年前、秋もみぞれに深くなつて、すべてが物悲しい感傷となる十一月十五日、私は末子として西海岸の一漁村に生れたのである。當時の私の家は、米穀商の傍ら百姓もやり、更に漁業にも手を出してゐた相當な舊い家であつたので、常に出入りの若い者が四、五人居たのである。母は主として若い者と一しよに百姓して居られた。田植時！ 除草時！ 畔に疲れを休む母のふところに手を入れて、お乳を両手につかんで呑んだ、あのお乳のうまさは今も忘れることが出来ない。時には畑の隅で、若い者の運んで来た「ミノ」を敷物の代りにして、生味噌をつけたお握りの御飯を食べたあの御飯のうまさも忘れることが出来ない。そして、お八ツにもつて来たお芋を食べながら、母の取入れの終る喜びをまつて居たものであつた。

かうして自然のふところに抱かれて、母の愛に育まれた私は、小學校の時にはよく田植の御飯を運んだものである。夏休みには、兄さんや姉さん達と、畑からお芋をしよつて来て母から

御褒美を貰つてどんなに喜んだことであらうか。争ひもなく、不平もなく、平和な生活は百姓であればこそといふ温かさを、一切の理窟なしに培つてくれたのである。理法は知らぬ。只自然の力に育まれてゐる百姓の心安さに大きくなつた私は、小學校を卒業する頃、どうしても生活の安定した職業を求めなければならぬといふことを、恐ろしい程強く考へる様になつたのである。それは、母のお乳を畔に呑んだあの田畑が、いつとはなしに人の手に渡り、廣い屋敷にたつてゐた白い倉もこわされて了ひ、大きな家も半分にも足らなくなつて、老ひて行く父と母との顔に、其の日其の日の生活の苦しみの悶えを見出したからである。そして、あつて育つた百姓の生活を遂に私には許してくれなかつたのである。

しかし、自然のふところに百姓の安らかなかごにゆられて育つた私は、どこを生の定めのごともなくさまようてゐる間にも、母の手に握られたあの一塊の土のぬくもりだけは忘れることが出来なかつた。

師範學校にはいつてからもやはり農業科はあつた。當時の先生は島影先生といつて、ピョコンとした髯の生えた面白い先生であつた。私はよく生徒の出欠係を言ひつかつたものである。時には、誰が一番早く逃げて行くかまちはがはずに印をつけよ……など、注意されたこともあ

る。一度も田の草を取ったことがないが、それでも及第點を貰ったことをみんなに羨やましがられたものである。

卒業と同時に、海岸ではあるが農村めいた學校に赴任した。私の心身のどこかに育つてゐた百姓の生活は、どこからともなく湧き出てくるのをどうすることも出来なかつた。それから十一年の間に山の麓の學校にも居た。更にまた海だけでは食へない漁村にも居た。時には青年團員を督勵して開墾したこともある。時には子供と一しよに田植したこともある。時には處女會員と共に玉葱や、サツマイモなどを町に賣り出したこともある。ことに其の頃は、一坪農業といふのが流行して、農會の技手と力を合せて、兒童各自の家庭に一坪農業を行つて品評會など開いたこともある。師範の卒業生が一かどの農業指導となつて、ながい間威張つたものである。

車中でお面一本頂戴しながら、そぞろにさうした昔が思ひ出されて微苦笑したのである。其の思ひ出の中に、今も其のまゝ耳に聞えて來るのは、あの青緑の波をたゞよはす田圃で、若い男と若い娘が田の草をとりながら唄ふあのヨサレ節である。ホーハイ唄である。晴れ渡つた秋空に、歌にくつゝいた土のかたまりをとり去る、鎌でたゞくあのすみきつた音が、遠くの森に木霊する清らかさである。

今私は、お面を一本頂戴した心の底によみがへつてくる過去のさうした生活をふりかへつてみると、何だか小學校の農業教育と、青年學校の農業教育との心構へが、自らことなるのではないかと思はれてならぬのである。こんなことを専門の皆さんに言ふことは、釋迦に説法のきらひはあるが、幾度となく縣下小學校の農業の實習を視察してゐる間に、さうしたことを考へさせられてならなかつたのである。

稍もすると、教室の農業は理論に終り、畑地の農業は實際に偏して、其の間に何等のつながりをも見出すことが出来ないものである。何とか其の間にとけあつた力を見出すことは出来ぬものかと、お互ひに語りあつてゐることだけは見られるが、それはやはり口先の問題に終つてゐるのが現状の姿である。

種子の發芽に温底が必要だと教室で教へてゐるが、土の中に入れた手のぬくもりを教へてくれぬ。發芽に水分が必要だと教へても、指の先にくつゝいた土の感觸を味はひさせてくれぬ。畑の中どころがつてゐる西瓜の敷を數へさせるが、曉方のしたゝる露を平手ではらひのけ、ザクザクと庖丁を入れて食べる法を教へてくれぬ。芋をほるのだよと命令はするが、ほりかへす芋の美しさにくづれてくる土の香をといてくれぬのである。小學校の農業教育は、收穫の苦し

みを教へる前に、子供自らの楽しみを培ふことが大事であると思ふのである。教育といふ全野から見下した時、其の一使命をもつ小學校の農業教育に對して、今一度検討する餘地があるのではなからうか。

本日の立派な授業を拜見して、自らに問ふたものが此の問題である。結論として望む。小學校の農業の先生は専門家にならないまでも、小詩人となつて、小さな詩人となつて子供と共に農業を楽しんでほしいものである。

眞向からお面を一本頂戴した私は、遂ひ自叙傳の一頁をひもどかなければならなかつた苦衷を御察し下さつて、御寛しを願ひたいものである。

體操研究会

午前から引き続き授業を拜見し、しかも全校職員が一人残らず體操をやつてゐる實際の状況を見て、全く愉快に堪へぬのである。しかもそれが教育全體からみて、その與へられた體操

科独自の使命をはつきりとらへて、全職員一致協力經營されてゐることを伺つて、一層愉快に思ふのである。

更に學校要覽に見えてゐるが、其の實績は獨り體操科ばかりではなく、他の教科一般にも其の能率の増進をみてゐることを知つて、これでこそ體操科を指定した意義も達し得られたことと思ふのである。體操をやつたが爲に他の教科がおくれたとあつては大變である。あらゆる教科に亘つて其の効果を見るのでなければ、眞に體操教育が徹底されたとは言はれぬのである。何しても、最近本縣の小學校の體操は著しい進境を見せてゐることは喜びに堪へぬ。是れも畢竟するに各位の眞剣なる研究と努力によること、深く敬意を表する次第である。一層の御精進を願つてやまぬ。

是れを機會に、希望の一、二を述べて御挨拶にかへたい。

第一は、何れの教科を問はず、凡ての教科に對して目標を明らかにすることが大事である。其の目標に向つて指導するに大事なことの一つは、基本的な取扱ひを粗略にしてはならぬといふことである。よく「計畫は密に實行は粗でありたい」といふことを聞くが、稍もすると計畫が粗で、實行を密にしようとする傾向をみることを遺憾とするものである。ことに豫告なしに

視察すると、密にしようとするのか狼狽するのか、寧ろ氣の毒に堪へぬことが多いのである。今日は少しもさうしたことはなく、低學年、中學年、高學年とそれ々の目標を示され、指導階段も暗示され、基礎的な訓練も充分であつて、いろいろと参考になつた點が多かつた。理論に、實際に、更に一段の御研究を願ふ次第である。

第二には、東北、殊に青森縣民は明朗性を缺いてゐると言はれてゐる。若し、是れが事實であるとは認されることであつたとすれば、小學校の教育に於て、何等か考へなければならぬことであらう。しかも、日々の教壇の上に具體的に考へねばならぬことである。小學校の各教科は、この明朗性を養成するに、いろいろの方法があることであらうが、最も此の氣分を養成することの出来るのは體操科である。今日は、體操科の研究會であるからお世辭を言ふのではないが、最もふさはしい教科であると信するのである。

最近體操の授業をかなり見てゐるが、やゝもすると無言の體操を見ることが多い。私はどう言ふものか、心の鬱憤を晴す様な體操が一時間の中どこかにあつてほしいと思ふのである。喜びを喜びとし、思ふ存心のうさを晴らして、人前をつくろつて心にもないに、微苦笑をするやうなことがなく育てたいと思ふのである。例へば、手をたゝいて喜ぶにしても、教師のみ

が一人で「バタ／＼／＼／＼」と喜ぶのではなく、児童も教師もとも／＼に手をたゝいて口をあくものはあけ、はねるものははね、心の底から喜んでほしいのである。

線路工夫があつた秋空に、「オースコイ」「オースコイ」とかけ聲をして、「つるはし」の響きを合せてゐるあの境地を知つてほしい。あの時の労働者には、おそらく労働の不平も苦痛も一切ないことであらう。しかも、生活の一刹那々々をきざんでゐる生の尊い姿をみる事が出来るのである。

體操することが苦痛であつてはならぬ。疲勞することであつてはならぬのである。凡ては伸び行く子供、生長する子供のよろこびであつてほしいのである。

今一つは、小學校の教育は決して一つの教科によつてのみ充されるものではない。即ち教育の全野を通して行はれる處に全人的の徳化啓培が行はれるのである。此の意味からすれば、統一のない學級のより集りや、有機的關聯のない教科本位に編成された學級による學校經營は決して十全なものではない。稍もすれば、吾々實際家の豫測せざる大きな問題に禍されて、兒童を傷けることが多いことと思はれる。學校を經營するにあつては、此の點に充分の用意と準備とがなければならぬことと思ふ。

然るに、特に最近とは言はぬが、師範を卒業した所謂新進氣鋭の士と、吾も人もゆるしてゐる青年有爲の教育者にかゝる傾向のあることは、誠になげかはいしいことである。具體的に言ふならば「私は體操はやれません」「私は讀方なら出来るが、唱歌をやつたことはありません」など、それが當然の如くに考へ、もし幸ひにして其の科の得意な教員でもあると、有無を言はず一切おまかせのまゝ、其の時間は自己の休養の時間と考へちがひして、どの様に其の教員が自己の學級の兒童を教へてゐるかを省ない先生がある。これで、はたして重大な使命を負はせられた教育實際家のとるべき態度であると言ひ得るであらうか。吾々はよく、全人的な徳化に最善の努力を注ぐには、全教科に與へられた使命を全的に細心の注意をもつて精進せねばならぬと言つてゐる。だが、かうした自覺に立つての探るべき先生の態度であると言ひ得るであらう。

吾々日々教壇に立つてゐる實際家の、猛省三省しなければならぬ大きな問題ではなからうか。

尤も、吾々實際家の日常生活の實狀からして、一人の力をもつて、各科の眞髓を會得するといふことは、容易なことではない。しかし私は、各教科の眞髓を一人の力でもつて究めよ、と

要求するのではない。出来るだけの努力をもつて、全教科に對して關心をもつてほしいと言ふのである。各教科に亘つて一通りの精神だけはつかんで欲しいといふのである。もし吾れにさうした用意と準備がある時には、更に進んで一教科の眞髓を會得するならば、自ら他の教科に對しても其の精神が生かされることであらう。「一法究盡は萬法究盡のもと」といふこともある。

よく我々は是れまで聞かされたことであるが、地理の講習に行くと、地理でなければ教育が出来ぬかの如く聞え、圖畫の講習に出ると、圖畫でなければ教育が出来ぬかの如くに聞えたものである。是れがまた大きな反動となつて、體操が盛んになれば體操ばかり教育でないと不満をならべ、手工に力を入れると手工ばかりが教育か……と飛んでもない處でぐづたものである。是れは何れも吾れに一法究盡して萬法究盡する準備がないためである。

私は、最近體操の授業をかなり多くみてゐるが、あの踏箱運動として踏箱を飛ぶ時の動きがよく讀方の教材を取扱ふ時の骨に通じてゐることを知つた。御承知の通り、あの踏箱をとぶ時箱の位置、助走の距離、それ／＼條件となるべき指導が澤山あるであらうが、あの時兒童達が踏箱に勝つてもいけない、踏箱に負けてもいけない、生きた踏箱として兩方からピシヤーンと

あふのでなければ、直立のままの姿になれないのではないかと思はれる。別に踏箱が生きてゐるのではないが、さうした働きがなければ子供は前に倒れるか、後に倒れるにきまつてゐる。其處に指導者としての教師の力が流れて行くのでなければ、必ず思はざる支障が兒童に起ることであらう。讀方學習の實際でも同じことで、教材が勝つてもいかぬ、兒童が勝つてもいかぬ、兒童と教材と一つの流れにのつてこそ、眞剣な國語生活が出来るので、然らざればかへつて兒童の國語生活を傷けることが多いのである。

私は、この精神で縣下の指導監督の御相談にあづからうと努力をして來たが、やつぱり世の中は思ふやうに行かぬもの、思はざる障害のみ横つて、思ふ十分の一も實現し得ないことを遺憾に思ふものである。

私は今、シヨパンの曲を思ひ出したので、結論として述べる。

シヨパンの苦痛は、悶えはピアノに向ふ前であつて、一度ピアノの鍵に指がふれると、一切の苦痛も、悶えも消え失せて了ふといふことをきいたことがある。シヨパンが、フランスの社交場で初めて演奏會があつた時、その開會間際に祖國の革命をきかされた。祖國愛に燃えたシヨパンの眼には、祖國の姿が浮いて來てならなかつた。ピアノに向つた時は、祖國の争亂の

場景が、マザ〜と浮いて來た。指がピアノの鍵にふれて、たゞ、ひきにひいて残されたのが、今日名曲となつてゐるときいてゐる。

吾々の日々を考へてみると、その多くは教壇に立つ前にはいさゝかの苦痛もなければ悶えもない。然るに、一度教壇にたつとどうすることも出来ない苦痛と悶えに押されて來て、身動きも出来ぬことが多いのである。

かうしてみると、吾々の日々の教壇の修行は、まだ〜眞剣味を見せてくれなければならぬと思ふのである。

以上申し述べたことは、研究されてゐる皆さんから言はせると、實に問題にならぬことではあらうが、皆さんの眞剣な批評を承つてゐる間に、只さうしたことを考へてゐる人もあるといふことを言つて置きたい爲に申したのである。

本日は、こちらの學校職員のお力によつて、有意義に終ることが出来ましたことを感謝するものである。ことに町長さんには、お忙しいところを最後まで御臨席下さいまして、何くれとなく御援助を御與へ下さいましたことを衷心から感謝する次第であります。

皆さん！ 誠に御苦勞さんでした。

郡教育會總會

(1) 序

改めて御挨拶するまでもないが、今度こちらの郡を擔當することになったので、是れからい
ろ／＼と皆さんの御援助をお願いしなければならぬことと思ふ。視學としても滿四ヶ年、今年
は五年目であるから、もはや視學としては古株になつたわけである。尤も私は、視學になつた
一年目から古株の取扱ひをされて、毎年三月には新聞辭令を貰つて來たのである。遂ひ先日も
ある方が縣廳にお出でになつて、

「視學になつてから大分になるでせうなア……」

と言はれたので、私も一寸面くらつたが、

「なに、まだ四ヶ年よりなりません。これからといふところで、視學のチャキ／＼です。」
と言つたら、

「さうでしたか、私はまたもう十年位はなるだらうと思つてゐました。」

と大笑ひした様なわけである。笑ひながらも、さう言はれると、いゝ意味にも、悪い意味に
も、いろ／＼と解釋されるが、いまだに子供を相手の罪のない生活を思ひ出されてならぬ。今
少し、役人の氣持になりたいものと、目下せい／＼勉強してゐる様な次第である。

そんなことで、若し皆さんが、從來心に描いて居つた視學に對する態度で私を見ましたなら
ば、或はいろ／＼な方面に於て物足らぬ點が多いことと思ふ。しかし、私にしてみれば、皆さ
んには甚だ御迷惑であるかも知れぬが、誠に心強いものがあるのである。

其れは、かうしてお集りの皆さんのお顔に接しますと、ひとりでに四年前附屬に居りました
時の氣持が、そのまゝに湧いて來るので、誠にあまへる様であるが、良いことであつても、悪
いことであつても、何等のわだかまりがなく語りあふ事が出来る様に思はれてならぬからで
ある。もし、其の間に私の足らざる所があつても、それは皆さんに於て充分に補つても下さる
しました、氣の付かない所があつても直接御注意もして下さることと思ひ居るのである。

只今は、須田主事さんのお話があつた後へ、まとまりのないお話をすることは相すまぬ様に
も思はれるが、さうしたあまへた心と、かうした機會が容易にないことと思ひますので、常に

考へさせられてゐる問題の二、三を申述べて今日の御挨拶に換へたいと思ふのである。

(2) 覺

悟

御承知の通り、我が青森縣の教育界も、隨時其の姿をかへて來た。私が、附屬を去つて現在の職に就いたのは昭和六年の四月であつた。當時は、郷土教育の思潮が全國を風靡して、本縣もまたその思潮に追はれ、所謂穴掘り業を盛んに初めたのである。其れが次第に國民運動となつて、彼の經濟思想問題と相關聯し、教育の生活化の叫びがいよゝゝ其の研究を深刻にしたのである。

其れが昭和八年になつて、社會問題、農村問題と進展して、お互ひの神經が存分に尖つてゐた矢先き、本縣教育界にとつては、全く思ひがけない赤化問題の不祥事件が突發して、大きな驚きを與へたのである。昭和八年の末頃から昭和九年にかけては、此の問題對策に腐心してゐたところへ、天惠のうすい本縣はまたく冷害におそはれたので、貧困兒童の救済や、給食兒童の處置に忙殺しなければならなくなつた。かうした實狀にあるの時、世は日本精神の發揚といふ聲に呼びさまされて、其れが教養の問題が、直接教育實際家に課せられた緊急の問題となり、昨年の四月三日には全國の教育者を集めての、國民精神作興大會が開かれるに至つたので

ある。本縣もまた、六月六日、皆さんのお集りを願つたことは、今尙記憶に新しいことと思ふ。

一方非常時日本の聲と、不況凶に作おびやかされた本縣は、擧げて自力更生の仕事に東奔西走し、修鍊道場が開かれ、共同作業場がつくられ、産業組合が設けられ、負債整理組合が結ばれ身賣防止の運動まで起つたのである。

昭和十年は、實に是等の問題を内に外に解決すべく精進しなければならぬ、大事な時期に遭遇してゐるのである。

然らば、内に緊張した吾々教育實際家は、今日外に於て如何なる立場に置かれてあるかを思ふ時、遺憾ながらそれはすべて吾々教育實際家の手を離れた没交渉の問題として、展開されてゐることを知らねばならぬ。擧げて縣民が自力更生の仕事に東奔西走してゐるの時、ひとり教育實際家のみが置き去りにされてゐるかの感をもつものは、私のみではあるまいと思ふ。稍もすれば、教育の事業は特殊なものであつて、社會の實狀がどう變化しようと、農民の生活がどうせつばつまらうと、特殊な教育は特殊な精神であるべきとされてゐたゝめに、常にさうした實生活から、置き去りにされたばかりでなく、かへつて教育者に對して反感の聲さへきくに至

つたのである。

吾々は、此の聲を單なる聲として、象牙の塔にたてこもつて聞き流してよろしいであらうか。吾々は此處に、我々の教育方針を従來の如く、學校内部的なものとしてではなく、全く新たな覺悟をもつて、小學校から青年學校へ、青年學校から一般社會教育へと、凡ての用意と準備とをもつて、一糸亂れざる、體系だつた學校經營に當る一大決心をもたなければならぬと思ふのである。

然らば、此の一大決心に最も大事なことは何んであるか。それは、最も勇敢であらねばならぬ教育界へ、最も明朗でなければならぬ教育實際家に、最近投げられた「陰鬱」を、氣分を、思ひきつて捨てることである。陰鬱な氣分をさつて、明朗な氣分に生きることである。

(3) 陰鬱と明朗

何故に教育者は陰鬱で明朗になれないのであらうか。其の原因にはいろ／＼あるであらうが其の一つは内的原因で、其の二つは外的原因である。外的原因に對しては、社會一般に對して要求しなければならぬことであらうが、内的原因に對しては、自らに求めることによつて其の幾分かは除去することが出来ることと思ふ。社會に求める前に、先づ自らに求めることは、教

育者としてのお互ひがとるべき道の最大なるものではあるまいか。

先づ、教育者は自己の天職たる教育を味ひ樂しむことである。と言ふと、そんなことは百も承知であると言ふかも知れぬが、其の百も承知であるといふお互ひが、どうした氣分のもち合せか、小學校の教師であると言ふことを不快に思つてゐることが多いことである。教育者にのみ與へられたと思つてゐた天職といふ言葉は、何時しか他の社會に奪はれたかの様な感じさへ此頃持つ様になつた。早い話が、宴會の席上で、

「あなたは學校の先生でせう」

と女に言はれると、如何にも氣まりが悪さうにもぢく／＼して、顔を眞赤にしてゐるのをよくみる。私もその一人であるかも知れぬが、かうした氣分は教育者自らが作つたものか、それとも社會と環境とがさうあらしめたものか、もつと勇敢であらねばならぬ教育者が、如何にも意氣地のない團體として見くびられる様になつて、愈々積極的な行動を見ることが出来なくなつたのである。

強ひられてすることと、自らそこに思ひ及んで實行することとは、天地のへだたりを見せるものであるが、不平と不満とは、いつしか自らを陰鬱ならしめてゐることに氣付かずにゐるこ

とが多いのである。教育者も人間である以上現在の制度のまゝでは、明朗なれと言つても言ふ方が無理であるかも知れぬが、しかし、今少し明朗快活であつたならば、凡ての問題も上手に裁かれ、社會の制裁ももつとゆとりを生ずるのではないかと思ふのである。或る人が、教育者を評して、

「學校の先生位、不景氣な顔をしてゐるものはない」

と言はれたが、成る程さう言はれると、お互ひが今もつて不景氣な顔をしてゐる。時たま青森へ出張しても、旅館の女中を相手に晩酌の一本もやれば大いに發展した方で、其れ以上發展すれば特種になるといふ始末だから、陰鬱ならざるを得ない。

處がまた、教育者ほど人前を飾るものはない。また、教育者位勿體ぶるものがない。言ひたいたことがあつても容易に言はない。きゝたいことがあつてもめつたに口を開かぬ。きれいな女をみてもきれいだとも言はぬ。やさしい女を見ても見ない振りしてみる。如何にも勿體ぶつて偉さうにしてゐるが、それでゐて思つたことは何時までも忘れずにくよくよしてゐる。

是れは一つの話、先日面白い話をきいたから、まだお聞きにならぬ方に御紹介する。ある兄弟が、賑やかな街を通つた。すると向ふからすばらしい美人がやつて來た。すれちがつた

兄は思はず、

「これはきれいな女だ」

と、大きな聲で言つたので、びつくりした美人は顔を赤くして走つて行つた。兄と肩を並べ歩いてゐた弟は、顔を眞赤にしてだまつて家へ急いだのである。家へかへつてから如何にも謹嚴な態度でもつて言つたものである。

「兄さん！ 貴方にも困つたものです。街中であんな大きな聲を出して、私は恥かしくつて恥かしくつてとても兄さんと一しよに歩けませんでした……」

と言つたら、

「これは馬鹿な奴だ。貴様はまだあの女のことを思つてゐるのか……」

と叱つたと言ふことである。與謝野昌子は歌つた。

「やははだのあつき血潮にふれもせで 淋しからずや道をとく君」

どうしてもつと自由に、もつと人間としての世界にとび込んで、喜びを喜びとして求め得るだけの勇氣がないものであらうか。さうした生命の力があれば、もつと明朗な快活な人間になり得るのであらうが、まことに情けないことである。尤も、やははだにふれ過ぎて問題をおこ

してくれりと、視學はよけいな心配をしなければならぬが……

(4) 學校經營

學校經營にしてもさうである。勿論、學校長は何處までも學校精神を理解し合ふ中心指導者であり、統合者であらねばならぬ。職員も亦、よく學校の精神を理解しあつて、協力に生きるものでなければ、お互ひの學校は經營されて行くことは至難のことであらう。しかし、其の間、校長も職員も決して陰鬱であつてはならぬのである。従つて、校長と職員と、或は教育上の意見がことなつても、また職員同僚の間に議論を闘はす様なことがあつても、一旦それが學校としての問題に決定された以上は、いさゝかもこだはることなく、忠實に、積極的に實踐するだけの明朗さがなければならぬ。

私は、この三月卒業された方に、私を訪問してくれた時、とくにこの事を強く申上げた筈である。よりよい學校をよりよい教育の實績をみようとして職員會議を開いた時には、思ふ存分意見を主張せよ。しかして一旦學校の問題として決定した場合には、たとへ個人として全く反對なことであつても、決して不平不満があつてはならぬ。一切を忘れ、一切の理窟をぬきにして、學校のために、兒童のために、不動率先して働いてくれ……と言つたつもりである。

勿論、お互ひが人格的に優れた校長なり、訓導なりによつて、理論的にも、實際的にも徳化されて行くことを望んでゐるが、しかし、それは言ふべくして容易に求められない。其處にお互ひが助長、補短、互譲融和の精神が大事なのである。然るに、學校問題として今日までに公にされたものは、其の多くは仲間同志の嫉妬排撃によつてなされてゐる。誠に情けないことである。だが、其れではすまされぬ。師表の確立は第三者から要求さるべきものではあるまい。お互ひがもつと眞剣に考へねばならぬ大きな問題である。此の問題はひとり教員ばかりではなく、教員對監督者たる視學の間にも考へねばならぬ問題である。視學は、視學といふ位置によつて、單なる行政事務をとり、皆さんの進退をさび刀をふりまはして左右するばかりが能ではない。或はそれでもつて皮相的に榮譽を勝ち得たと思ふ方があるかも知れぬが、教育はそんなものではなからう。一面に於ては、縣下教育實際家の自由な研究を奨励すると同時に、其の研究の効果を批判し、是れを正しき道に指導し、純眞に育つて行く兒童を、其れがための犠牲に供させない様にする責任をもつてゐなければならぬ筈である。

然るに、縣下の教員は、視學にさうした見識を要求して居らぬ。視學といふ位置による權威に押されて、轉々として不平を言はぬ歴史的な傳統にあることを當然に考へてゐるのが多い。

私は、さうした事實に幾度となく接し、眞剣であるべき教育界に、かくも小策の弄されてゐることを情けなく思ふのである。

かうした點は、校長對職員にしても、教員對視學にしても、素裸になつて語り會ふのでなければ、決して更生されて行く青森縣の教育は、吾々青森縣人の力によつて建設されぬといふことを、はつきり考へなければならぬ。

考へ様によつては教育も藝術である。形ばかりではない。生命がなければ腐敗してくる。腐敗すれば、陰鬱になるのが自然である。陰鬱になれば不愉快である。不愉快は不平不満を生み出す動力となるのである。これがまた人情である。男でも女でも同じこと、何とか明朗な生活をみるのが出来ぬものと、この二三年泌々と感じてゐるのである。

縣下四千四百餘人の小學校教員が、若し一團となつて陰鬱を去つて明朗になつたとしたならば、どんなに明るい教育界がひろげられることであらう。思ふて見ただけでも朗らかなことである。しかし、其のほがらかな間に、國家の使命を體しての青森縣獨特の教育が生れたとすれば、どんなにか有りがたいことであらう。

(5) 教權の確立

私はこゝに於て、結論として教權の確立について一言してみたい。

社會的生活事情が複雑多岐になるにつれて、其の孤立的立場をゆるさぬ教育界に、直接影響するところのものは、其の公的と私的とを問はず、著しく増加して來たのである。従つて、是等社會的事情に制せらるゝところのもの、或は是れがために教育の徹底を缺くことのあることは、誠に遺憾であるとの非難の、世上にあることに對しては、我々教育界の實際にあるものは眞剣な態度をもつて、再検討せねばならぬことであらうと思ふ。吾々は決してさうした事實を信じたことはないが、しかし、今や本縣はあらゆる方面に於て、其の刷新と向上に、最善の努力を續けてゐるの時であるから、お互ひが深く自らに省み、いさゝかにてもかゝる非難を受ける様な行動をとることなしに、嚴然たる態度と、確固たる信念とをもつて、教權の確立をみたいものである。其處に吾々は、動かざる眞の教育の姿をみたいものである。凡てを運用する制度のことは暫らく置いて、何と言つてもお互ひが其の職務に對して深き自覺を持つことである。

勿論、此の問題は、皆さんにだけ要求することではなく、監督の位置にある吾等自らにも要求することではあるが、從來の具體的事實からすれば、まさに公明正大ならんとする教育的意義と、信念とを、やゝもすれば足もとからくづされてゐることが多いのである。正しく生きん

とするもの、強く起たんとするものをして、幾度か涙なくしてはあきらめられぬ様なことがある。

團結力の弱きもの、嫉妬心の強きものは教育者に最も多いと言ふ非難も、或はと思はるゝ節があるのである。此の點に對しては、とくに吾々青森縣人は反省する必要がある。敢へて教權の確立をもつて他に抗せんとするものではない。自らを捨てず、自らを損することなく、教育の尊嚴なることを自覺して、眞に教育の徹底を望む一念からである。お互ひは、其れがために最善の努力を惜まぬ様致されたいものである。

(6) 結 び

櫻花はすでに散つて新緑の色は一層深くなつてゐる。地にも空にも、もえさかつた春の記憶は、更に濃厚に我等の身邊にせまつてゐる。吾等四千四百有餘の仲間が、心深く教育的信念を確持し、頭上高く教育理想をかゝけて、朗らかに縣教育の爲に精進するならば期せずして其の寄與するところのものが多からうと思ふ。期せずして我等の教權が確立することであらうと思ふ。

まとまりのない話を、ながい間御静聽下さいましたことを感謝して、今日の御挨拶とする。

女 教 員 會

私は、これまで女の先生達の會合にお邪魔したことは四回程あるが、其の都度感じたことが一つある。それは

「どうして皆さんのこの強い叫びが、男の先生と一しよになるとかくれて了ふのか」

と不思議でならぬことである。御世辭をいふ譯ではないが、この意見、この主張がなんで通らぬことがあるものかと内心敬意をもつておきゝることが多いのである。女の先生なるが故に、男の前に遠慮するのであらうか、それとも……併し、母となつて成長して行くまことの心には、決してさうした弱さをみせない。單に弱さを見せないばかりではなく、どんな力をもつてしても押へることの出来ない尊い力が備はつて來るのである。歴史的に残された。

「女は弱し、されど母は強し」

と言ふ言葉は、何時の時代になつても實在の姿となつて語られてゐる。吾々はこれを母性愛

と言つてゐるが、弱い女が母となることによつて、強い女になるとすれば、まだお一人の方には、なるべく早く母となつて強い女になつていたゞきたい様な気がする。

尤も、母性愛には、自然的母性愛と、純粹母性愛との二つの姿をみるのであるが、この中の自然的母性愛は御承知の通りの、吾が子に對する盲目的な愛もそれである。此の盲目的といふ言葉は、時には吾れにとつて都合のいゝこともあるが、それは決して正しいことではなく、多くは神聖な假面をかぶつて自己を欺瞞することが多いのである。従つて、此の自然的母性愛が女から妻に、妻から母にいたつて再現する様になると、

「母親は我が子の嘘を足してやり」

といふ様な結果になるのである。純粹母性愛の尊さを思ふにつけても、かうした境地に母性愛の姿を念じたくないものである。

深夜の雷雨には瞳をさますことのない母親でも、赤子の泣き聲には眼をさますといふことであるから、全く理窟を超越した不思議な力が湧いて來るのである。

お互ひ経験したことであるが、夏休みなど父から貰つたお金の外に、必ず父にかくれて母からいくらかの小使を貰つたものである。私の知つてゐる方の子供さんが、今女學校にはいつて

ゐるが、日曜にはちよいと歸るといふことである。どうして來たのかときくと、

「今日は日曜ですもの……」

と答へる。父は是れをきくと、

「早くかへれ」

と言つて外へ出て行くが、何も日曜だから歸つたのではなく、母の神秘的な直覺力に恵まれたいからである。世の中の凡ての人が捨てゝも、否、兄弟姉妹に捨てられても、母だけは吾が子を捨てることはない。たとへより以上の盲目的な行爲が途中にあつたとしても、最後まで吾が子を抱いてくれる母である。いくら年はとつても故郷はなつかしい。母はしたはしい。お晝のひとゝきを畔に休んで、ふところから出してくれた母の乳を、両手につかんで呑んだ幼な時を思ふと、全く泣きたいほどにしたはしくなつて來る。

私は、かうした母と子のつながりの心こそ、教育精神の究竟の相であると思ふ。相對ながらにして絶対の境にあるこの母心の世界でなくては、眞の教育は出來得ぬことと思ふ。「母校」といふ言葉はあるが、「父校」といふ言葉はきかぬ。近頃母性愛といふ言葉をよこ取して、雑誌や讀みもの、中に、父性愛などと言ふ人もあるが、其れは問題にならぬ。

讀みものと言へば思ひ出されるが、フランスのユーゴーが描いた「レ・ミゼラブル」の母にしても「ノートル・ダム」の母にしても、共に母性愛の權化として讀むことが出来る。皆さんもお讀みになつた鶴見さんの小説「母」の序文の一節に、

「……今日の日本女性の美と徳とは、たゞ無代價に天から降つて來たものではなくして、二千五百年來の涙の結晶である。此の涙を、最も多く日本の女性が流して來たのは、戀人としてゞもなく、娘としてゞもなく、妻としてゞもなく、公人としてゞもなく、實は母としてゞあると私は固く信じる。日本人に偉人ありとせば、それは母たる日本の女性の贈物である……」

と言つてゐる。女から妻に！ 妻から母に！ こゝに至つて婦人の生命が活躍する。女には妻には、古今東西の別はあつても、母の情には古今東西の別はない。また教育の有無もない。母は子を胎育することによつてみがかれて行くのである。

さうした母となるべき皆さんを！ 否母となりつゝある皆さんを、何故男の方は、

「弱きものよ！ 汝は女なり」

といふのであらうか。私もまた男ではあるが、その卑怯な心をにくまずには居られぬので身

る。と同時に、

「私は女だから……」

といふ自らを卑下する皆さんに一段の奮起を望むものである。

もし、さうした資料を國定教科書に求めるならば、一層其の責の大なるを知ることであらう。さうした母性愛に育まるゝ教材を日々教壇の上に取扱つてゐる皆さんを思ふと、如何しても偉大な力を其處に求めてほしいものである。ことに、最近の様に女の先生が多いと言ふ苦情を申込まれてゐる場合、最大の反省を惜んではならぬのである。

裁縫の教授は、ミシンの技術師を養成することであつたら、また、それが裁縫教授の目的であつたら學校で教へる必要はない。宜しく裁縫師の弟子とするがよい。學校の裁縫教育は、一針々々縫ふことによつて、小さな針穴に靜かな心を置いて糸を通すことによつて、崇高にして莊嚴なる母の心を自覺させることでなくてはならぬ。其處に母の心が培はれて行くのでなければならぬ。家事教育は、單なるコックを養成することであつてはならぬ。洗濯することによつて、調理することによつて、母の心を感じて行くのでなければならぬ。教育の究竟地、それは母性愛の境地でなくてはならぬ。其處に自由な天地をもつてゐる皆さんは、現今の偏知的教育

を救つてくれる救主である。男の方がとうてい及びのない天地を皆さんがもつてゐながら、何故弱い女になつてゐるのであらうか。是れまでの女はそれでいゝかも知れないが、更生の途上にある本縣の女の先生は、強い女であり、強い妻であり、強い母でなければならぬ。此の點については、私は皆さんに大きな期待をもつてゐる。

何卒、自重自愛、皆さんの結束した力によつて、本郡の教育界を一新されんことを望むのである。及ばずながら、私は皆さんの力となることを少しも惜まぬものである。本日は、ほんの感想の一端をのべて御挨拶の言葉とする。

産業戦士

昭和十七年十二月十五日から一週間、私は北海道夕張空知二郡にわたつての鑛山を視察して幾多教へられた點があつた。勿論吾々視察するものに對しては、其の不利なところを見せぬことであらうし、また、半日や一日の日時では其の詳細を知るよしもないが、しかし皮相的な

素通りの視察であつたとしても、其の受くる六感の働きは「成る程」といふ雰囲気だけはつかんで來た様な感じがするのである。

其の第一は、眞實を知ることが實踐の第一歩であるといふことである。讀物を通して、また視察者や勤勞者を通して一通りは知つてゐた筈の炭坑も、何處かにしつくりしないものがあつたのである。それが現場に黙々として働いてゐる勤勞戦士と語りあつて、ある點まで解決されたことを感謝するのである。其れでは、是れまで何が割りきれなかつたのかと言ふと、(2+2)(4)になるといふ様な確答は出來ないとしても、今日青年を指導するにしても、兒童を教へるにしても、鑛山の負はせられてゐる國家的使命を自覺させ得る信念と力強さを持つたことを喜ぶのである。

第二は、生産の戦ひで大東亞戦を勝ちぬかなければならぬと言ふ熱烈な氣魄と、國家から割りあてられた炭量だけは、是が非でも採炭しなければならぬといふ決心とが、鑛山一ぱいにあふれてゐることである。全く此處にも戰場があるのだといふ感激がひし／＼と身をせめたのである。此の點地方の生活にあまりに恵まれすぎた挺身隊も、時局の真相にふれて其の認識を新たにしてゐることと思ふ。

第三は、勤勞者の態度は私の豫想を全く裏ぎつてくれたことである。驚いたと言ふよりか、ある敬虔な念に打たれたことである。眞の産業戦士として挺身されてゐる姿は、寧ろ私には尊くみられたのである。時には合掌したい氣持になつたこともある。かうなると、戦場の第一線も、銃後の第一線も、少しも變りがないのである。教壇上に描いてゐた鑛山の産業戦士の生活が、あまりにも認識をかいてゐたことを私は恥ぢたのである。

第四は、すくなくとも従來吾々が鑛山に對して抱いてゐた「恐怖心」や「危険性」は取り去つていふことである。技術の問題は吾々に分ることではないが、坑道の保安設備にしても採炭法にしても近代科學の力をもつてしてゐるのだから、自らに用意と注意さへ怠ることがなかつたならば、決して不安を感じることがないといふことである。勿論、勞苦も多しことであらう。絶對の危険が無いとは言ひ得ぬことであらうが、大東亞戦争を勝ちぬく一戦であると覺悟するならば、決しておそるゝことはないのである。

第五は、福利施設の完備されてゐる點である。醫療設備にしても、教育施設にしても、或は娛樂設備にしても實に健全に其の充實を計つてゐる。尤も、其の鑛山によつて、それぐの特色もあるし、要求しなければならぬ多くの問題も残されてはゐるが、所謂鑛山としては是れまで

もつてゐた認識を、悉く新たにしてくれたのである。私はさきに、軍需工場を視察して、その飛躍的發展と内部の完備に驚いたのであるが、今また一層其の感を深くしたのである。以上は自らの學校經營を通して反省され問題の二三を述べたのであるが、何れの鑛山を視察しても實に資源確保に處する勞力、設備、精神の一體化された有機的消化が、完全に全山の生産活動を盛んならしめてゐる。

大東亞聖戰完遂の一途に、一切の理窟を一擲して敢闘してゐるあの戦士達の眞剣さは、誠に職場即戦場以外の何物でもない様な感じをもつたのである。入山式にも列した。坑口朝會にも參じた。採炭訓練所ものぞいて見た。そして座談會も開催してもらつた。だが、私達の最も嚴肅な感に打たれて思はず襟を正したことは、坑口の廣場に行はれた朝會である。三百餘の挺身隊が隊長の號令で神前に於て職場の戦士である鑛山の誓約を朗誦し、鑛長の訓示に隊長、隊員を代表して之に答へ、歩武堂々愛國行進曲を元氣一ぱいに歌ひながら入坑するのを見送る所員の親心をみて、思はず目頭を熱くしたのである。全く皇軍の敵前上陸寸前の壯絶なるさまを思ひ浮べたのである。

私は乞はるゝまゝに、次の様な激勵の言葉を述べて感謝と感激の心をさゝげたのである。

一皆さん、御早う御座います。毎日まことに御苦勞さんです。私は青森縣のものです。學校に關係して居りますところから石炭確保挺身隊の皆さんを慰問激勵すると共に、鑛山の實狀を視察する一行に仲間入りしまして、昨日こちらに参つたのであります。

今日は、恰も北海道全道の鑛山が、一齊に増産確保の感謝祈念する日にあたつて居ります。

全山のすべてのものがやうやく眼をさまして、これから活動の世界にはいらうとする夜の明け方を、此の坑口に於て皆さんとかうして語りあふと言ふことは、私の一生忘るゝことの出来ない感激であります。

此の一週間、私達は各鑛山を視察しまして、あの地下數百米の深き坑道の中に、一日中太陽を見ることなく、汗と油に黙々として戦ひぬいてゐる皆さん戦士の尊い姿に接しました時、私は最後の突撃に一命をさゝげてゐる將兵の姿を戦線に思ひ浮べて、只々感謝の心に頭がさがつたのであります。まことに有りがたう御座います。

是れで、生産確保の戦ひに決して負けなれないといふ力強さをもつたのであります。

皆さんも御承知の通り、大東亞聖戰も一週年を過ぎて十一日になります。相手のアメリカ

カは是れまでの策戦を全くかへまして、負けてもく日本攻撃の態勢をとつて來たのであります。いさゝかも油断をゆるされないのであります。アメリカは決して弱い國ではありません。豊富なる資源もあります。力もあります。生産の戦ひをもつては、實に容易ならぬものがあります。けれども此の生産の戦ひにも必勝の信念をもつて勝ちぬかなければならぬのであります。最早吾々國民には、老も若きもありません。男も女もありません。一億一心、國防總力をもつてあらゆる資源確保に邁進しなければならぬのであります。とくに石炭確保は最も急務とされてゐるのであります。

皆さんは、實に國家の重大なる使命を背負つてゐるのであります。私はこの際、皆さんにお知らせしたいことがあります。それは、

畏くも 天皇陛下に於かせられましたは、本月十二日伊勢神宮に御親拜あらせられたこととであります。至尊の御躬をもつて、皇祖神靈の御加護を冀はせられましたことは、皇國三千年の國史を通じてかつてないこと、拜察されるのであります。かくまで大御心を勞し給ふ聖慮の程、只々恐懼感激の外ないのであります。

其の昔、今から約六百六十年前弘安四年、龜山上皇は躬をもつて國難に代らんことを祈